

私立獣医科大学における獣医学教育の 相互評価報告書

(平成 13 年度～平成 17 年度)

平成 19 年 6 月

私立獣医科大学協会

はじめに

高度専門職業人としての獣医師を養成するわが国の大学は、その基盤となる獣医学教育の現状について、国際的にみて満足できる状態ではないことは明らかである。平成9年2月に(財)大学基準協会は獣医学教育の国際化に向けて「獣医学教育に関する基準」(以下基準)を改定し、その中で獣医学教育に必要な教育課程および教員組織などを明確に示した。それ以後、国公立の獣医系大学、関係省庁、関係団体などの関係者を中心にして、獣医学教育の改善に向けて活発な議論が展開された。

私立獣医科大学協会(以下本協会)は春・秋に開催される協議会および6月の総会において、わが国の私立獣医科大学における獣医学教育の充実に向けて、その改善策あるいは情報交換など熱心に協議を重ねてきた。一方、国立大学では獣医学科を有する10大学を再編・整備するなどの必要性が指摘されたが、残念ながらその願いは叶わず、平成16年度から国公立大学法人に移行し、各大学が自助努力で改善を目指すことになった。

本協会でも、各大学の自助努力が求められる中で平成12年6月に「相互評価委員会」を設置し、それぞれの大学における獣医学教育の現状把握、問題点の洗い出しおよび短期・中期改善目標の設定など自己点検・相互評価を行い(平成6~12年度)、平成14年6月に「私立獣医科大学における獣医学教育の相互評価報告書」として公表した。その後、平成16年8月には「私立獣医科大学大学院における獣医学教育・研究の相互評価報告書」、さらに、平成17年6月には「私立獣医科大学における獣医学教育充実に関する短期改善目標の達成度調査報告書」が出された。

私立獣医科大学は、それぞれの大学、学部の理念があり、その目標に向かって獣医学教育・研究がなされているのは言うまでもないが、各大学における獣医学教育の充実に向けて改善の取り組みを検証し、継続的に評価することが必要であるとの認識で一致し、再び平成13年度~17年度の5年間について自己点検・相互評価することとなった。また、前回の報告書に記載された中期目標の達成度についても検証した。比較的短期間でのアンケート調査であったにもかかわらず、各大学とも快く回答が寄せられた。

現状では、各大学とも獣医学教育の改善努力は見られるものの大学基準協会が示した「基準」には遠く及ばない。わが国の7割の獣医師を養成している私立5獣医科大学が率先して獣医学教育の改善を図らなければ、国際化に対応し、社会の要請に応える獣医師を育てることは難しいことになるであろう。今後、国公立大学を含めて、獣医学教育の改善に向けた新たな議論が必要である。

いずれの大学においても、質の保証システムの一環として自らの自己点検評価に加え、文部科学大臣が認めた認証機構による評価(第三者評価)を受けることになるが、わが国の獣医学教育改善のためには専門別(獣医学教育分野)第三者評価が必要であろう。

最後に忙しい中、相互評価作業に取り組まれた委員各位にお礼を申し上げるとともに、本報告書が各大学における獣医学教育の充実・発展のために役立つことを願って止まない。

平成 19 年 6 月

私立獣医科大学協会
相互評価委員会
委員長 高瀬勝晤

目次

I	経緯と調査方法	1
	1. 私立獣医大学における獣医学教育の相互評価に関する経緯と調査法の概要	1
	2. 調査項目	2
II	委員会構成	3
III	各調査項目における相互評価	5
	1. 教育の理念と目標	6
	2. 教育・研究・事務組織	9
	3. 財政	12
	4. 教職員等	15
	5. 学生	43
	6. 教育課程	51
	7. 施設・設備	61
	8. 自己点検・評価体制	69
	9. 全国横断的評価に伴う私学上乘せ基準及び評価項目	78
	1) 教育課程	78
	2) 教員組織	78
	3) 研究活動	79
	4) 改善目標の設定	80
	10. 全体の取り纏めと今後の課題	100
IV	相互評価委員会議事録	105

I 経緯と調査方法

1. 私立獣医大学における獣医学教育の相互評価に関する経緯と調査法の概要

昭和 58 年（1983）に学校教育法が一部改正され、獣医学修業年限が 6 年一貫教育となり、修業年限 4 年制の博士課程が設置された。6 年制獣医師を世に送り出して以来 20 年になろうとしているが、獣医学教育の現状を見ると国立大学ではいまだに農学部の 1 学科に位置付けられ、教育研究組織が小規模であり、施設・設備を始めとする教育環境は整っていない。また、獣医師として社会にでる約 1000 名の獣医師の約 7 割の教育を担っている私立大学 5 校の教育研究組織・施設も学生定員からも不十分であると言わざるを得ない。今日の社会情勢は、食の安全・安心の確保をはじめ海外からの動物感染症の侵入防止、ヒトと動物の共通感染症対策の推進、家庭動物に対する動物医療体制、動物愛護・福祉や野生動物保護をはじめとする自然環境保全対策の整備などの獣医師および動物医療が果たすべき役割に対する社会の要請はこれまで以上に大きい。これに応え得る獣医師の養成が獣医学教育を担当する大学に課された責務である。しかし、これらの期待に応える高度専門教育の実施には、教員の質の改善はもとより、獣医学教育を支える実務教育施設・設備の拡充と教育組織の増員と支援体制、カリキュラムの充実などが図られることが最重要課題である。

平成 9 年 2 月には財団法人大学基準協会より獣医学教育の国際化・高度化への対応への必要性を踏まえて「獣医学教育に関する基準」（以下基準）が改訂された。獣医学教育の改善と充実を図るためには自己点検と自己評価は不可欠であり、平成 12 年 7 月に全国大学獣医学関係代表者協議会による「獣医学教育の横断的評価委員会」が設置され、「自己点検統一フォーマット」による調査票が 16 大学に送付された。平成 13 年 3 月「獣医学教育の横断的評価のための調査報告」が公表された。

私立獣医科大学協会に加盟する 5 大学は春・秋と 6 月総会において獣医学教育の改善と充実のために定期的な協議会を開催している。前述した通り 5 大学は我が国の獣医学教育の根幹を担っており、加盟校における獣医学教育の現状把握と比較解析などの自己評価・点検は獣医学教育の改善運動において極めて重要であるとの認識に立って平成 12 年 6 月の総会において私立獣医科大学協会「相互評価委員会」が設置された。全国 16 大学で行われた「横断的評価」では平成 6～10 年度の資料が用いられていたため平成 11 年度と 12 年度の資料を加え、さらに新たな「私学独自の上乗せ基準とその自己評価」について調査が行われ、平成 14 年 6 月 14 日の私立獣医科大学協会総会で「私立獣医科大学における獣医学教育の相互評価」報告書が承認された。

一方、平成 16 年度から国立大学は国立大学法人に移行し大学運営を巡る事情は大きく変化している。大学の教育研究活動等の質を保証に関し、新たに国の認証を受けた認証評価機関が

大学を定期的に評価し、その評価結果を踏まえ、大学自らが改善に当たるとする第三者評価制度が導入された。大学は教育及び研究、組織及び運営並びに施設・設備の状況について自ら点検及び評価を行い、結果を公表するとともに、教育研究等の総合的な状況について7年毎に文部科学大臣の認証を受けた認証機関による評価を受けることとなった。従って我が国の獣医学教育改善するには個々の大学における自己点検・評価に加えて、大学間の横断的評価が不可欠となった。

私立獣医科大学協会では平成17年6月10日の総会で第4次相互評価委員会（委員長：高瀬勝晤）を発足し、平成13年度から17年度における教育活動に関する点検調査並びに中長期改善目標の達成状況について調査することが決定された。これを受けて相互評価委員会では平成18年9月21日の秋の協議会の際に会議を開催し、第一回のアンケートに沿って年内に調査を終えて、各委員で分担取り纏めを行い、平成13～17年の評価を冊子体として平成19年6月の総会までに完成させた。

2. 調査項目

調査項目は以下の通りである。

- 1) 教育の理念と目標
- 2) 教育・研究・事務組織
- 3) 財政
- 4) 教職員等
- 5) 学生
- 6) 教育課程
- 7) 施設・設備
- 8) 自己点検・評価体制
- 9) 私学上乘せ基準および各大学の自己評価
 - (1) 教育課程
 - (2) 教員組織
 - (3) 研究活動
 - (4) 改善目標の設定

II 委員会構成

委員長 高瀬 勝悟（北里大学）
委員 有嶋 和義（麻布大学）
今井 壮一（日本獣医生命科学大学）
内田 英二（酪農学園大学）
金山 喜一（日本大学）
高井 伸二（北里大学）

Ⅲ 各調査項目における相互評価

1. 教育の理念と目標

私立5大学にはそれぞれ建学の精神が掲げられており、それに基づく教育の理念が設定・記述されている(表1)。さらに各大学においては、この教育理念を具現するための教育目標と育成する人材像が記述されていることは等しく評価できる。

つまり、各大学の教育理念の下、社会の要請に応えられる高等専門職業人としての「獣医師」を養成するという強い決意と意欲が感じられる。

育成する人材の具体的キーワードとして酪農学園大学は「国際性」、「創造性」、「深い教養」、「人間性」などを挙げている。北里大学は「開拓」、「報恩」、「叡智と実践」、「不撓不屈」という建学の理念を掲げている。日獣大は「人間愛」、「動物愛」、「生命倫理」、「動物愛護・福祉」、「環境保全等に貢献し得る科学者」などを挙げている。麻布大学は「社会平和」、「科学的知識・技能・倫理」、「社会貢献」などを挙げている。日本大学は「国際性」、「高い教養」、「深い人間性」、「社会貢献」などを掲げている。これら各大学が掲げるキーワードはそれぞれの大学の建学の精神ならびに教育理念をよく反映しており、各大学の姿勢に高い評価が与えられるべきであると思われる。

一方、近年においては獣医学および獣医師に対する社会の要請は高度かつ多岐に亘るに至っている。このような状況下において私立5大学はさらなる自助努力によって社会の要請に応えうる獣医師の育成に努める必要があると考えられる。

表1 教育の理念と目標

大学	教育の理念と目標
酪農学園大学	<p>理念：「三愛精神」、「健士健民」および「実学」の思想に基づき、獣医学とその関連科学の教育ならびに研究活動を通して、生命・自然を尊ぶ豊かな人間性を育み、人類の福祉および動物・人・環境の調和と共存に貢献することを本学部の理念とする。</p> <p>目標：本学部は、獣医学と関連科学の教育・研究を実践する学部であり、上述の理念を実現するために以下の目標を掲げる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 獣医学とその関連科学を創造的に発展させ、その成果を教育・研究ならびに普及活動に反映させるとともに、国際的視野に立って、動物と人の健康保持、食料の安定供給および環境保全に寄与する。 2. 臨床とその基盤となる諸科学の教育を通して、創造的かつ実践的獣医師となりうる人材を育成する。 3. 幅広く深い教養と専門知識・技術および総合的な判断力を涵養し、健全で人間性豊かな生命感と社会的使命感を持った人材を育成する。
北里大学	<p>北里大学は、近代医学の黎明期に偉大な足跡を残した北里柴三郎博士の学統を嗣ぎ、博士が身を以て示した「開拓、報恩、叡智と実践、不撓不屈」の精神を建学の理念とし、この理念の下に広く生命科学の諸分野で、学理と実践に拠って社会に貢献することを目的とする。</p> <p>獣医学科に在っては、動物医学としての獣医学の学理を究め、獣医臨床、畜産、公衆衛生、環境科学、パラメディカル分野を含む、広範な生命科学領域において、建学の理念を實踐に表し得る人材の養成を目標とする。</p>
日本獣医生命科学大学	<p>日本獣医生命科学大学の教育理念は「敬讓と協調」「慈愛と人倫」を育む科学の創生を培い、新世紀における生命科学・環境科学・食品時代の開拓者として、総合的な生命科学の知と技を練磨するとともに、人間愛・動物愛の豊かな人材育成を掲げ、この考え方に沿った教育目標を掲げている。</p> <p>獣医学は「人と動物の福祉の向上に資する」ことを理念とし、生物学に基礎を置き、獣医療及び公衆衛生を根幹とする応用科学であり、従来から獣医学はその使命を果たしてきた。しかしながら、高度化あるいは国際化が進み、専門化した生命科学の多くの分野・領域から獣医学に対する社会的要請があり、教育改革の必要性が求められている。本学では、平成16年度から大幅なカリキュラム改定を行い、順次実施している段階にある。すなわち、実践的な専門教育を充実させ、基礎的な実証分野を含めた基礎・応用科目を4年次までに終了し、後半の2年間で実践的な実証分野・応用分野を配置し、少人数のグループを編成して各グループが離合集散しつつ、付属病院、付属牧場、臨床病理検査、公衆衛生施設、病院のインターンシップ等でラウンドする実習形態としている。またより専門化した領域として獣医眼科学、歯科学、神経病学、腫瘍学、救急医療学など、実践能力を醸成する教育を配するとともに、生命観や倫理観の養成の教育や職業倫理教育を行っている。</p> <p>本学の教育目標として掲げている、生命倫理、動物愛護・福祉、地球環境保全等に貢献し、科学者として社会的使命を遂行できる能力を持ち、動物の機能や病態、疾病の処理や予防、人と動物の感染症および食品衛生や環境衛生に関する科学的知識と技術を合わせ持ち活動できる人材の育成を目指している。</p>

麻布大学	<p>麻布大学は、建学の精神「学理の討究と誠実なる実践」を教育の理念とし、「獣医学、動物応用学及び環境科学に関する専門の学術を教授研究し、その応用能力の展開を図るとともに、人格の完成につとめ、進んで学術の進歩と人類の生活向上に寄与し、平和社会の建設に貢献する人材の養成」を目的としている。この理念や目的に基づき獣医学部では、「幅広い獣医学及び動物応用科学教育を行い、生命と福祉に係る科学者としての責任に基づいて、社会的使命を正しく遂行しうる獣医師や動物科学技術者を育成する」との教育理念を掲げ、社会より与えられた責任に対し応えられる人材を育てることを目標としている。特に獣医学科は、動物の健康（解剖と生理）と疾病(病態)の処置及び予防に関する科学的知識・技能・倫理を授けて、科学的思考力と応用能力を展開させ、社会的使命を遂行できる人材の養成を目標に教育研究に取り組んでいる。</p>
日本大学	<p>動物疾病の診断、治療、予防、公衆衛生への貢献を主たる目的としてきた獣医学は、最近では伴侶動物を介した対人福祉、野生動物の保護、国際化間の疾病予防、畜産食品の安全性の確保等、その学問領域は拡大し多岐に亘っている。このように広範な職域において獣医師として円滑な活動を行うため、高度で最新の専門知識と技術、加えて高い教養に裏付けられた深い人間性が要求される。このような社会のニーズに応える獣医師を養成するため本学では、特定の分野に偏らないカリキュラムを編成し、最新の設備を学生に提供し、充実した実験実習の実施を推進している。つまり、日本大学では獣医学教育により得た考え方、知識、技術などを通して社会に貢献できる人材の育成を目指している。</p>

2. 教育・研究・事務組織

前回の調査(平成14年6月の報告書)から現在までの私立5大学における教育組織、研究組織、事務組織の整備状況に関する自己評価は一樣ではない(表2-1)。各大学において獣医学教育ならびに獣医学研究を円滑かつ効果的に遂行するには教育組織、研究組織、事務組織が効率よく連繋をもって機能することが不可欠であることは言うまでもない。各大学のそれぞれの組織の現状について「改善が必要」としている箇所が多々見受けられるので、今後は私立5大学の各組織について検証を試みたい(表2-2)。

①教育組織

酪農学園大学は「おおいに改善が必要」で、その理由に教員、ならびに支援スタッフの人数が足りないことを挙げている。北里大も「多少改善が必要」としており、大講座制への移行、教員数の充実などが課題であるとしている。日獣大は「まあまあ整備」としているものの、教員の配置に若干の偏りがみられると回答している。麻布大学は平成19年度に設置される教育推進センターのスタッフの充実が十分でないことから「おおいに改善が必要」と記している。日大はPBL(問題提起解決授業)、臨床系の大講座制、レジデント制度の導入が検討されてはいるものの実現には時間を要することから「多少の改善が必要」としている。

このように各大学において特長のある獣医学教育を行うべく努力していることは等しく評価されるところであるが、教員の充足が十分になされていないことがネックになっていると言えよう。

②研究組織

酪農学園大学は、大学院学生の専用演習室や講義室が不足していること、研究支援スタッフが充実していないことを理由に「おおいに改善が必要」としている。北里大学は、若干教員の研究環境の整備が急務と考えており、「多少の改善が必要」と回答している。日獣大は、若干教員による横断的研究が活発に行われている環境が整ったことから「まあまあ整備」とされていると考えている。麻布大学は、平成18年9月に教育・研究の拠点として獣医学部棟を完成させたが、「普通」～「多少の改善が必要」と考えている。日大は学科内に横断的プロジェクト研究を展開させる気運があることを理由に「まあまあ整備」と回答している。

各大学の研究組織に対す認識は一様でないが、国際水準の獣医学研究を推進するにあたってはハード・ソフトの両面からさらなる充実が求められていることは確かである。

③ 事務組織

酪農学園大学は、学部の事務組織の充実と職員の補充が必要なことまた学科内事務のネットワーク化が必要なことを理由に「多少の改善が必要」としている。北里大学は学部レベルで適正な事務業務が行われていることから「普通」と考えている。日獣大は大学の事務部と動物医療センター事務室が円滑に機能していることから「普通」と回答している。麻布大学は事務のOA化、さらに大学改革に向けて職員の増員が必要と考えており「おおいに改善が必要」としている。日大は学部の事務組織とは別に学科事務室が機能していることから「まあまあ整備」と回答している。

このように現状では自助努力により、各大学において大きな支障をきたしてはいないが、麻布大学の今後を見据えた事務組織の整備計画は特に評価されよう。

表 2-1 教育・研究・事務組織

大学	教育組織	研究組織	事務組織
酪農学園大学	おおいに改善必要	おおいに改善必要	おおいに改善必要
北里大学	多少改善必要	多少改善必要	普通
日本獣医生命科学大学	まあまあ整備	まあまあ整備	普通
麻布大学	おおいに改善必要	多少改善必要	おおいに改善必要
日本大学	多少改善必要	まあまあ整備	まあまあ整備

表 2-2 教育・研究・事務組織に関するコメント

大学	コメント
酪農学園大学	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の増員、特に臨床系および公衆衛生・環境関連分野の教員の増員が必要である。 ・教育病院の活用のためには教員ならびに支援スタッフの充実が必要である。 ・大学院生のための専用の演習室や講義室の増設が必要である。 ・研究のための機器の管理などの支援スタッフの充実が必要である。 ・学部独自の事務組織の拡充と専任職員の増員が必要である。 ・学内事務簡素化のための学内ネットワークの構築が必要である。
北里大学	<ul style="list-style-type: none"> ・教育組織として3系（生態機構系、予防衛生系、臨床系）が存在するが、教員2名ないし3名体制の研究室が主体となり、それぞれの講義・実習を行っており、デパートメント制には至っていない。72名体制が財政的にも可能であれば、考える余地はあるが、現時点では実現が難しい設定と思われる。 ・教員2名体制の研究室では、若手教員が留学・研修などの機会を利用した研究の活性化を行う環境が整っておらず、これらの問題の解決が急務となっている。 ・獣医畜産学部では、原則として学園で定めている事務業務分掌および業務処理基準に則り、適正に業務処理が行われている。
日本獣医生命科学大学	<ul style="list-style-type: none"> ・教員1人あたりの担当学生数は単純計算では5.3人で、比較的充足されていると考えられるが、配置に若干の偏りが見られ、特に獣医学科臨床系及び獣医保健看護学科の教員が不足している。国際化基準に近づくためにはさらなる教員の充実が必要である。 ・現在、教室制をとっており、各教室単位で教育を行っている。教室数は20で、獣医学教育に必須の科目担当教室はほぼ充足されている。 ・研究組織は原則、教育組織と同様、教室制により教室単位で行っていることが多いが、動物医療センターの設備拡充、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業ハイテクリサーチセンター整備事業、ならびに学術フロンティア推進事業により大型研究機器が整備され、横断的研究が若手教員を中心として活発に行われるようになってきている。 ・本学の事務部は、事務部長を筆頭に庶務課、学術振興課、学務課、学習・就職支援課及び動物医療センター事務室の4課・1室体制で大学事務を運営している。 ・課・室の事務担当者のスキル熟練度等により、円滑な運営に支障をきたす面もみられるが、組織の整備状況としては特段問題になる点はない。
麻布大学	<ul style="list-style-type: none"> ・平成18年9月に獣医学部棟が完成し、教育・研究の基点施設となる。 ・平成19年度から教育推進センターを設置し、補習教育・基礎教育・教育支援等の充実を図る。そのためのスタッフの充実が必要。 ・平成18年度に獣医学部棟が完成し、教育・研究の基点施設となる ・17年度から着手した基幹事務システムが構築され、OA化が整備された。今後更に大学改革のための戦略的企画をする部署の設置やそのための増員が必要。
日本大学	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の自主性を高める problem based learning（問題提起解決授業）はすでに欧米で取り入れられており、本学においてもそれを実現する教育組織の検討が求められる。 ・臨床系教員から、臨床部門の大講座制への切替が提案されている。つまり、専門医制度とレジデント制度の導入を可能にするものである。 ・学科内等におけるプロジェクト研究を進展させる気運がある。 ・学部の事務組織とは別に学科事務室が機能している。

3. 財政

獣医学教育研究の充実の観点から獣医学部あるいは獣医学科の財政についての相互評価が望まれたが、それぞれの大学の事情により、学部として（一部は大学として）の収支概要が示されたため、初期の目的は必ずしも達成できなかった。今回は教育学教育・研究を充実させるための外部資金の導入、教員一人当たりの研究費および旅費、学生一人当たりの実験・実習費などについての評価を中心に行った。

1) 酪農学園大学

大学全体の財政状況が示されたため、獣医学部（獣医学科）については不明であるが、大学としての人件費比率（人件費÷帰属収入×100）および教育研究費比率（教育研究費÷帰属収入×100）はいずれも40%前後で推移している。

私学助成補助金の過去5年間の平均は4.47億円となっているが、平成16、17年度は明らかに減額している。5年間の特別研究費は1.38~1.65（平均1.55）億円、受託研究費と助成研究費の総額は3,300~7,480（平均4,921）万円、科学研究費は2,950~3,590（平均3,018）万円の範囲で推移しているが、獣医学科については不明である。

大学全体の教員1名あたりの過去5年間の一般研究費および研究旅費の年平均額は114万円および34万円で、他の4大学に比べて最も多い額であり、必要最小限度の研究費は確保できているものと評価できる。また、学生1名あたりの実験実習費は9万円弱となっている。設備購入費総額については大学全体で過去5年間では、年額1.82~5.65億円の範囲で推移しているが、獣医学教育研究充実のための設備購入費は不明である。

2) 北里大学

学部の人件費比率は過去5年間39.4~42.0%範囲で、教育研究費比率は31.5~33.9%で推移している。また、過去5年間の帰属収支差額（帰属収入－消費支出）は、帰属収入の10%を超えている。

私学助成補助金は過去5年間で、年額3.87~2.66億円の範囲であるが、漸減傾向を示している。特別研究費は年平均4,000万円、受託研究費および助成研究費の総額は年3,800~4,550万円の範囲であり、5大学中で上位2大学に入る。科学研究費は平成15年後まで増加していたが、平成16,17年度は2,000万円程度となっ

ている。

獣医学科教員1名あたりの過去5年間の一般研究費は、年額平均82.4万円、研究旅費20万円前後となっており、研究費は5獣医科大学の中では下位2校の一つとなっている。また、学生1名あたりの実験実習費は過去5年間で、年額7万円前後で推移している。獣医学科の設備購入費として、過去5年間で年額0.61~1.76億円の範囲で推移している。

3) 日本獣医生命科学大学

学部の人件費比率はこの5年間38~43%で、教育研究費比率は25~37%で推移している。

科研費補助金および受託研究費は年々増額されており、学部として平成17年度は4,320万円および3109万円であり、研究活動の活性化の評価となるであろう。

獣医学科教員1名あたりの一般研究費は過去4年間年額50万円以下で、研究旅費は年額11.9~16.6万円の範囲であり、特に一般研究費については5大学中最も少ない額となっている。学生1名あたりの実験実習費は年12万円前後であり、獣医学科の設備購入費は年額1.27億円となっている。

4) 麻布大学

学部の人件費比率は平成16年度のみ50%となり、平成15,17年度は40%以下、教育研究比率は過去3年間35%前後で推移している。獣医学科の私学助成補助金は1.65~1.89億円の範囲で推移し、特別研究費は過去5年間1,000~1,500(平均1,178)万円、受託研究費322~715(平均475)万円の範囲となっている。科学研究費は890~1,710(平均1,300)万円の範囲で推移しているが、5獣医大学で少ない額であり、外部資金の積極的な導入が望まれる。

教員1名当たりの一般研究費は年100万円、研究旅費は年10万円で推移している。また、獣医学科学生1名当たりの実験実習費は年3万円前後で、5大学中最も少ない額となっており、ぜひとも増額が望まれる。獣医学科設備購入費は過去5年間で年額5,765~9,227(平均7,642)万円の範囲で推移している。

5) 日本大学

学部の人件費比率は40%前後、教育研究費比率も40%前後で推移しているが、補助金(私学助成金含む)は年々減少している。

科学研究費は5年間で年額2,360～4,580(平均3,480)万円の範囲で推移しており、5獣医科大学では上位2校に入る。受託研究費および助成研究費は年額平均887万円および708万円であるが、年度によりかなりのばらつきがみられる。

教員1名当たりの一般研究費は年100万円強、研究旅費は平成17年度で14万円弱となっている。獣医学科学生1名当たりの実験実習費は年13万円前後で、5大学中最も多い額となっている。獣医学科設備購入費および実験実習設備の総額は年度によって変動が見られるが、年額2,000万円前後となっている。

各大学とも、人件費比率および教育研究費比率から財政は良好に保たれていると考えられるが、一般研究費および研究旅費、学生の実験実習費には大学間の格差が2倍以上となっており、特に額の少ない大学においては早急に改善が望まれる。

4. 教職員等

獣医学教育の修業年限が6年制となって以来、獣医学教育改善の取り組みが継続されている。平成9年（1997）には大学基準協会が18講座以上、教員数72名以上を最低基準に設定した「獣医学教育に関する基準」の改訂を行い、現在、各大学はこの改訂された基準に従って教育内容の充実を図る努力を行っている。平成13年の第105回全国国公立大学農学関係学部長会議「獣医学教育改善に関する臨時委員会」では、「新教育研究組織の規模は、72名以上の教官から成ることが望ましいが、それがただちに実現できない場合でも、当面これに準ずる規模としては、18名の教授を含む54名程度の教官から成る組織が必要最低限であろう」と述べられた。しかし、その後は国立大学法人化のうねりの中で、各大学が様子見の段階となり獣医学教育改善運動は停滞し始めた。平成16年4月からの国立大学の法人化の後、関係大学が自主的・自律的に最大限努力することとし、当面の措置として教員36名を目標とされている。一方、私立大学においては毎年約700名の卒業生を社会に送り出し、これは全体の7割を占めている。従って、社会の要請に応える高度専門職業人としての獣医師の学術的・技能的な質を高めるためには、私立大学における獣医学の教育・研究システムの改善と充実が極めて重要である。この章では、全国16大学の「獣医学教育の横断的評価」から始まった自己点検と外部評価を、私立大学5大学が独自に平成14年に行った相互評価報告書（平成6-12年）の情報と比較しながら平成13-17年の5年間の教員構成、活動時間、研究業績などについて詳細に検討する。

1) 教員の構成

(1) 概要

大学基準協会（平成9年）の「獣医学教育に関する基準」（以下基準と呼称）では18講座以上、教員数72名以上を最低基準に設定されており、この基準を改善目標としているが数値が越えている大学はない（表4-1-a）。酪農学園大学では72名を目標とし2006年度4月現在52名、北里大学では現在57名の教員枠を持っているが平成19年3月現在で52名（表の数値とは異なる）となっている。日本獣医生命科学大学は教員の数値目標については未回答となっているが現在53名の教員数である。麻布大学は現在55名の教員数であるが、19年度までに6名の教員を公募して達成目標に向けて検討中である。日本大学では現在、教授18名（客員教授1名を含む）、助教授7名、専任講師12名、助手8名、副手3名で構成されており、当面55名を目標に増員を図る予定である。5大学とも「当面これに準ずる規模としては、18名の教授を含む54名程度の教官から成る組織」を形成しようと鋭意努力中である。

教員充足率は学生定員60名以上の場合は0.83（60/72）を（学生数/教員数）の値で除した

数字として定義されるが、日本獣医生命科学大学の0.55がトップで、麻布大学、酪農学園大、北里大学、日本大学の順で低くなっている。麻布大学、北里大学、日本大学ともに数名から6名の教員枠を現在埋めようと努力しており、これが埋まれば0.4前後には届くであろう。

組織としての教員配置については、酪農学園大学は「特に臨床系教員および公衆衛生・環境関連分野の教員が不足している」、北里大学では「臨床系教員の席が埋まっていないところがあり、鋭意努力している」、日本獣医生命科学大学では「獣医学科、動物科学科、食品科学科は適切に配置されているが、獣医保健看護学科は現在2年次まで在籍であり、これから専任教員の増員を計画している」、麻布大学では「おおむね適切に配置されているが、若干、環境獣医学系の教員が不足している感がする」、日本大学では「専任教員はおおむね専門の部署（研究室）に配置されている。今後、若干教員の増員を行い、教育、研究のより一層の活性化を図る必要があると思われる」との状況である。前回の平成12年までの調査成績に比較すると何れの大学も5～10名の増員を図っており、特に臨床系教員の採用が活発となっている。尚、本調査では付属施設の教員も数値に含まれているが「設置基準」では付属施設の専任教員は別枠になっている。

(2) 教員数と学生数の比率（表4-1-i）

教員1人当たりの学生数（入学定員/教員数）の比率は「基準」では $60/72=0.83$ 人となっているが、日本獣医生命科学大学の1.51人が最小であり、続いて麻布大学2.2人、酪農学園大2.3人、日本大学2.5人、北里大学2.6人の順となっている。国公立大学の平均値は1.0となっており、私立大学と1.5～2.6倍の相違がある。

(3) 女性教員の比率（表4-1-a）

女性教員は全ての大学に配置されており調査を重ねるごとに多くなってはいるが、依然としてその数は少ない。平成10年では5大学合計で16名1.6%であったが平成18年の調査では22名2.2%となった。数の上からは麻布大学の11名が群を抜いている。学生の男女比率からすると今後は女性教員の割合が増える傾向となるであろう。

(4) 専門教員、兼任教員について

今回の調査で獣医学科教員として専門教育に携わっていない一般教養担当の教員は酪農学園大に1名居られたのみであった。前回の調査において教員総数に加えていることが指摘された麻布大学では教員数が64名から55名と減少しており、それら教員数が除かれていた。

(5) 外国人教員

現時点では北里大学に1名、麻布大学に1名外国籍教員が居られる。今後、国際化に対応した教育を実施するために、時限講座、任期制教員採用枠で外国人教員の採用を考慮すべきであろう。

(6) 他大学出身教員の割合 (表 4-1-b、表 4-1-e-1)

他大学出身教員の割合は麻布大学 23.6%、日本大学 31.3%、日本獣医生命科学大学 32.1%、酪農学園大学 51.9%、北里大学 69.4%の順となっている。日本大学は平成 10 年の調査時の 16%から倍増し人事交流が進んだことが伺われるが、日本獣医生命科学大学は 39%から 32%、酪農学園大学は 61.2%から 51.9%と逆に減少傾向にある。北里大学と麻布大学は微動の範囲である。これまでの歴史や背景が異なる大学間での比較や評価は難しいが、経時的推移を見守ることには意味がある。

(7) 獣医師免許取得者の割合 (表 4-1-b、表 4-1-e-2)

5 大学全てにおいて獣医師免許を取得している教員が 86〜91%と高い割合を占めている。基礎獣医学系の科目では、教育・研究能力を重視して他学部出身者を教員に採用することが望ましい場合もあるが、各大学の教育・研究理念に基づいて評価されるべき事項であろう。

(8) 博士号取得者の割合 (表 4-1-b、表 4-1-f)

5 大学全てにおいて 90%以上の教員が博士の学位を取得している。平成 10 年度と今回の調査を比較すると日本大学を除いた 4 大学で取得割合が増加傾向にある。日本大学、日本獣医生命科学大学、北里大学の採用基準に学位取得が必要条件とされているが、酪農学園大学では教授、助教授に、北里大学では講師、助手に、麻布大学では助教授、講師、助手に、日本獣医生命科学大学では助手に、日本大学では講師に博士号の未取得教員がいる。それぞれに理由はあるであろうが、高度な専門教育並びに大学院教育を実施するためには全ての教員が博士号取得者であることが望ましい。

(9) 臨床系教員と非臨床系教員の比率 (表 4-1-g)

現時点では全教員に対する臨床系教員の割合が 50%を越えている大学は一枚もない。また、40%以上の大学は日本大学のみ、臨床系教員の総数が 20 名を越えているのは麻布大学のみである。臨床教員の増加は、麻布大学、日本大学、北里大学で考えられており、引き続き調査することが望まれる。

(10) 教員の年齢構成 (表 4-1-h)

職階が高くなるにつれて年齢が高くなっている。大学によってはある年齢層に教員数のピークが認められ、各職階の年齢についても各大学の昇格条件、定年年齢、国公立退職者の再就職などを反映していると考えられる。

教育・研究の遂行のためには、バランスの取れた年齢構成が望ましいとされているが、学科全体の組織としての構成と研究室内での年齢構成が共に研究教育の活性化と世代交代が円滑となるよう適切であることが望ましい。

(11) 教員、教育支援者あたりの学生数 (表 4-1-i)

教員一人当たりの入学者定員数は 1.51～2.6 である。また、教員一人当たりの全学年学生数は日本獣医生命科学大学のみが 9 人と 10 人以下で、他は 13.1～15.3 人となっている。教員と支援者一人当たりの全学年学生数は 4.8～11.6 人と教員一人当たりの学生数よりも格差が大きい。学生定員や全学生数は過去 12 年間で変化はないが教員数の増加傾向と支援者数の変動がそれぞれの大学の変化を反映している。教員充足率は、0.32～0.55 である。何れの大学も平成 10、14 年の調査に比べると教員数の増加により充足率も向上しているが、獣医学教育が基準の 1/2～1/3 程度の教員数で運営されている状況は変わっていない。

2) 教員の活動時間比率 (表 4-2-a-1～3)

大学間で活動比率に大きな差はみられず、非臨床系教員は、学部教育、大学院教育、研究及び管理面に対する時間配分が多いのに対し、臨床系教員は臨床及び社会活動面に対する時間配分が多い傾向にある。また、職階別に見ても同様な傾向が認められるが、上位の職階ほど管理面に対する時間配分が多くなっている。これらの傾向は平成 13 年度と平成 17 年度の調査の比較においても変化はない。

国公立大学のデータは平成 13 年度の調査時点のもので現状を把握したものではないので、ここでは今回の調査との比較も差し控える。また、今回の調査は自己申告に基づいたものであり正確に内容も反映してはいない。担当科目数・単位数、臨床時間数などより具体的な数値での比較も必要であろう。

3) 教員の採用基準 (表 4-3-a)、昇格基準 (表 4-4-a)

全ての大学が教員採用基準に公募制を採用している。平成 14 年の調査書では酪農学園大学と日本獣医生命科学大学では助手を除いていたが、今回の調査でこれも公募制となった。任期制については日本大学が教授と助手に採用している。北里大学も平成 19 年 4 月採用の助手(正確には助教)からこれを採用する。年齢制限については酪農学園大学と北里大学に新たに日本

獣医生命科学大学がこれまでと同様に制限を設けているが、麻布大学は逆に全ての職階で年齢制限を撤廃した。日本大学は年齢制限を設けていない。研究業績についても酪農学園大学を除いてこれまでと同じような論文数の基準を設けている。日本獣医生命科学大学では全ての職階で論文数が増加された。日本大学では従来と同様の採用基準を設けている。酪農学園大学では研究業績を考慮するという表現を用いて、数での規制を外した。教育経験についても5大学とも規定はないが参考にする、或いは考慮するという表現となっている。臨床教員の採用には北里大学の臨床経験を必要とする以外は、重視する、考慮する、という表現となっており、人材確保のために幅広い選択肢があることが示されている。社会活動についても、日本獣医生命科学大学以外は参考にする、考慮するとなっている。採用基準として博士号取得が全ての職階で必要となっているのは日本獣医生命科学大学と日本大学で、北里大学は助手以外とされている。

教員の昇格基準も採用基準とほぼ一致しているので、説明は省略する。

採用基準と昇格基準の変更の背景には、臨床系教員の絶対数の不足、若手教員の育成などの諸要因があると思われるが、各大学の置かれた状況、それぞれの教育目標な理念など複数の要因が関与している。次世代の養成という点では何れの大学も座標を同じくしており、今後の推移を見守りたい。

4) 教員の研究業績 (表 4-5-a)

(1) 学術論文及び著書

教授と助教授数はほぼ一致しており大学間、更には調査年度における比較が可能となったが、講師と助手については大学間での人数分布が大きく異なるために、単純な比較はできなかった。

非臨床系教員の大学間の比較では、日本大学の教授と助教授の平均論文数が 20 編を越えており、著書数も 5.8 冊と何れも最下位の二倍の数値を示した。助教授においても日本大学の論文数は 20 編を越えていた。また、助手の論文数も 18 編と他大学の 2~6 倍となっていた。これらの変化は前回と今回の数値においても同様な傾向が日本大学では認められた。他 4 大学においては前回とほぼ同様な数値を示していた。

臨床系教員の大学間の比較でも、日本大学の教授の平均論文数が 40 編を越えており、他の大学の 2~7 倍の数値を示した。講師では人数が少ないが麻布大学と日本大学では 20 編を越えて突出していた。臨床全体の平均でも大学間で論文数に 2~3 倍の隔たりがあった。これらの変化は前回と今回の数値においても同様な傾向が日本大学では認められた。他 4 大学においては酪農学園大学の教授を除いて前回とほぼ同様な数値を示していた。

前回の報告書において既に指摘されている本調査の問題点を再度掲載すると、①学術雑誌については権威ある学術雑誌とする掲載雑誌の基準に不明な点が多いこと、②著書については寄与の程度が不明であること、③著書や論文その他論文については教育・啓蒙の面があると考え

られるが、これらをどう評価するかが明確でないこと。④大学間の全体的な活性度評価のためには研究業績の比較が必要であるが、学術雑誌の基準の設定が相互評価には不可欠である。④単純に比較しやすいということで論文数のみを研究評価の指標とするのではなく、総合的な評価システムの作成が必要である。

研究業績については、大学における研究環境を反映しているとも考えられるが、実際には大学間の差よりも各大学内における教員間の差が大きい。この背景には担当科目数の量的な違いなど所属研究室によるものもあろうが、各大学における研究活動の活性化の為には、教員間の差を解消するような検証ならびにその改善のためのシステムが必要と考えられるという、前回報告書のコメントの通りであろう。今回の調査で、その取り組みは各大学で自己点検という形で実施されており、酪農学園大学では「大学（年度毎の11項目の教育研究活動報告）、学部（昇格基準）、大学院（5年毎の主査・副査資格審査基準）等の、報告・検証・評価システムが設けられている」、北里大学では「大学には、教員の多元的業績評価委員会があり、その評価システムの中に、業績評価がある。研究業績と活動については、論文（原著、総論、著書）、招待講演・シンポジウム（海外、国内）、補助金・研究助成などの細目について、それぞれ評価する。」、日本獣医生命科学大学では「毎年度「日本獣医生命科学大学研究報告」を作成し、また5年に1度研究活動の総合的、自己点検評価を実施している。更に、獣医学科では、各教員の研究活動状況を踏まえ、研究奨励金を交付している。」、麻布大学では「本学では、麻布大学年報を発行して各教員の業績の自己点検も行っている。」となっている。日本大学では教員の活性度を検証するための自己評価・自己点検制度が構築されている。さらに研究業績に基づく研究費の傾斜配分が検討されているとのことである。

（2）科学研究費交付回数

今回の調査において教員全体の平均科研費交付回数は5大学間で1.1～1.4と違いは無く、臨床系教員、非臨床系教員においても明らかな差は認められなかった。また、活動時間割合と論文数や科研費交付回数などにも関連は認められなかった。国立大学のデータは前回報告書において比較解析がなされており、今回は参考までに表に記載したが最新のデータは無いので、ここでは前回以上の比較検討はしない。

外部資金導入のための大学としての取り組みについては5大学とも行われている。酪農学園大学、北里大学では「学内共同研究費の申請は科研申請をした者に限られる」などの方策、日本獣医生命科学大学では「教育研究推進委員会」、麻布大学では「公的研究助成金事業委員会」、日本大学では「本学部研究事務課主催の説明会が開催」などが積極的に外部資金導入のためのサポートを行っている。

科研費については、申請件数或いは採択率などの比較が外部資金導入の指標として分かり易

いが、研究者や研究内容などの情報が無いので、これ以上の検討は出来ない。

(3) 国際交流の実績 (表 4-6-a,b)

教員の1ヶ月未満の渡航は、平成13-17年度の5年間に5大学で10-20回と、前回調査の成績とほぼ同じ推移を示していた。1ヶ月以上の長期渡航者数は、酪農学園大を除き前回調査と同じような推移であった。前回の報告書でも指摘されているが、実態が分からない数値だけで国際交流として大学間評価の材料とするには無理が有ろう。

教育支援者の国際交流はこれまでゼロであったが、日本大学で平成16・17年度に各1名の派遣があった。

5) 学部学生と教育支援者の比率及び時間数 (表 4-7-a,b)

教育支援者数は日本大学を除いて前回調査から大きな変化は無かった。日本大学は他の4大学と異なり組織上の相違から事務職員を支援者とする配置(割り振り)がなされておらず、教育支援者数の合計が他に比べて格段に少人数であったが、今回の調査ではティーチングアシスタント(TA)が増員されて15名となった。また、技術職員として有給の研修医をカウントしている。一方、日本獣医生命科学大学では「実験や実習時に教員以外の実習委託を委託し」されており、今回の調査では最大値である52名の教育支援者を得ている。全ての大学で採用されているTAについては全科目に対応していないという問題点を抱えている。また、前回の報告書でも指摘されているようにTA以外の教育支援者の定義付けと獣医学科への割り振りについても共通認識がこの種の調査項目には必要である。

学生数の多い私学に於いて6年制の獣医学教育を実施する上で教育支援者が不可欠であることは論を待たない。しかし、それぞれの役割を持った支援者がどの程度必要であるかについても議論されてはいない。獣医学科の場合は、農場、動物病院などの付属施設の規模によっても大学の事情があり、相互評価の中で比較することは難しい。

6) 教育活動における教員組織

(1) 教育課程の内容などの教員間での調整システムについて

酪農学園大学では5部門、北里大学、麻布大学、日本大学では3つの系教育体制をもって講義・実習内容の調整を図っており、それぞれの大学の自己評価としてはそれが機能しているとの判定がでている。日本獣医生命科学大学では現時点では学科全体の調整を行っていないが、教育課程においてデパートメント制を視野に入れた検討を行っている。これらの点については前回調査と変化は無かった。

(2) 教員の教育活動の評価について

北里大学では教員の多元的業績評価委員会があり、その中の教員評価基準として、授業の改善工夫、講義・実習・演習の改善、学生による授業評価などが評価基準として設けられている。一方、日本獣医生命科学大学では教育活動等に関する自己点検及び評価、酪農学園大学、麻布大学、日本大学では学生による授業評価などは実施されているが、毎年の評価として制度化されておらず、今後教員の任期制、評価制度等の導入の中で検討する予定或いは必要性を感じている。

前回の調査書においても指摘されているが、私立大学の教員当たりの学生数の多さは学部教育に対する負担が当然のことながら多くなり、特に臨床系教員は非臨床系教員に比べるとさらに大きい。教育活動の負担の偏りは研究活動にも影響を与えていることが予想され、我が国の獣医学教育における学生数では7割を占める私立大学の教育内容を充実させることが、獣医師の学術的な質の向上に直結するという自負を持って、教育改善に取り組むべきである。

表 4-1-a 教員構成 (全体表 1)

大学	調査年	現員 (名)					女性教員 (名)				
		教授	助教授	講師	助手	計	教授	助教授	講師	助手	計
酪農大	平成 10 年	18	20	9	2	49	1	1	0	0	2
	平成 14 年	20	19	9	2	50	1	1	0	0	2
	平成 18 年	28	18	3	3	52	1	1	0	0	2
北里大	平成 10 年	18	12	11	5	46	0	0	1	0	1
	平成 14 年	17	12	13	8	50	0	0	1	0	1
	平成 18 年	17	8	16	8	49	0	0	1	1	2
日獣大	平成 10 年	19	9	13	10	51	1	1	2	1	5
	平成 14 年	21	7	13	10	51	2	1	1	1	5
	平成 18 年	19	15	7	12	53	2	1	0	0	3
麻布大	平成 10 年	28	22	12	2	64	1	2	4	1	8
	平成 14 年	26	21	13	4	64	1	2	4	1	8
	平成 18 年	18	22	13	2	55	1	2	6	2	11
日大	平成 10 年	18	10	5	6	39	0	0	0	0	0
	平成 14 年	18	8	4	11	41	0	0	0	0	0
	平成 18 年	18	7	12	8+3	48	0	0	0	4*	4*
合計	平成 10 年	101	73	50	25	249	3	4	7	2	16
	平成 14 年	102	67	52	35	256	4	4	6	2	16
	平成 18 年	100	70	51	36	257	4	4	7	7	22

注) 各大学の数値は、平成 10 年度の調査、平成 14 年 2 月 28 日、平成 18 年 12 月 1 日現在の数値

*) 助手 3 名を含む

表4-1-b 教員構成 (全体表2)

大学	調査年	他大学出身教員				獣医師免許取得者				博士号取得者									
		教授	助教授	講師	助手	計	%	教授	助教授	講師	助手	計	%	教授	助教授	講師	助手	計	%
酪農大	平成10年	14	12	4	0	30	61.2	17	19	8	2	46	93.9	17	17	6	1	41	83.7
	平成14年	12	10	4	1	27	54.0	19	18	8	2	47	94.0	19	17	6	0	42	84.0
	平成18年	19	7	1	2	29	55.8	25	17	3	2	47	90.4	27	16	3	3	49	94.2
北里大	平成10年	13	7	9	4	33	71.7	14	11	11	5	41	89.1	18	11	8	3	40	87.0
	平成14年	12	8	11	4	35	70.0	15	12	13	8	48	96.0	17	11	11	8	47	94.0
	平成18年	10	5	14	5	34	69.4	13	8	15	8	44	89.8	17	8	15	7	47	95.9
日獣大	平成10年	9	3	3	5	20	39.2	14	9	13	6	42	82.4	16	9	12	7	44	86.3
	平成14年	10	3	3	5	21	41.2	15	7	13	7	42	82.4	18	7	12	8	45	88.2
	平成18年	8	4	2	3	17	32.1	16	14	6	10	46	86.8	19	15	7	11	52	98.1
麻布大	平成10年	6	5	3	0	14	21.9	22	20	7	2	51	79.7	24	19	5	0	48	75.0
	平成14年	5	5	3	1	14	21.9	22	19	8	4	53	82.8	24	18	6	1	49	76.6
	平成18年	2	5	5	1	13	23.6	17	20	10	2	49	89.1	18	21	12	1	52	94.5
日大	平成10年	4	1	0	2	7	16.7	18	7	6	9	40	95.2	20	7	5	8	40	95.2
	平成14年	5	1	0	3	9	22.0	17	8	4	11	40	97.6	18	8	3	9	38	92.7
	平成18年	5	2	5	3	15	31.3	17	7	12	8	44	91.7	18	7	11	8	44	91.7
合計	平成10年	33	19	25	14	91	35.6	84	63	49	30	226	87.7	95	63	47	25	230	89.3
	平成14年	44	27	21	14	106	41.4	88	64	46	32	230	89.8	96	61	38	26	221	86.3
	平成18年	42	23	27	14	106	41.2	88	66	46	29	229	89.1	98	67	48	30	243	94.6

注) 各大学の数値は、平成10年度の調査、平成14年2月28日、平成18年12月1日現在の数値

表 4-1-c 教員構成（現員数と構成率）

大学	調査年度	教員数(%)				
		教授	助教授	講師	助手	総数
酪農大	平成 10 年	18 (36.7)	20 (40.8)	9 (18.4)	2 (4.1)	49
	平成 13 年	20 (40.0)	19 (38.0)	9 (18.0)	2 (4.0)	50
	平成 17 年	28 (53.8)	18 (34.6)	3 (5.8)	3 (5.8)	52
北里大	平成 10 年	18 (39.1)	12 (26.1)	11 (23.9)	5 (10.9)	46
	平成 13 年	17 (40.0)	12 (24.0)	13 (26.0)	8 (16.0)	50
	平成 17 年	17 (34.7)	8 (16.3)	16 (32.6)	8 (16.3)	49
日獣大	平成 10 年	19 (27.3)	9 (17.6)	13 (25.5)	10 (19.6)	51
	平成 13 年	21 (41.2)	7 (13.7)	13 (25.5)	10 (19.6)	51
	平成 17 年	19 (35.8)	15 (28.3)	7 (13.2)	12 (22.6)	53
麻布大	平成 10 年	28 (42.2)	22 (35.9)	12 (18.8)	2 (3.1)	64
	平成 13 年	26 (40.6)	21 (32.8)	13 (20.3)	4 (6.3)	64
	平成 17 年	18 (32.7)	22 (40.0)	13 (23.6)	2 (3.6)	55
日大	平成 10 年	18 (46.2)	10 (25.6)	5 (12.8)	6 (15.4)	39
	平成 13 年	18 (43.9)	8 (19.5)	4 (9.8)	11 (26.8)	41
	平成 17 年	18 (40.0)	7 (15.6)	12 (26.7)	8 (17.8)	45

注) 各大学の数値は、平成 10 年度の調査、平成 13 年度は平成 14 年 2 月 28 日、平成 17 年度は平成 18 年 3 月 31 日の数値。

表 4-1-d 教員数の規模別分布

大学		教員構成の人数範囲				
		教授	助教授	講師	助手	総数
重点化大学		17～18	14～16	0～2	14～16	48～50
重点化以外の国立大学		9～12	7～10	0～3	2～8	23～30
公立		13	9	7	21	50
私立	平成 10 年	18～28	7～22	6～13	2～10	42～64
	平成 13 年	17～26	7～21	4～13	2～11	41～64
	平成 17 年	17～28	7～22	2～12	2～12	45～55

注) 各大学の数値は、平成 10 年度の調査、平成 13 年度は平成 14 年 2 月 28 日、平成 17 年度は平成 18 年 3 月 31 日の数値。

表 4-1-e-1 他大学出身教員の割合

%	教授	助教授	講師	助手
10 以下				
11～20	麻布大			
21～30	日大	日獣大、麻布大、日大	日獣大	日獣大
31～40		酪農大	酪農大、麻布大	日大
41～50	日獣大		日大	麻布大
51～60	北里大			
61～70	酪農大	北里大		酪農大、北里大
71～80				
81～90			北里大	
91 以上				

注) 各大学の数値は平成 18 年 3 月 31 日の数値。

表 4-1-e-2 獣医師免許取得者の割合

%	教授	助教授	講師	助手
61～70				酪農大
71～80			麻布大、	
81～90	酪農大、北里大、 日獣大		日獣大	日獣大
91～95	麻布大、日大	酪農大、日獣大、 麻布大、		
96～100		北里大、日大	酪農大、北里大、 日大	北里大、麻布大、 日大

注) 各大学の数値は平成 18 年 3 月 31 日の数値。

表 4-1-f 博士号取得者の割合

%	教授	助教授	講師	助手
100	北里大、日獣大、 麻布大、日大	北里大、日獣大、 日大	酪農大、日獣大	酪農大、日大
91～99	酪農大	麻布大	北里大、麻布大、日大	日獣大
81～90		酪農大		北里大
50				麻布大

注) 各大学の数値は平成 18 年 3 月 31 日の数値。

表 4-1-g-1 臨床系教員と非臨床系教員の比率（教授・助教授）

大学	調査年 (平成)	教授				助教授				
		臨床教員	割合(%)	非臨床教員	割合(%)	臨床教員	割合(%)	非臨床教員	割合(%)	総数
酪農大	10年	6	33.3	12	66.7	8	40	12	60	20
	14年	7	35	13	65	9	47.3	10	52.7	19
	18年	9	32	19	68	8	44.4	10	55.5	18
北里大	10年	4	22.2	14	77.8	1	8.3	11	91.7	12
	14年	4	23.5	13	76.5	2	16.7	10	83.3	12
	18年	4	23.5	13	76.5	2	16.7	10	83.3	12
日獣大	10年	4	21.1	15	78.9	3	33.3	6	66.7	9
	14年	4	19	17	81	2	28.6	5	71.4	7
	18年	5	26.3	14	73.7	6	35.3	11	64.7	17
麻布大	10年	11	40.7	16	59.3	11	47.8	12	52.2	23
	14年	6	26.1	17	73.9	9	45	11	55	20
	18年	5	27.8	13	72.2	8	38.1	13	61.9	21
日大	10年	6	33.3	12	66.7	4	40	6	60	10
	14年	6	33.3	12	66.7	3	37.5	5	62.5	8
	18年	4	22.2	14	77.8	3	42.9	4	57.1	7
平均	10年	6.6	32.4	13.8	68.1	5.2	37.1	9	62.9	71
	14年	5.4	27.8	14	67.6	5	37.9	8.2	62.1	66
	18年	5.2	26.4	14.2	73.6	5.2	34.8	9.6	5.2	74

注) 各大学の数値は、平成10年度の調査、平成14年2月28日、平成18年12月1日現在の数値

表 4-1-g-2 臨床系教員と非臨床系教員の比率（講師・助手）

大学	調査年 (平成)	講師				助手				
		臨床教員	割合(%)	非臨床教員	割合(%)	臨床教員	割合(%)	非臨床教員	割合(%)	総数
酪農大	10年	3	33.3	6	66.7	0	0	2	100	2
	14年	2	22.2	7	77.8	0	0	2	100	2
	18年	0	0	3	100	1	33.3	2	66.7	3
北里大	10年	5	45.5	6	54.5	1	20	4	80	5
	14年	5	38.5	8	61.5	3	37.5	5	62.5	8
	18年	5	45.5	6	54.5	1	20	4	80	5
日獣大	10年	6	46.2	7	53.8	2	20	8	80	10
	14年	6	46.2	7	53.8	2	20	8	80	10
	18年	2	28.6	5	71.4	5	45.6	6	54.4	11
麻布大	10年	5	41.7	7	58.3	2	100	0	0	2
	14年	2	20	8	80	4	100	0	0	4
	18年	4	30.8	9	69.2	2	66.7	1	33.3	3
日大	10年	4	66.6	2	33.4	3	50	3	50	6
	14年	3	75	1	25	5	44.4	6	55.6	11
	18年	7	58.3	5	41.7	5	62.5	3	37.5	8
平均	10年	5	47.2	5.6	52.8	2	35.7	3.6	64.3	25
	14年	3.6	36.7	6.2	62.3	2.7	41.5	3.8	58.5	35
	18年	3.6	32.6	5.6	67.4	2.8	45.6	3.2	54.4	30

注) 各大学の数値は、平成10年度の調査、平成14年2月28日、平成18年12月1日現在の数値

表 4-1-g-3 臨床系教員と非臨床系教員の比率 (まとめ)

大学	調査年	臨床教員	割合 (%)	非臨床教員	割合 (%)	総数
酪農大	平成 10 年	17	34.7	32	65.3	49
	平成 14 年	18	36	32	64	50
	平成 18 年	18	34.6	34	65.4	52
北里大	平成 10 年	11	23.9	35	76.1	46
	平成 14 年	14	28	36	72	50
	平成 18 年	11	23.9	35	76.1	46
日獣大	平成 10 年	15	29.4	36	70.6	51
	平成 14 年	14	27.5	37	72.5	51
	平成 18 年	18	34	35	66	53
麻布大	平成 10 年	29	50.8(45.3)	28(35)	49.2(54.7)	57(64)
	平成 14 年	21	35.6(32.8)	38(43)	35.6(32.8)	59(64)
	平成 18 年	22	40	33	60	55
日大	平成 10 年	17	43.6	22	56.4	39
	平成 14 年	17	41.5	24	58.5	41
	平成 18 年	19	43.2	25	56.8	44 *
平均	平成 10 年	89	35.7	160	64.3	249
	平成 14 年	84	32.8	172	67.2	256
	平成 18 年	86	35	160	65	246

注) 各大学の数値は、平成 10 年度の調査、平成 14 年 2 月 28 日、平成 18 年 12 月 1 日現在の数値
 注) * 客員教授 1 名を含まず

表 4-1-h 教員の年齢構成

大学	調査	教授							助教授							講師							助手							全体							計						
		≤45	≤50	≤55	≤60	≤65	≤66	≤65	≤60	≤55	≤50	≤45	≤40	≤35	≤30	≤65	≤60	≤55	≤50	≤45	≤40	≤35	≤30	≤65	≤60	≤55	≤50	≤45	≤40	≤35	≤30	≤65	≤60	≤55	≤50	≤45		≤40	≤35	≤30			
酪農大	H10年	1	5	3	4	4	1	0	3	12	3	1	1	0	5	4	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	5	7	13	8	4	5	4	1	49
	H13年	1	7	3	5	4	0	0	2	12	5	0	1	0	2	7	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	2	9	13	12	3	6	4	0	50
	H17年	2	8	9	4	4	1	2	7	6	3	0	0	1	2	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	2	2	4	9	14	12	4	4	1	2	2	4	9	14	12	4	4	1
北里大	H10年	0	0	10	5	3	0	0	1	3	4	3	1	0	3	3	5	0	0	0	1	3	1	0	0	0	1	3	1	0	0	0	0	1	6	5	8	4	13	6	3	0	46
	H13年	0	0	8	4	5	0	0	1	3	5	2	0	1	2	4	4	3	0	0	1	6	1	0	0	0	1	6	6	7	8	10	4	6	0	50							
	H17年	0	1	3	10	3	0	0	0	0	4	3	1	0	3	6	2	4	1	0	2	4	1	1	0	0	2	4	7	3	9	7	11	3	0	49							
白根大	H10年	0	0	10	7	2	0	0	0	5	3	1	0	0	0	5	4	3	1	0	2	7	1	0	0	0	2	7	6	9	6	12	7	2	0	51							
	H13年	1	0	10	7	3	0	0	0	0	7	0	0	0	0	6	3	3	1	0	2	7	1	0	0	0	2	7	7	4	10	11	7	3	0	51							
	H17年	0	1	5	5	8	0	0	0	6	5	3	1	0	0	5	2	0	0	0	1	3	6	2	0	0	1	3	11	10	6	8	6	8	0	53							
麻布大	H10年	0	5	10	8	5	0	0	1	7	7	4	1	1	2	6	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	4	7	9	12	14	9	6	0	61							
	H13年	0	2	8	9	4	0	0	1	7	6	3	2	1	2	6	2	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2	4	7	9	8	11	11	5	0	64							
	H17年	1	0	3	6	8	0	0	0	1	6	9	4	2	3	4	4	2	0	0	1	0	1	0	0	0	1	3	5	6	8	12	10	10	0	55							
日大	H10年	1	2	0	5	3	7	0	1	3	5	0	0	1	1	2	1	0	1	0	3	2	0	1	0	0	3	3	3	6	7	1	5	4	7	39							
	H13年	1	3	1	3	6	4	0	0	5	2	1	0	0	0	2	1	0	1	0	2	5	3	1	0	0	2	5	5	8	5	3	3	6	4	41							
	H17年	0	2	4	3	3	6	0	1	2	3	1	0	0	2	5	4	0	0	1	6	2	0	0	0	0	6	4	6	6	5	5	4	2	5	43							
国立 国公立 重点化 重点化以外	H10年	7	15	40	34	21	0	10	26	27	17	14	3	0	2	3	1	0	0	2	14	39	14	4	0	1	1	14	51	43	39	32	55	40	21	0	295						
	H13年	7	19	43	39	22	0	10	27	29	20	15	5	0	2	4	6	0	0	3	18	47	19	6	0	1	2	18	59	50	48	39	59	49	23	0	345						
	H17年	3	5	16	10	1	0	5	12	7	4	2	1	0	0	1	0	0	0	1	8	16	5	0	0	0	1	8	21	18	10	9	18	13	1	0	98						
私立	H10年	2	13	34	28	19	7	0	6	30	20	10	3	1	11	21	13	4	2	0	8	15	4	1	0	0	0	8	26	31	46	37	46	31	20	7	252						
	H13年	3	12	24	28	26	7	0	3	16	24	19	6	2	9	22	12	6	1	1	12	10	8	3	0	0	0	12	19	33	34	42	44	35	27	6	252						
	H17年	9	32	77	67	41	7	10	33	59	40	25	8	1	13	25	19	4	2	3	26	62	23	7	0	1	2	26	85	81	94	76	105	80	43	7	597						

(注) 各大学の数値は、平成10年度の調査、平成13年度は平成14年2月28日、平成17年度は平成18年3月31日の数値。

表 4-1-i 教員、教育支援者あたりの学生数

大学	調査年	学生数	入学定員	教員数	支援者数	学生/(教員+支援者数)	学生/教員	入学定員/教員数	教員充足率
酪農大	平成10年	720	120	49	54	7	14.7	2.45	0.34
	平成14年	720	120	50	58	6.6	14.4	2.4	0.35
	平成18年	720	120	52	48	7.2	13.8	2.3	0.36
北里大	平成10年	720	120	46	36	8.8	15.7	2.61	0.32
	平成14年	720	120	50	36	8.4	14.4	2.4	0.35
	平成18年	720	120	47	48	7.6	15.3	2.6	0.32
日獣大	平成10年	480	80	51	49	4.8	9.4	1.57	0.53
	平成14年	480	80	51	49	4.8	9.4	1.57	0.53
	平成18年	480	80	53	52	4.6	9	1.51	0.55
麻布大	平成10年	720	120	64	21	8.5	11.3	1.88	0.44
	平成14年	720	120	64	19	8.7	11.3	1.88	0.44
	平成18年	720	120	55	7	11.6	13.1	2.2	0.38
日大	平成10年	720	120	39	3	17.1	18.4	3.08	0.29
	平成14年	720	120	41	11	13.9	17.6	2.93	0.29
	平成18年	720	120	48	27	9.6	15	2.5	0.33

注) 各大学の数値は、平成10年度の調査、平成14年2月28日、平成18年12月1日現在の数値

大学	学生数	入学定員	教員数	支援者数	学生/(教員+支援者)	学生/教員	入学定員/教員数
国立	1740	290	266	222	0.6	6.5	1.1
国公立	1980	330	316	232	0.6	6.3	1.0
重点化大学	420	70	98	150	0.3	4.3	0.7
重点化以外の国立	1320	220	168	72	0.9	7.9	1.3

注) 上記の国立大学のデータは平成10年度の報告書から引用

表4-2-a 教員の活動時間比率（非臨床系教員）

調査年度	教授						助教授						講師						助手						非臨床系全体										
	大学		大学院		人教		大学		大学院		人教		大学		大学院		人教		大学		大学院		人教		大学		大学院		人教						
	学術	臨床	学術	臨床	研究	管理	社会	学術	臨床	学術	臨床	研究	管理	社会	学術	臨床	学術	臨床	研究	管理	社会	学術	臨床	学術	臨床	研究	管理	社会	学術	臨床	研究	管理	社会		
H13	4.31	0.04	1.30	2.31	1.35	0.69	13	5.11	0.14	0.90	3.00	0.72	0.95	11	4.33	0.00	1.00	3.33	0.33	0.67	6	3.00	0.00	0.00	6.00	0.00	1.00	2	4.56	0.06	1.03	2.97	0.86	0.83	32
H17	4.24	0.00	1.26	2.59	1.27	0.69	17	4.40	0.20	0.60	2.70	1.20	0.90	10	2.33	0.67	2.00	3.33	1.00	0.67	3	4.00	0.00	0.00	4.00	2.00	0.00	2	4.09	0.13	1.05	2.78	1.27	0.71	32
H13	3.85	0.15	1.31	2.35	1.46	0.88	13	4.60	0.00	0.75	3.70	0.20	0.35	10	4.00	0.00	1.88	5.06	0.06	0.19	8	3.50	0.00	0.30	6.25	0.00	0.00	5	4.06	0.06	0.94	3.80	0.61	0.47	36
H17	5.18	0.04	0.82	2.82	0.43	0.71	14	4.50	0.09	0.55	4.41	0.14	0.32	11	4.50	0.42	1.08	3.75	0.17	0.08	6	3.25	0.00	0.25	6.38	0.00	0.13	4	4.63	0.11	0.71	3.89	0.24	0.41	35
H13	3.81	0.03	1.19	2.34	1.66	1.03	16	5.20	0.10	0.70	3.10	0.60	0.40	5	3.79	0.50	0.79	2.93	0.93	1.07	7	3.50	0.13	0.25	5.00	0.38	0.75	8	3.93	0.15	0.84	3.15	1.09	0.89	36
H17	3.86	0.14	1.26	1.82	1.88	1.24	14	3.93	0.34	1.47	2.22	1.11	0.92	6	3.60	0.00	0.60	4.30	0.90	0.60	5	4.21	0.00	0.29	3.93	1.00	0.57	7	3.91	0.15	1.03	2.62	1.37	0.93	35
H13	3.76	0.19	1.53	2.44	1.41	0.75	17	4.00	0.00	0.86	3.31	1.04	0.68	11	4.13	0.00	0.69	4.23	0.56	0.40	8	3.00	0.00	0.00	3.00	4.00	0.00	1	3.92	0.08	2.51	3.11	1.11	0.65	36
H17	3.60	0.25	1.45	2.05	1.95	0.70	13	4.00	0.00	0.80	3.88	0.50	0.82	13	3.66	0.00	1.17	4.17	0.50	0.50	9	3.00	0.00	0.00	3.00	4.00	0.00	1	3.74	0.09	1.11	3.27	1.12	0.67	36
H13	4.42	0.04	1.33	1.92	1.29	0.92	12	3.60	0.14	0.70	2.90	2.00	0.66	6	4.00	0.00	0.00	3.00	2.00	1.00	1	4.17	0.83	0.67	3.67	0.67	0.00	6	4.15	0.25	0.97	2.62	1.34	0.64	25
H17	3.38	0.04	1.38	2.54	1.42	1.23	13	4.50	0.10	1.38	2.63	1.05	0.35	4	4.20	0.00	0.80	3.20	1.10	0.70	5	5.67	0.00	0.00	4.33	0.00	0.00	3	4.00	0.04	1.10	2.90	1.13	0.84	25
国立	2.92	0.10	1.99	2.29	1.86	0.83	79	3.06	0.26	1.72	3.35	0.98	0.63	72	3.92	0.17	1.08	2.92	1.25	0.67	6	2.44	0.24	1.83	4.42	0.60	0.47	41	2.90	0.19	1.83	3.13	1.26	0.68	198
国公立	2.87	0.11	2.00	2.35	1.84	0.84	89	3.03	0.24	1.72	3.46	0.97	0.59	79	3.75	0.10	1.25	2.85	1.35	0.70	10	2.42	0.22	1.70	4.53	0.62	0.50	54	2.86	0.18	1.80	3.26	1.24	0.67	232
重点化	2.24	0.04	2.44	2.56	1.68	1.04	25	2.21	0.42	2.60	3.27	0.85	0.65	24							1	1.80	0.03	2.40	5.18	0.28	0.33	20	2.11	0.16	2.45	3.54	1.03	0.70	70
上記以外	3.24	0.13	1.79	2.16	1.94	0.73	54	3.49	0.19	1.28	3.39	1.04	0.62	48	4.10	0.20	1.30	3.10	0.70	0.60	5	3.05	0.45	1.29	3.70	0.91	0.60	21	3.34	0.21	1.50	2.91	1.39	0.66	128
私立	4.35	0.06	1.14	2.26	1.31	0.89	68	4.34	0.10	0.74	3.23	0.89	0.69	45	4.54	0.09	0.66	3.33	0.70	0.69	28	3.92	0.03	0.33	5.04	0.23	0.45	18	4.33	0.07	0.85	3.04	0.96	0.75	159
全体	3.51	0.09	1.62	2.31	1.61	0.86	157	3.51	0.19	1.36	3.37	0.94	0.63	124	4.33	0.09	0.82	3.21	0.87	0.69	38	2.79	0.17	1.36	4.66	0.53	0.49	72	3.45	0.14	1.41	3.17	1.13	0.70	391

注) 各大学の数値は、平成13年度は平成14年2月28日、平成17年度は平成18年3月31日の数値。

表4-2-c 教員の活動時間比率(全体)

調査年度	教授						助教授						講師						助手						全体										
	大学		大学院		社会		大学		大学院		社会		大学		大学院		社会		大学		大学院		社会		大学		大学院		社会						
	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数	学部	人数					
全体	3.24	1.03	1.32	1.97	1.11	1.02	20	3.91	1.61	0.84	2.47	0.75	0.89	19	4.00	0.89	0.71	3.11	0.27	0.78	9	3.00	0.00	0.00	6.00	0.00	1.00	2	3.62	1.18	0.97	2.53	0.78	0.93	50
福井大	3.84	0.84	1.03	2.38	1.15	0.84	25	3.91	1.35	0.53	2.32	1.06	0.82	17	2.33	0.67	2.00	3.33	1.00	0.67	3	3.67	1.67	0.33	3.00	1.33	0.00	3	3.76	1.06	0.87	2.46	1.12	0.77	48
北里大	3.80	0.53	1.30	2.27	1.26	0.91	17	4.33	0.58	0.67	3.50	0.21	0.38	12	3.46	1.15	1.46	3.88	0.96	0.50	13	3.13	1.31	0.19	5.22	0.00	0.38	8	3.73	0.83	1.01	3.46	0.50	0.59	50
聖光大	4.83	0.50	0.83	2.58	0.50	0.75	18	4.38	0.42	0.50	4.21	0.17	0.33	12	3.55	2.05	0.68	3.36	0.18	0.18	11	3.25	0.00	0.25	6.38	0.00	0.13	5	4.21	0.86	0.64	3.58	0.28	0.43	46
日大	3.67	0.42	1.20	2.20	1.53	1.02	20	4.43	0.79	0.71	2.93	0.71	0.50	7	3.10	1.84	0.79	2.45	0.73	1.08	13	3.50	0.50	0.20	4.90	0.30	0.60	10	3.60	0.86	0.83	2.91	0.96	0.88	50
日大	3.66	0.66	1.27	1.59	1.67	1.15	19	3.26	1.77	1.38	1.87	0.90	0.82	15	3.21	0.57	0.93	3.86	0.79	0.64	7	3.14	2.27	0.44	2.78	0.78	0.60	12	3.38	1.28	1.06	2.28	1.13	0.86	53
麻布大	3.69	0.64	1.38	2.22	1.31	0.83	23	3.20	1.55	0.77	2.52	0.92	0.92	20	3.80	0.70	0.65	3.88	0.50	0.47	10	1.75	4.00	0.00	3.00	0.25	1.00	2	3.46	1.10	0.98	2.70	0.98	0.81	55
日大	3.43	0.69	1.33	1.99	1.76	0.81	18	3.57	1.19	0.78	3.07	0.52	0.86	21	3.46	0.92	0.81	3.81	0.50	0.50	13	3.00	2.00	0.00	3.00	1.33	0.67	3	3.47	1.01	0.92	2.89	0.97	0.75	55
日大	4.00	0.64	1.22	2.22	1.08	0.95	18	3.50	1.09	0.74	2.54	1.50	0.61	9	4.65	2.10	0.13	1.95	0.63	0.55	4	3.37	2.09	0.46	2.73	0.46	0.00	11	3.79	1.25	0.81	2.40	0.97	0.59	42
日大	3.47	0.44	1.29	2.41	1.26	1.12	17	4.14	1.20	1.07	2.21	0.89	0.49	7	3.67	1.92	0.83	2.21	0.79	0.58	12	4.00	2.88	0.00	2.88	0.00	0.25	8	3.73	1.41	0.90	2.41	0.85	0.71	44
国立	2.72	0.74	1.86	2.07	1.69	0.92	117	2.81	0.95	1.59	3.14	0.87	0.64	99	3.44	0.63	1.19	2.81	1.19	0.75	8	2.23	1.53	1.48	3.58	0.65	0.54	71	2.65	1.00	1.66	2.81	1.15	0.73	295
国立	2.67	0.70	1.86	2.11	1.73	0.92	130	2.80	0.92	1.59	3.22	0.87	0.80	106	3.23	0.80	1.23	2.77	1.23	0.73	15	2.20	1.55	1.40	3.62	0.69	0.54	92	2.61	1.00	1.63	2.89	1.16	0.71	345
重点化	2.20	0.66	2.23	2.24	1.59	1.09	35	2.11	0.63	2.39	3.50	0.73	0.63	32	2.50	1.00	1.00	2.00	2.50	1.00	2	1.74	1.00	2.16	4.47	0.26	0.38	29	2.04	0.76	2.23	3.31	0.93	0.73	98
上記以外	2.94	0.77	1.70	1.99	1.74	0.85	82	3.14	1.10	1.21	2.97	0.94	0.64	67	3.75	0.50	1.25	3.08	0.75	0.67	6	2.56	1.89	1.01	2.97	0.92	0.64	42	2.95	1.11	1.38	2.57	1.26	0.73	197
私立	4.05	0.54	1.12	2.20	1.15	0.95	101	3.70	1.34	0.71	2.72	0.80	0.73	71	3.88	1.36	0.56	3.00	0.53	0.68	51	3.41	1.41	0.25	4.28	0.28	0.38	28	3.85	1.03	0.79	2.74	0.83	0.77	251
全体	3.28	0.63	1.54	2.15	1.48	0.93	231	3.16	1.09	1.24	3.02	0.84	0.65	179	3.73	1.23	0.71	2.95	0.69	0.69	66	2.48	1.52	1.13	3.77	0.59	0.51	120	3.13	1.01	1.27	2.83	1.02	0.73	596

注)各大学の数値は、平成13年度は平成14年2月28日、平成17年度は平成18年3月31日の数値。

表 4-3 教員採用基準

大学	調査 年度	公募制			任期制			年令制限			研究業績			教育経験			臨床経験 (臨床教官)			社会的活動			その他
		教授	助 教授	助 手	教授	助 教授	助 手	教授	助 教授	助 手	教授	助 教授	助 手	教授	助 教授	助 手	教授	助 教授	助 手	教授	助 教授	助 手	
酪農大	H14年	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	
	H18年	○	○	○	×	×	×	○	○	○	△	△	△	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	博士の学位
北里大	H14年	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	
	H18年	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	助手以外 博士の学位
日歎大	H14年	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	H18年	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	博士の学位
麻布大	H14年	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	
	H18年	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	
日大	H14年	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	△	△	
	H18年	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	△	△	△	△	△	△	△	△	博士の学位

注1) ○：有り、×：無し、△：規定は無いが参考にする、▽：考慮する、▲：重視する、?：検討中。

注2) 調査年は、平成14年2月28日と平成18年3月31日

注3) 酪農学園大では大学院教員についての規定がある

表 4-4 教員の昇格条件

職位	大学	調査年	研究業績等	教育経験等	臨床経験	社会活動	博士号	備考
教授	酪農大	H14年	20(最近5年5編)	△	○臨床系	△		
		H18年	30(筆頭10、最近5年5編)	△	△	△	○	
	北里大	H14年	20(最近5年5編)	△	○臨床系	△		
		H18年	20(最近5年5編)	△	○臨床系	△	○	
	日獣大*	H14年	30(筆頭10編)	△	×	×		
H18年	40(筆頭10編)	△	△	×	○	臨床系10編以内で著書、総説、技術講座可		
麻布大	H14年	20(筆頭5編)	×	×	△			
	H18年	20(筆頭5編)	△	△	△			
日大	H14年	30	×	×	△			
	H18年	30(筆頭15編)	△	○臨床系	△	○	著書3編 総合的評価	
助教授	酪農大	H14年	10(最近5年3編)	△	○臨床系	△		
		H18年	△	△	△	△	○	
	北里大	H14年	10(最近5年3編)	△	○臨床系	△		
		H18年	10(最近5年3編)	△	○臨床系	△	○	
	日獣大	H14年	15(筆頭5編)	△	×	×		
H18年	20(筆頭5編)	△	△	×	○	臨床系和文症例報告可		
麻布大	H14年	10(筆頭5編)	×	×	△			
	H18年	10(筆頭5編)	△	△	△			
日大	H14年	20編	×	×	△			
	H18年	20(筆頭10編)	△	○臨床系	△	○	総合的評価	
講師	酪農大	H14年	10(最近5年3編)	△	○臨床系	△		
		H18年	△	△	△	△	○	
	北里大	H14年	5(最近5年3編)	△	○臨床系	△		
		H18年	5(最近5年3編)	△	○臨床系	△	○	
	日獣大	H14年	8(筆頭2~3編)	△	×	×		
H18年	10(筆頭3編)	△	△	×	○	臨床系和文症例報告可		
麻布大	H14年	5編	×	×	△			
	H18年	5(筆頭3編)	△	△	△			
日大	H14年	10編	×	×	△			
	H18年	10(筆頭5編)	△	○臨床系	△	○	総合的評価	

注1) ○: 規定あり、△: 参考にする、考慮する、または望ましい、×: 規定なし、?: 検討中、

注2) *大学院担当について追加あり

注3) 調査年は、平成14年2月28日と平成18年3月31日

注4) 酪農学園大では大学院教員について規定がある

表4-5-a 研究業績 (非臨床系教員)

非臨床系	調査年度	教 授					助 教 員					講 師					助 手					非臨床系全体																					
		著書	論文	記要	特許	受賞	人数	著書	論文	記要	特許	受賞	人数	著書	論文	記要	特許	受賞	人数	著書	論文	記要	特許	受賞	人数																		
階級大	H10	3.0	17.2	1.3	4.9	0.0	0.3	3.3	12	2.2	13.0	1.5	4.8	0.0	0.2	3.2	12	0.3	11.0	0.3	1.3	0.0	0.0	1.5	6	0.0	6.0	0.0	0.0	0.0	0.5	2	2.0	13.8	1.1	3.9	0.0	0.2	2.8	32			
	H12	1.2	4.6	0.5	1.9	0.0	0.0	1.4	13	1.3	5.4	0.5	1.4	0.0	0.0	1.5	10	0.1	3.1	0.3	0.1	0.0	0.0	0.1	7	0.0	2.0	0.0	1.0	0.0	0.5	0.0	2	0.9	4.4	0.4	1.3	0.0	0.0	1.1	32		
	H17	2.9	19.8	0.6	6.2	0.2	0.3	1.5	17	1.0	11.4	0.7	3.0	0.0	0.2	1.1	10	1.0	16.3	1.0	0.0	0.3	1.0	0.0	3	0.0	8.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	2	1.9	16.1	0.6	4.2	0.1	0.4	1.1	32		
北里大	H10	2.3	14.7	1.7	3.2	0.0	0.1	0.9	14	1.0	15.0	0.2	1.8	0.0	0.3	1.7	11	1.3	10.8	1.2	2.0	0.0	0.3	1.5	6	0.3	9.3	0.3	1.8	0.0	0.0	0.5	4	1.5	13.5	1.0	2.4	0.0	0.2	1.2	35		
	H12	0.8	4.6	0.8	0.8	0.0	0.0	0.0	13	1.0	5.6	0.0	0.3	0.0	0.0	0.6	10	0.1	4.4	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	8	0.0	4.2	0.0	0.4	0.0	0.0	0.4	5	0.6	4.8	0.3	0.5	0.0	0.0	0.2	36		
	H17	2.3	14.1	1.7	3.3	0.0	0.1	1.1	14	1.1	14.9	0.3	2.0	0.0	0.3	1.6	11	1.3	10.8	1.5	1.7	0.0	0.3	1.3	6	0.3	9.3	0.0	1.8	0.0	0.0	0.8	4	1.5	13.3	1.0	2.4	0.0	0.2	1.3	35		
日 大	H10	4.6	12.7	1.5	5.5	0.0	0.3	0.5	15	2.2	10.4	1.0	3.0	0.0	0.2	1.2	5	2.1	8.6	0.4	2.9	0.0	0.0	0.6	7	0.5	5.5	0.4	1.1	0.0	0.1	0.4	8	2.8	9.9	0.9	3.6	0.0	0.2	0.6	35		
	H12	1.4	4.6	1.1	2.1	0.0	0.1	0.7	17	1.2	4.6	0.8	3.6	0.0	0.0	1.0	5	0.4	3.4	0.4	2.4	0.0	0.0	0.1	7	0.1	0.4	0.1	1.1	0.0	0.0	0.0	8	0.9	3.5	0.7	2.1	0.0	0.0	0.5	37		
	H17	3.3	15.0	0.9	4.6	0.0	0.2	1.9	14	2.2	11.1	0.3	9.3	0.1	0.0	1.4	9	0.8	5.4	0.4	1.6	0.4	0.0	1.0	5	0.3	5.9	0.9	1.3	0.1	0.0	1.6	7	2.1	10.8	0.7	4.7	0.1	0.1	1.6	35		
解布大	H10	2.3	10.3	1.0	2.3	0.0	0.1	1.1	16	0.9	9.5	0.9	3.3	0.0	0.1	2.0	12	0.9	5.3	1.1	1.1	0.0	0.0	0.4	7	0	1.5	9.0	1.0	2.4	0.0	0.1	1.3	35	0	1.5	9.0	1.0	2.4	0.0	0.1	1.3	35
	H12	1.2	5.3	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	17	1.1	4.6	0.0	0.6	0.0	0.0	1.4	11	0.4	3.8	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	8	0	1.0	4.8	0.0	0.7	0.0	0.0	0.4	36	0	1.0	4.8	0.0	0.7	0.0	0.0	0.4	36
	H17	3.2	12.3	0.2	4.2	0.0	0.2	1.4	13	1.3	13.5	0.1	3.2	0.2	0.1	2.2	13	0.5	8.2	0.0	0.3	0.5	0.0	1.2	9	0.0	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	1.8	11.4	0.1	2.8	0.2	0.1	1.6	36			
日 大	H10	3.9	13.9	1.8	13.1	0.3	0.1	0.2	12	3.0	12.3	1.0	5.3	0.0	0.0	0.8	4	1.0	16.5	0.0	1.0	0.0	0.5	2.0	2	0.3	7.0	0.3	1.3	0.0	0.0	0.0	4	2.8	12.6	1.2	8.4	0.2	0.1	0.4	22		
	H12	1.5	6.1	0.5	4.5	0.4	0.0	0.4	10	0.8	7.8	0.4	1.6	0.0	0.0	1.4	5	1.0	5.0	8.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1	0.5	4.5	0.3	2.0	0.0	0.0	0.0	4	1.1	6.2	0.8	3.1	0.2	0.0	0.6	20		
	H17	5.8	29.0	0.0	5.1	0.4	0.2	0.9	13	2.0	21.8	0.0	7.3	0.0	0.0	0.8	4	0.0	13.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	3	0.4	18.4	0.8	4.8	0.0	0.2	2.6	5	3.4	23.8	0.2	4.8	0.2	0.1	1.2	25		
国公立 重点化 重点化 外の国立	立	3.1	14.4	1.2	5.1	0.1	0.2	1.7	85	1.6	13.5	0.7	3.1	0.0	0.2	1.9	56	1.1	10.5	0.6	1.8	0.0	0.1	1.2	33	0.4	8.6	0.2	1.2	0.0	0.2	0.8	34	1.9	12.6	0.8	3.4	0.0	0.2	1.5	208		
	公立	3.4	26.0	0.6	5.3	0.1	0.2	3.4	89	2.1	20.6	0.6	2.7	0.2	0.1	2.3	79	0.4	12.2	1.0	1.8	0.0	0.0	1.3	10	1.0	13.8	0.6	1.5	0.0	0.1	1.6	54	2.3	20.7	0.6	3.4	0.1	0.1	2.5	232		
	重点化	5.1	43.8	1.0	8.9	0.4	0.2	5.3	25	2.9	25.9	0.3	3.4	0.2	0.1	3.5	24	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	1.4	14.1	0.3	0.7	0.1	0.1	2.1	20	3.2	28.5	0.5	4.5	0.2	0.1	3.7	70		
私立 全体	立	2.7	19.3	0.5	4.4	0.1	0.1	2.2	54	1.9	18.1	0.9	2.5	0.2	0.1	1.8	48	0.6	8.8	1.8	2.0	0.0	0.0	0.8	5	1.0	14.8	1.2	2.2	0.0	0.0	1.2	21	2.0	17.7	0.8	3.2	0.1	0.1	1.8	128		
	立	3.2	13.6	1.4	5.5	0.1	0.1	1.2	69	1.6	12.2	0.9	3.5	0.0	0.2	2.0	44	1.2	9.3	0.7	1.8	0.0	0.1	1.0	28	0.3	6.7	0.3	1.2	0.0	0.1	0.3	18	2.1	11.7	1.0	3.8	0.0	0.1	1.3	158		
	全体	3.3	20.6	1.0	5.4	0.1	0.2	2.4	158	1.9	17.6	0.7	3.0	0.1	0.1	2.2	123	1.0	10.1	0.8	1.6	0.0	0.1	1.1	38	0.9	12.0	0.5	1.4	0.0	0.1	1.3	72	2.2	17.0	0.8	3.6	0.1	0.1	2.0	391		

注) 各大学の数値は、平成10年度調査は6年から10年までの5年間、平成12年度調査は平成11年と12年の2年間、平成17年度調査は平成13-17年度までの5年間の数値。

表4-5-b 研究業績 (臨床系教員)

臨床系年度	教 授					助 教 員					講 師					助 手					臨床系全体												
	著書	論文	紀要	他	特許	受賞	研究	人数	著書	論文	紀要	他	特許	受賞	研究	人数	著書	論文	紀要	他	特許	受賞	研究	人数	著書	論文	紀要	他	特許	受賞	研究	人数	
H10	2.5	12.0	0.3	9.8	0.0	1.0	0.8	6	2.8	15.5	0.8	10.8	0.0	1.3	1.4	8	1.3	17.0	0.3	11.3	0.0	0.7	1.7	3	0	2.4	14.5	0.5	10.5	0.0	1.1	1.2	17
H12	0.4	5.1	0.0	12.6	0.0	0.7	0.3	7	0.7	5.7	0.4	2.8	0.0	0.6	0.9	9	0.0	9.5	0.0	5.5	0.0	0.0	0.0	2	0	0.5	5.9	0.2	6.9	0.0	0.6	0.6	18
H17	3.1	23.3	0.5	12.3	0.1	1.3	1.6	8	2.7	12.9	0.4	7.9	0.0	0.4	0.5	7	0	0.0	14.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0	2.8	18.1	0.4	9.6	0.1	1.0	1.1	16
H10	1.8	9.3	0.0	3.3	0.0	0.3	1.8	4	1.0	5.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1	0.2	10.0	0.0	3.8	0.0	0.2	1.0	5	0	0.8	8.5	0.0	3.0	0.0	0.2	1.1	11
H12	1.3	4.3	0.0	1.8	0.0	0.0	0.3	4	2.0	3.5	0.0	5.5	0.0	0.5	0.0	2	1.0	2.0	1.2	2.6	0.0	0.0	0.6	5	0	1.1	2.8	0.5	2.7	0.0	0.1	0.4	14
H17	1.8	6.5	0.0	6.0	0.0	0.3	1.8	4	1.0	4.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1	0.2	9.6	0.0	5.0	0.0	0.2	1.0	5	0	0.8	7.2	0.0	4.5	0.0	0.2	1.1	11
H10	2.8	15.3	0.0	10.8	0.3	0.3	0.3	4	5.5	12.5	0.5	10.3	0.0	0.0	1.8	4	1.5	12.0	0.5	11.8	0.0	0.2	0.2	6	2	2.8	13.0	0.3	12.6	0.1	0.2	0.6	16
H12	0.3	8.0	0.0	2.5	0.0	0.5	0.3	4	1.0	13.0	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	2	0.3	1.8	0.3	2.0	0.0	0.7	0.1	6	2	0.4	6.0	0.1	1.9	0.0	0.5	0.1	14
H17	1.4	24.4	0.2	3.8	0.0	1.4	0.2	5	2.3	19.3	0.2	17.8	0.0	1.2	0.3	6	1.5	37.5	0.0	0.0	0.0	1.0	2.5	2	5	1.5	19.8	2.0	8.4	0.0	1.1	0.7	18
H10	4.8	10.0	0.3	8.9	0.1	0.6	0.6	11	3.5	5.8	0.5	5.4	0.1	0.3	1.4	11	1.0	11.8	0.2	6.8	0.0	0.6	0.0	5	2	3.3	8.4	0.3	7.0	0.1	0.4	0.8	29
H12	1.5	3.6	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	6	1.3	0.0	0.4	5.4	0.0	0.0	0.0	9	0.5	1.5	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	2	4	1.1	1.8	0.2	2.5	0.0	0.0	0.0	21
H17	3.3	10.8	0.5	8.5	0.2	0.2	1.7	5	2.5	7.5	0.0	26.0	0.3	0.0	0.8	8	0.0	5.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	4	2	2.1	7.1	0.1	12.5	0.1	0.0	0.9	21
H10	5.9	27.5	2.0	14.9	0.0	0.6	1.1	8	3.3	20.7	0.0	5.7	0.0	0.7	1.3	3	0.5	10.3	0.5	4.3	0.0	0.0	0.3	4	5	3.3	19.1	1.0	8.5	0.0	0.5	0.7	20
H12	0.8	10.3	0.0	2.5	0.0	0.8	0.2	6	3.3	5.3	0.0	2.7	1.0	0.7	0.3	3	0.0	3.0	0.3	1.0	0.0	0.3	0.3	3	5	1.1	7.9	1.2	1.7	0.2	0.6	0.2	17
H17	3.3	42.3	0.3	5.3	0.0	1.3	1.0	4	2.3	17.3	0.0	7.0	1.7	0.3	3.7	3	2.1	23.4	0.0	2.9	0.0	0.9	0.4	7	5	1.9	23.1	0.5	5.0	0.3	0.9	1.0	19
国立	2.7	27.3	1.5	6.8	0.2	0.3	2.8	38	1.9	17.8	0.5	7.1	0.3	0.3	2.0	27	0.5	24.0	1.0	2.0	0.0	1.0	2.0	2	30	1.7	19.3	0.8	5.3	0.2	0.3	2.0	97
国公立	2.6	27.0	1.4	6.8	0.2	0.3	3.0	41	1.9	17.5	0.4	6.7	0.3	0.3	2.0	29	0.8	20.2	1.0	2.4	0.0	1.0	3.0	5	38	1.6	18.5	0.7	4.9	0.2	0.3	2.1	113
重点化 重点化以 外の国立	3.4	33.7	1.5	6.3	0.5	0.5	5.8	10	1.9	22.1	0.3	5.5	0.1	0.5	2.9	8	0.0	31.0	2.0	1.0	0.0	2.0	4.0	1	9	1.8	22.8	0.9	4.7	0.2	0.6	3.5	28
私立	2.4	25.1	1.5	7.0	0.1	0.2	1.8	28	1.9	15.9	0.6	7.8	0.4	0.2	1.6	19	1.0	17.0	0.0	3.0	0.0	0.0	0.0	1	21	1.7	17.9	0.8	5.5	0.2	0.2	1.4	69
全体	4.0	15.2	0.6	10.1	0.1	0.6	0.9	33	3.4	11.3	0.5	7.6	0.0	0.6	1.4	27	0.9	11.9	0.3	7.6	0.0	0.3	0.5	23	10	2.8	12.6	0.5	8.5	0.0	0.5	0.8	93
全体	3.2	21.7	1.0	8.2	0.1	0.5	2.1	74	2.6	14.5	0.5	7.1	0.2	0.4	1.7	56	0.9	13.4	0.4	6.7	0.0	0.4	1.0	28	48	2.1	15.8	0.6	6.5	0.1	0.4	1.5	206

注) 各大学の数値は、平成10年度調査は6年から10年までの5年間、平成12年度調査は平成11年と12年の2年間、平成17年度調査は平成13-17年度までの5年間の数値。

表4-5-c 研究業績 (全体)

調査年度	教 員					助 教 員					講 師					助 手					全 体																			
	著書	論文	紀要	他	特許	受賞	研究	人数	著書	論文	紀要	他	特許	受賞	研究	人数	著書	論文	紀要	他	特許	受賞	研究	人数	著書	論文	紀要	他	特許	受賞	研究	人数								
H10	2.8	15.4	1.0	6.6	0.0	0.5	2.5	18	2.4	14.0	1.2	7.2	0.0	0.6	2.5	20	0.7	13.0	0.3	4.7	0.0	0.2	1.6	9	0.0	6.0	0.0	0.0	0.0	0.5	2	2.1	14.0	0.9	6.2	0.0	0.5	2.2	49	
H12	0.9	4.8	0.3	5.6	0.0	0.2	1.0	20	1.0	5.5	0.5	2.1	0.0	0.3	1.2	19	0.1	4.5	0.3	1.3	0.0	0.0	0.1	9	0.0	2.0	0.0	1.0	0.0	0.5	0.0	2	0.8	4.9	0.3	3.3	0.0	0.2	0.9	50
H17	3.0	20.9	0.6	8.1	0.2	0.6	1.5	25	1.7	12.0	0.6	5.0	0.0	0.3	0.9	17	1.5	15.0	1.5	0.0	0.5	1.0	0.0	2	0.0	10.0	0.0	0.0	0.0	1.7	0.0	3	2.2	16.8	0.6	6.0	0.1	0.6	1.1	48
H10	2.2	13.5	1.3	3.2	0.0	0.1	1.1	18	1.0	14.2	0.2	1.8	0.0	0.3	1.6	12	0.8	10.5	0.6	2.8	0.0	0.3	1.3	11	0.2	7.6	0.2	1.4	0.0	0.0	0.4	5	1.3	12.3	0.7	2.5	0.0	0.2	1.2	46
H12	0.9	4.5	0.6	1.0	0.0	0.0	0.1	17	1.2	5.3	0.0	1.2	0.0	0.1	0.5	12	0.4	3.5	0.5	1.1	0.0	0.0	0.2	13	0.1	3.3	0.1	1.0	0.0	0.1	0.4	8	0.7	4.2	0.3	1.1	0.0	0.0	0.3	50
H17	2.2	12.4	1.3	3.9	0.0	0.1	1.2	18	1.1	14.0	0.3	1.9	0.0	0.3	1.5	12	0.8	10.3	0.8	3.2	0.0	0.3	1.2	11	0.2	7.6	0.0	1.4	0.0	0.0	0.6	5	1.3	11.8	0.8	2.9	0.0	0.2	1.2	46
H10	4.2	13.3	1.2	6.6	0.1	0.3	0.5	19	3.7	11.3	0.8	6.2	0.0	0.1	1.4	9	1.8	10.2	0.5	7.0	0.0	0.1	0.4	13	0.7	6.9	0.3	5.6	0.0	0.2	0.4	10	2.8	10.9	0.7	6.4	0.0	0.2	0.6	51
H12	1.2	5.2	0.9	2.2	0.0	0.2	0.6	21	1.1	7.0	0.6	3.1	0.0	0.0	0.7	7	0.4	2.7	0.4	2.2	0.0	0.3	0.1	13	0.1	1.8	0.1	0.9	0.0	0.1	0.0	10	0.8	4.2	0.6	2.1	0.0	0.2	0.4	51
H17	2.8	17.5	0.7	4.4	0.0	0.5	1.5	19	2.3	14.4	0.3	12.7	0.1	0.5	1.0	15	1.0	14.6	0.3	1.1	0.3	0.3	1.4	7	0.4	7.1	3.3	2.8	0.1	0.3	1.3	12	1.9	13.9	1.1	6.0	0.1	0.4	1.3	53
H10	3.3	10.2	0.7	5.0	0.0	0.3	0.9	27	2.1	7.7	0.7	4.3	0.0	0.2	1.7	23	0.9	8.0	0.8	3.5	0.0	0.3	0.3	12	0.5	6.0	0.0	6.0	0.0	0.0	0.0	2	2.3	8.8	0.7	4.5	0.0	0.2	1.0	64
H12	1.3	4.9	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	23	1.2	2.5	0.2	2.7	0.0	0.0	0.8	20	0.4	3.3	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	10	0.5	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4	1.0	3.7	0.1	1.3	0.0	0.0	0.3	57
H17	3.2	11.9	0.3	5.4	0.0	0.2	1.5	18	1.8	11.2	0.1	11.9	0.2	0.1	1.6	21	0.3	7.2	0.0	0.5	0.3	0.0	0.8	13	2.3	6.0	0.0	3.0	0.0	0.0	1.3	3	1.9	10.2	0.1	6.6	0.2	0.1	1.4	55
H10	4.7	19.4	1.9	13.8	0.2	0.3	0.6	20	3.1	15.9	0.6	5.4	0.0	0.3	1.0	7	0.7	12.3	0.3	3.2	0.0	0.2	0.8	6	0.9	9.6	0.3	2.3	0.0	0.2	0.0	9	3.0	15.7	1.1	8.4	0.1	0.3	0.5	42
H12	1.2	7.7	0.3	3.8	0.3	0.3	0.3	16	1.8	6.9	0.3	2.0	0.4	0.3	1.0	8	0.3	3.5	2.2	1.0	0.0	0.2	0.2	4	0.7	7.2	2.3	1.2	0.0	0.3	0.0	9	1.1	6.9	1.0	2.5	0.2	0.3	0.4	37
H17	5.2	32.1	0.1	5.1	0.3	0.4	0.9	17	2.1	19.9	0.0	7.1	0.7	0.1	2.0	7	1.4	21.3	0.3	3.7	0.0	0.6	1.3	12	0.1	11.5	1.1	4.1	0.0	0.6	0.3	8	2.8	23.5	0.3	4.9	0.2	0.5	1.1	44
国 立	3.2	27.2	0.9	6.1	0.2	0.2	3.1	117	2.1	19.9	0.6	4.0	0.2	0.2	2.3	99	0.5	11.5	1.5	1.8	0.0	0.3	1.0	8	0.9	12.6	0.6	1.6	0.0	0.1	1.4	71	2.2	20.8	0.7	4.2	0.2	0.2	2.3	295
国公立	3.1	26.3	0.9	5.8	0.2	0.2	3.3	130	2.0	19.8	0.6	3.8	0.2	0.2	2.2	108	0.5	14.9	1.0	2.0	0.0	0.3	1.9	15	0.8	12.2	0.4	1.6	0.0	0.2	1.4	92	2.0	20.0	0.7	3.9	0.1	0.2	2.4	345
重点化 重点化以 外の国立	4.6	40.9	1.1	8.2	0.4	0.3	5.4	35	2.7	24.9	0.3	3.9	0.2	0.2	3.3	32	0.0	15.5	1.5	0.5	0.0	1.0	2.0	2	1.0	12.9	0.3	1.3	0.0	0.2	1.9	29	2.8	26.9	0.6	4.6	0.2	0.3	3.6	98
私立	2.6	21.3	0.8	5.3	0.1	0.1	2.0	82	1.9	17.5	0.8	4.0	0.2	0.1	1.7	67	0.7	10.2	1.5	2.2	0.0	0.0	0.7	6	0.8	12.5	0.7	1.9	0.0	0.1	1.0	42	1.9	17.8	0.8	4.0	0.1	0.1	1.7	197
私立	3.5	14.1	1.2	7.0	0.1	0.3	1.1	102	2.3	11.8	0.7	5.0	0.0	0.3	1.8	71	1.1	10.5	0.5	4.4	0.0	0.2	0.8	51	0.6	7.8	0.3	3.4	0.0	0.1	0.3	28	2.3	12.0	0.8	5.5	0.0	0.3	1.1	252
全 体	3.3	20.9	1.0	6.3	0.1	0.3	2.3	232	2.1	16.6	0.6	4.3	0.1	0.2	2.0	179	0.9	11.5	0.6	3.9	0.0	0.2	1.0	66	0.7	11.1	0.4	2.1	0.0	0.2	1.1	120	2.2	16.6	0.7	4.6	0.1	0.2	1.9	597

注) 各大学の数値は、平成10年度調査は6年から10年までの5年間、平成12年度調査は平成11年と12年の2年間、平成17年度調査は平成13-17年度までの5年間の数値。

表 4-6-a-1 国際交流 (1)

大学	教員短期												計
	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	
酪農大	13	16	23	22	28	21	17	11	17	15	21	18	222
北里大	2	4	4	3	4	7	6	7	10	10	8	11	76
日獣大	23	15	24	17	23	10	28	18	21	13	30	22	244
麻布大	23	7	10	11	9	1	2	20	16	18	13	16	146
日大	17	11	18	28	24	21	28	12	8	13	15	17	212
合計	78	53	79	81	88	60	81	68	72	69	87	84	900

表 4-6-a-2

大学	教員長期												計
	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	
酪農大	10	12	11	10	13	5	4	2	2	0	3	2	74
北里大	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	4
日獣大	2	2	0	2	2	1	2	5	3	2	2	1	24
麻布大	2	1	2	2	1	0	0	2	0	1	1	2	14
日大	0	2	2	1	0	0	0	0	0	0	1	2	8
合計	15	17	15	16	16	6	7	9	5	3	8	7	124

表 4-6-a-3

大学	支援者												計
	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	
酪農大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北里大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
日獣大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
麻布大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
日大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2

注) 各年度の数値は延べ人数を示す

表 4-6-b 国際交流 (2) 教員渡航者数 (1年間の平均値)

大学	平成 6-10 年		平成 11-12 年		平成 13-17 年	
	1ヶ月未満	1ヶ月以上	1ヶ月未満	1ヶ月以上	1ヶ月未満	1ヶ月以上
酪農大	20	11	19	4.5	16.4	1.8
北里大	3	2	6.5	0.5	9.2	0.2
日獣大	20	2	19	1.5	20.8	2.6
麻布大	12	2	1.5	0.5	16.6	1.2
日大	20	1	24.5	0	13	0.6

注) 数値は延べ人数を示す

表 4-7-a 教育支援者

大学	調査年度	学生定員		教員数		教育支援者数					週平均支援時間				
		総数	1学年	(現員)	事務職員	技術職員	TA	その他	計	事務職員	技術職員	TA	その他	延べ時間	
酪農大	平成10年	720	120	49	13	1	16	24	54	37.5	37.5	10	37.5	1585	
	平成13年	720	120	50	11	1	26	20	58	37.5	37.5	10	37.5	1460	
	平成17年	720	120	52	9	0	16	23	48	37.5	37.5	10	37.5	1360	
北里大	平成10年	720	120	46	12	6	10	8	36	43	40	2.6	40	1102	
	平成13年	720	120	50	12	6	10	8	36	43	40	2.6	40	1102	
	平成17年	720	120	47	22	17	9	0	48	38	38	1.8	38	1498.2	
日獣大	平成10年	480	80	51	6	0	12	31	49	37.5	37.5	10	37.5	1507.5	
	平成13年	480	80	51	6	0	12	31	49	37.5	37.5	10	37.5	1507.5	
	平成17年	480	80	53	10	12	27	3	52	37.5	37.5	10	37.5	1207.5	
麻布大	平成10年	720	120	64	7	0	14	0	21	37.5		8		374.5	
	平成13年	720	120	64	5	0	14	0	19	37.5		8		299.5	
	平成17年	720	120	55	7	2	15	0	24	37.5	37.5	13	37.5	532.5	
日大	平成10年	720	120	37	0	0	3	0	3			2.5	0	7.5	
	平成13年	720	120	41	0	0	11	0	11			8	0	88	
	平成17年	720	120	48	0	2	13	0	15	0	8	8	0	120	
合計	平成10年	3360	560	252	38	7	55	67	167	155.5	115	33.1	115	4576.5	
	平成13年	3360	560	256	34	7	73	59	173	155.5	115	38.6	115	4457	
	平成17年	3360	560	255	48	33	80	26	187	150.5	158.5	42.8	150.5	4718.2	
国立		1740	290	266	31	26	156	9	222					3965.2	
国公立		1980	330	316	31	26	166	9	232					4005.2	
重点化大学		420	70	98	18	8	116	8	150					2428.2	
重点化以外の国立		1320	220	168	13	18	40	1	72					1537	
合計		5340	890	568	69	33	221	76	399					7292.2	

注) 各大学の数値は、平成10年度の調査、平成13年度は平成14年2月28日、平成17年度は平成18年3月31日の数値。

表 4-7・b 教員および教育支援者に対する学生比率並びに学生 1 人に対する支援時間数

大学	調査年度	学生数 (名)	入学定員 (名)	教員数 (名)	支援者数 (名)	学生/(教員 + 支援者)	学生/教員	入学定員/教 員数	教員充足率	支援時間数/学生/ 1 週間	
										TA 含む	TA 含まな い
酪農大	平成 10 年	720	120	49	54	7	14.7	2.45	0.34	13.2	11.9
	平成 13 年	720	120	50	58	6.6	14.4	2.4	0.35	12.2	10.0
	平成 17 年	720	120	52	48	7.2	13.8	2.3	0.36	11.3	10.0
北里大	平成 10 年	720	120	46	36	8.8	15.7	2.61	0.32	9.2	9.0
	平成 13 年	720	120	50	36	8.4	14.4	2.4	0.35	9.2	9.0
	平成 17 年	720	120	47	48	7.6	15.3	2.6	0.32	12.5	12.4
日獣大	平成 10 年	480	80	51	49	4.8	9.4	1.57	0.53	18.8	17.3
	平成 13 年	480	80	51	49	4.8	9.4	1.57	0.53	18.8	17.3
	平成 17 年	480	80	53	52	4.6	9	1.51	0.55	15.1	11.7
麻布大	平成 10 年	720	120	64	21	8.5	11.3	1.88	0.44	3.1	2.2
	平成 13 年	720	120	64	19	8.7	11.3	1.88	0.44	2.5	1.6
	平成 17 年	720	120	55	7	11.6	13.1	2.2	0.38	4.4	2.8
日大	平成 10 年	720	120	39	3	17.1	18.4	3.08	0.29	0.1	0.0
	平成 13 年	720	120	41	11	13.9	17.6	2.93	0.29	0.7	0.0
	平成 17 年	720	120	48	27	9.6	15	2.5	0.33	1.0	0.1

注 1) 教員充足率：学生定員 60 名以上の場合は 0.83 (60/72) を (学生数/教員数) の値で除した数字

注 2) 各大学の数値は、平成 10 年度の調査、平成 13 年度は平成 14 年 2 月 28 日、平成 17 年度は平成 18 年 3 月 31 日の数値。

5. 学生

1) 受験者数、入学定員数など（表5-1）

各大学ともほぼ 3,000 名前後の受験者数で推移しており、依然として多くの受験生を集めている。前回の調査（平成6年度～12年度）と較べても、多少の増減はあるものの、ほぼ同等の数となっており、各大学の平均受験生数の合計は平成11年度の 14,869、平成12年度の 14,934 名に対し、平成13年度～17年度の5年間では 16,117 名とわずかではあるが増加している。5年間の平均受験者は日本獣医生命科学大学が最多（3,454 名）で、北里大学が最少（3,065 名）であった。しかしながら、各大学とも女性受験者が漸減する傾向にあり、また、いずれの大学も平成17年度には受験者が減少した。今後の傾向を示唆しているかもしれない。

入学者数についてはほぼ定員の 1.25 倍以内に入っているが、北里大学の平成13年度、日本獣医生命科学大学の平成13、14年度、日本大学の平成14年度はこれを超えている。しかし、各大学とも、超過率を下げる努力が行われていることが窺われ、特に酪農学園大学、日本大学での改善が著しい。今後さらにすべての大学で 1.2 倍以内になるよう、努力が望まれる。

留年率は前回に引き続き麻布大学が高く、これに酪農学園大学が続くが、両校とも平成17年度には改善されている。その他の大学も平成17年度では日本大学を除き 2 % 以下となっている。日本大学では平成17年度の率は高いが、平均して 2 % 前後で推移しており、特段の問題はないように思われる。2 % 台の維持が一つの目安となるかもしれない。

推薦入学者の割合は、前回調査と変わらず日本大学が高いが、いずれの大学も比率は漸減している。現時点でこの理由に関する分析は難しいが、各大学とも学力重視の方向に向かっているのかもしれない。編入学については、日本獣医生命科学大学では前回と同様実施されていないが、北里大学では平成17年度に1名の編入学があった。社会人入学は酪農学園大学および日本獣医生命科学大学でコンスタントに実施されている。このことは、社会人入学制度が大きな問題なく推移していることを示唆している。

獣医師国家試験の合格率については、各大学とも年度により若干の高低が見られるが、概して合格率が低かった年の翌年は改善されている。今後もこのようなパターンで推移していくものと思われる。北里大学では調査期間の5年間とも卒業生全員が国家試験を受験した。

就職率は、前回の調査と同様、卒業生数を母数とした率を示したが、前回と同様、北里大学が最も高い率を示した。これに対して、日本獣医生命科学大学の平成17年度、日本大学の平成14、15年度では 50 % 台となっている。この原因の一部として、当該年度での進学率が高かったことが挙げられるが、20～30 % の学生の進路が不明あるいは未決定であることは問題であろう。これが卒業生の意志によるものか、受け入れ先の不足によるものか、について分

析する必要がある。就職指導における課題は依然として多いと言える。

進学率は各大学とも年度によってばらつきが見られる。概して、就職率が悪い年度で進学率が高いが、これがいかなる理由によるものかは現時点では不明である。

2) 留学生の受け入れと日本人学生の外国留学の状況 (表 5-2)

外国人留学生の受け入れ人数および日本人学生の海外留学の調査では、麻布大学を除いて各大学とも前回の調査に引き続いて受け入れ、留学ともにほとんど行われていない。麻布大学では、日本人留学生の数が増加している傾向にある。外国人受け入れについては、大学院ともども国際化の中でよりいっそうの取り組みが求められる。

3) 学生生活への支援体制の状況 (表 5-3)

年次のデータは酪農学園大学のみで示されているが、これを見る限り、日本学生支援機構からの奨学金受領学生数は減少していない。しかしながら、全学生数に対する当該奨学金受領率は必ずしも高くはない。平成18年度には全ての大学で大学・学部独自の奨学金が設けられている。今後は、この奨学金の受給率を上げるとともに、公共団体・法人、あるいは企業等への働きかけを強める必要がある。また、各都道府県獣医師修学資金受給をとまなう地域獣医療後継者選抜枠等の導入も考慮に値するかもしれない。

4) 授業料減免の状況 (表 5-4)

日本人学生に対する授業料減免状況に関する前回の調査では、わずかに酪農学園大学のみが授業料減免を実施していたが、今回の調査では日本獣医生命科学大学、日本大学にも減免制度が設置されている点は大きな進歩と言えよう。無と回答した北里大学においても学園奨学金制度があると付記されている。ただ、麻布大学では平成16年度に4名の減免者が出て以来、平成17、18年度には該当者がいない。理由は不明であるが、出来うれば復活を考慮してほしい。一方、外国人私費留学生に対する減免は酪農学園大学を除いて相変わらず実現していない状況にある。いっそうの取り組みが望まれる。

5) 進路相談の状況、特に制度による対応 (表 5-5)

各大学とも、前回の調査に引き続き、相談課の設置、教員の協力、就職ガイダンス等に力を入れている。酪農学園大学では学生サービスセンターが設置されており、この中に就職部、医務室、学生相談室があり、就職部には学生用パソコンや求人ファイルが配置されている。企業、官庁などからの説明会開催も増加しており、また、就職を目的とした学外体験実習（獣医師が活躍している場所での見学実習：北里大学、官公庁・企業でのインターンシップ：日本大学）

なども多くの大学で導入されていることは評価できる。

6) 厚生指導の状況、特に制度による対応(表5-6)

全体的に、前回の調査に較べてさらに改善がなされていると判断される。前回未設置であった麻布大学の学生相談室も設置されている。また、医務室(保健室)とそれに伴う専門医の派遣、カウンセリング対応も全ての大学で行われるようになった。さらに、多くの大学で調査項目以外についても配慮がなされており、評価できる。今後はこれらの実効状況についての評価が必要となろう。

表 5.1 受験者数・入学定員など

大学	年度 (平成)	受験者 (名)	入学者 (名)	留年率	推薦 入学率	編入 入学率	社会人 入学率	退学者 率	卒業者 (名)	国試合格率	就職率	進学率
酪農大	13	3,258	141	2.6	16.3	4.8	1.0	1.5	146	95.9	77.4	4.1
	14	3,453	135	3.5	14.1	5.1	1.3	0.7	132	87.7	70.5	11.4
	15	3,221	140	2.1	13.3	4.9	1.3	1.3	151	96.0	83.4	5.3
	16	3,507	140	2.2	12.1	4.4	1.3	0.3	138	84.8	64.5	5.8
	17	3,146	128	1.3	10.8	4.1	1.4	0.5	137	92.5	72.3	2.2
北里大	13	2,974	153	1.2	23.4	0	0	1.0	132	96.2	86.4	2.3
	14	2,874	147	2.0	21.1	0	0	0.9	140	91.4	89.3	2.9
	15	3,058	148	1.3	18.9	0	0	0.3	131	97.7	90.0	2.3
	16	3,324	146	1.0	16.4	0	0	0.7	140	94.2	88.6	2.1
	17	3,097	145	0.8	14.1	0.1	0	0.5	149	89.2	80.5	2.0
日獣大	13	3,714	104	1.0	28.0	0	0.6	0.3	106	86.5	79.2	2.8
	14	3,675	104	2.7	26.9	0	0.6	0.2	96	96.1	80.2	3.1
	15	3,511	95	1.9	25.7	0	0.3	0.3	100	90.5	73.0	2.0
	16	3,236	96	1.1	25.6	0	0.5	0.5	114	92.9	68.4	6.1
	17	3,136	97	1.9	24.9	0	0.3	1.0	92	86.5	59.8	8.7
麻布大	13	2,993	146	2.5	29.0	6.0	0	0.4	157	92.9	85.4	3.8
	14	3,177	147	3.4	31.2	5.7	0	1.3	154	82.9	76.0	4.5
	15	3,162	143	2.8	31.8	5.9	0	1.2	148	91.1	70.3	2.7
	16	3,307	145	3.0	31.1	6.4	0	1.0	153	88.7	83.0	2.0
	17	2,943	154	1.9	29.2	5.8	0	1.0	143	94.4	81.1	2.8
日大	13	2,890	149	2.0	41.3	5.5	0	0.7	132	92.4	71.2	9.8
	14	3,192	153	1.5	40.8	5.1	0	0.4	152	80.4	57.9	6.6
	15	3,169	134	2.1	42.2	4.1	0	0.6	145	89.4	57.2	6.9
	16	3,442	139	2.2	39.3	3.2	0	0.7	154	91.3	61.0	3.2
	17	3,135	140	2.9	39.3	2.4	0	0.7	164	94.4	73.2	5.5

表 5.2 留学生の受け入れと日本人学生の外国留学の状況

大学	年度 (平成)	外国人受け入れ (名)	日本人留学 (名)
酪農大	13	0	-
	14	1	-
	15	1	-
	16	1	-
	17	0	-
北里大	13	0	0
	14	0	0
	15	0	0
	16	0	0
	17	0	0
日獣大	13	0	0
	14	0	0
	15	0	0
	16	0	0
	17	0	0
麻布大	13	5	10
	14	5	4
	15	1	11
	16	0	18
	17	0	20
日大	13	0	0
	14	0	0
	15	0	0
	16	0	0
	17	0	0

表5—3 学生生活への支援体制の状況

大学	年度 (平成)	日本学生支援機構 (名)	大学・学部独自の奨学金 (名)	公共団体・法人の奨学金 (名)	企業等の奨学金 (名)	その他 (名)
	13	239	0	17	0	9*
	14	269	0	16	0	6*
酪農大	15	292	0	10	0	4*
	16	305	1	10	0	2*
	17	295	2	8	0	2*
	18	365	2	8	0	1*
北里大	18	298	6	9	0	1*
日獣大	18	118	6	2	0	1*
麻布大	18	915	1	17	0	4*
日大	18	400	3	6	5	3*

*: 各都道府県獣医師修学資金等

表5—4 授業料減免の状況

大学	年度 (平成)	制度の有無	日本人学生(名)	減免額	外国人私費留学生(名)	減免額
酪農大	13	有	4	2,940,000	0	0
	14	有	5	3,725,000	1	745,000
	15	有	4	2,265,000	2	1,510,000
	16	有	3	2,265,000	3	2,265,000
	17	有	4	3,020,000	3	2,265,000
	18	有	5	3,775,000	3	2,265,000
北里大	17	無*	0	0	0	0
日獣大	18	有	10	授業料、実習費、教育充実費、 および施設拡充費の 1/2 (学期単位で算出する)	0	0
麻布大	16	有	4	後期授業料免除	0	0
	17	無	0	0	0	0
	18	無	0	0	0	0
日大	17	有	4**	スポーツ功労者は施設費のみ	0	0
	18	有	6***	新潟震災者は入学金のみ	0	0

*: 学園奨学金有り

**：内スポーツ成績功労者2名

***：内スポーツ成績功労者3名、新潟震災被災者1名

表5—5 進路相談の状況、特に制度による対応

大学	年度 (平成)	相談課の有無	教員の協力	就職ガイダンス	求人先からの説明会 (企業、官庁など)	学外実習*
酪農大	13～17	有	有	有	有	無
北里大	13～17	有	有	有	有	有
日獣大	13～17	有	有	有	有	有
麻布大	13～17	有	有	有	無	無
日大	13～17	有	有	有	有	有

*: 就職を目的とする

表5—6 厚生指導の状況、特に制度による対応

大学	年度 (平成)	学生部・課	教員の協力	学生相談室	医務室 (保健室)	専門医	カウンセリング
酪農大	13～17	有	有	有	有	有 (週1回)	有 (2名) その他*
北里大	13～17	有	有	有	有	有	有 その他***
日獣大	13～17	有	有	有	有	有 (隔週)	有 その他**
麻布大	13～17	有	有	有	有	有	有 その他***
日大	13～17	有	有	有	有	有	有 その他****

*: 学費説明会、父母懇談会、礼拝など

***: 専任の看護師による健康生活指導 (毎日)

****: セクシャルハラスメント人権委員会

*****: 一定のカリキュラムを履修した教職員にインテナーカーの資格

6. 教育課程

1) 開講科目数と総単位（時間）数（表 6-1）

酪農学園大学を除いて各大学とも、前回の調査時に較べて専門必須科目の開講科目数が飛躍的に増加した。これは前回指摘された、獣医学教育の国際標準到達に向けての対応がなされたものと考えられる。これに対して、教養必須ならびに選択科目については多少の変動があるものの大幅な変更はない。注目すべきは専門選択科目で、日本獣医生命科学大学では前回の2倍に、麻布大学では0となっている。今後、両大学での教育効果についての比較が興味深い検討事項となろう。開講総時間数は北里大学で突出して多いが、単位数は各大学とも大きな差は認められない。

2) 専門科目別授業時間数（表 6-2）

実証分野では、日本獣医生命科学大学と日本大学で開講科目数が大幅に増加し、一方、酪農学園大学では減少している。しかし、北里大学と麻布大学ではさらに少なく、実証分野が重視されていく中で、検討の余地があるかもしれない。応用分野では、北里大学、日本獣医生命科学大学、日本大学で開講科目数が増加している一方、酪農学園大学、麻布大学では減少している。基盤分野については、全体的にやや増加しているが、ここでも酪農学園大学は科目数がかなり減少している。全体として、酪農学園大学では前回調査時の約半分、麻布大学では約 25% 減となっており、日本獣医生命科学大学と日本大学では約 2 倍、北里大学では約 45% の増加となっている。しかし、授業時間数は日本獣医生命科学大学と日本大学でやや多いほかはほぼ大差がなく、単位認定のための授業時間数の差によるものと思われる。

3) 実習時間数（表 6-3）

実習時間数については、前回の調査と比較して、各大学とも大幅な変更はないが、実証分野では酪農学園大学、麻布大学でやや減少し、その他の大学ではやや増加している。応用分野では北里大学を除き、やや減少傾向にある。基盤分野についてはほとんど変更がない。全体として、酪農学園大学、麻布大学における実習時間の減少が目立つ。これについては検証が必要かもしれない。

4) 実習用動物の使用頭数

平成 13 年度から 17 年度の間各大学とも実習用動物数は必ずしも減少していない。これは、前回の調査とは大きく異なる点である。麻布大学では比較的コンスタントに動物が使われているが、他大学では変動が大きく、特に日本獣医生命科学大学では平成 15 年度以降それま

で比べて大きく減少した。これは、主にラット数の減少によるもので、実習内容の変更が窺われる。他大学においても頭数の変動はマウス、ラットなどの小動物によるものが多く、イヌ、ネコの変動幅は小さい。酪農学園大学では16年度にコイが大量に使用されている。北里大学では平成14年度以降、ウシ、ウマの数が減少しているが、逆にニワトリの使用羽数が増加している。麻布大学では各年度で全体の使用頭数が安定している。平成17年度では各大学とも学生1人あたりの使用頭数は一桁台となっており、動物を使った実習内容が安定してきていることを示唆するものかもしれない。

5) 実習用動物の代替応用の有無 (表6-5)

前回の調査では日本獣医生命科学大学と麻布大学で取り組みがなされていなかったが、今回の調査ではすべての大学が実習用動物の代替応用に取り組んでいた。屠場や精肉業者からの臓器購入、ビデオ・コンピュータによる代替が多く見られた。今後、これらに加えて、酪農学園大学や麻布大学で行われているプラスチック標本や人工モデル動物を用いた実習が増えていくものと思われる。

6) 実験動物・実習倫理委員会設置の有無 (表6-6)

いずれの大学においても委員会が設置され、適正な動物実験が展開されているものと判断できる。

7) 学生による授業評価システム導入の有無 (表6-7)

アンケートによる授業評価はすべての大学で実施されているが、学生への公表は北里大学、日本大学では実施されていない。評価結果の授業改善への反映は個々の教員に委ねられていることが多いが、さらに効果的な授業改善のための方法の策定が必要であろう。公表はその一部として検討すべき課題であると考えられる。また、麻布大学で行われているような、「各教員が授業改善に関する考えをまとめ、次年度の最初の講義時間に受講生に伝えるとともに、学部長あて文書で提出する」方法も一考に値する。

8) 卒業論文(課題研究)の発表方法 (表6-8)

いずれの大学も前回調査からの変更はないが、麻布大学では今回の調査では論文閲覧・展示を行っていない。日本獣医生命科学大学、麻布大学では卒業論文の全体発表会を行っていないが、指導教員以外の教員による客観的評価を得るためには検討すべき課題であろう。なお、卒業論文はすべての大学で実施されている。

9) 授業科目の年次配当と授業計画（シラバス）の内容と更新の状況（表6-9）

年次配当については、日本獣医生命科学大学および日本大学で平成16年度より新しいカリキュラムが実施され、これに伴って大幅な授業科目の年次配当の変更がなされている。シラバスはすべての大学で毎年担当教員による更新が行われている。

10) 授業方法の改善の状況（表6-10）

今回の調査期間中、酪農学園大学、北里大学、日本獣医生命科学大学では授業環境の整備が行われている。また、授業方法の改善はすべての大学で行われており、いずれの大学でも視聴覚教育の整備につとめている。また、酪農学園大学では講義内容のホームページへの事前掲載など、麻布大学では学生による授業評価に基づく担当者の学生へのフィードバックなどが試みられている。今後、各大学での学生による授業評価の学生へのフィードバック、ファカルティディベロップメント（FD）の具体的方法の検討など、ソフト面をよりいっそう推進する必要があるだろう。

11) 単位互換制度の有無（表6-11）

日本獣医生命科学大学では前回の調査では行われていなかった国外の大学との単位互換が実施されている。ただし、日本獣医生命科学大学を含め、国外の大学との単位互換がある、と回答した大学では、当該大学の学生が海外に研修に出かけ、それに対して単位を認定するという一方通行の感がないでもない。文字通り互換が行われているか、検証する必要がある。その他は大きな変化はないが、前回の調査で酪農学園大学、麻布大学で行われていた放送大学との互換は今回の調査では記載されていない。

12) 他大学および他施設との教育協力体制の有無（表6-12）

前回の調査と比較して、酪農学園大学では他大学、他施設、日本獣医生命科学大学では他大学、麻布大学では他大学との協力体制が新たにとられている。今後、産・官・学の協力体制がよりいっそう求められることとなろう。

13) 卒後教育および生涯教育制度の有無（表6-13）

付属病院における研修医制度は麻布大学を除くすべての大学で実施されており、麻布大学も近々導入の予定である。学部・大学院研究生および科目等履修生については麻布大学で一部回答がないが、すべての大学で実施されているものと思われる。また、学会・研究会・講習会もほとんどの大学で実施されている。実施の効果については、特に研修医に関して具体的な数字を調査し、検証することが必要である。

14) 社会的ネットワークの状況 (表 6-1 4)

平成 1 2 年度の調査結果に引き続き、産学交流、地域交流、国際交流ともすべての大学が実施している。今後は具体的内容についての調査と評価を行う必要がある。

表6—1 開講科目数と総単位(時間)数

大学	教養科目				専門科目				総計		
	開講科目数		単位数(時間数)		開講科目数		単位数(時間数)		開講科目数	単位数	総時間数
	必須	選択	必須	選択	必須	選択	必須	選択			
酪農大	10	30	14	55 (300)	75	44	122	66 (2,970)	159	257	5,475
北里大	8	52	18	106 (405)	82	38	129	43 (3,885)	180	296	6,922
日獣大	3	45	5	49 (75)	95	53	120	88 (2,875)	196	262	5,305
麻布大	3	40	5	78	72	0	142	0 (2,505)	115	225	?
日大	6	66	12	125 (180)	72	20	129	54 (2,805)	164	320	6,165

表 6—2 専門科目別授業時間数

大学	実証分野		応用分野		基礎分野		総計	
	開講科目	単位数 (時間数)	開講科目	単位数 (時間数)	開講科目	単位数 (時間数)	開講科目	単位数 (時間数)
酪農大	27	44 (960)	7	9 (225)	22	37 (975)	56	90 (2,160)
北里大	10	27 (735)	20	46 (630)	27	37 (990)	57	109 (2,355)
日獣大	47	83 (1,785)	23	29.5 (577.5)	44	62.5 (1,367.5)	114	175 (3,730)
麻布大	21	45 (1,005)	8	14 (240)	32	56 (1,260)	61	115 (2,505)
日大	32	76 (1,890)	27	51 (975)	33	56 (1,140)	92	183 (4,005)

表 6—3 実習時間数

大学	実証分野			応用分野			基盤分野			総計		
	科目	単位	臨床 学外 (時間数)	科目	単位	臨床 学外 (時間数)	科目	単位	臨床 学外 (時間数)	科目	単位	臨床 学外 (時間数)
酪農大	11	16	8	3	3	3	10	14	14	24	33	8
		(540)			(135)			(630)			(1,305)	
北里大	8	15	8	6	6	6	7	13	13	21	34	14
		(675)			(270)			(585)			(1,530)	
日獣大	9	18	7	4	4.5	3	1	7	14.5	20	37	10
		(810)			(202.5)			(647.5)			(1,660)	
麻布大	8	11	6	1	1	1	9	13	13	18	25	6
		(495)			(45)			(585)			(1,125)	
日大	12	42	10	4	4	3	11	11	11	27	57	13
		(1,500)			(180)			(495)			(2,175)	

表6—4 実習用動物

年度(平成)	酪農大		北里大		日獣大		麻布大		日大	
	総頭数	総頭数/学生*	総頭数	総頭数/学生*	総頭数	総頭数/学生*	総頭数	総頭数/学生*	総頭数	総頭数/学生*
13	2,059	2.5	5,383	6.5	16,592	27.4	2,107	2.3	-	-
14	4,515	5.4	12,300	14.7	23,550	38.9	2,098	2.3	1,783	2.0
15	2,452	2.9	8,502	10.2	1,430	2.4	2,076	2.3	1,222	1.4
16	4,008	4.8	7,666	9.2	2,493	4.1	2,105	2.3	-	-
17	2,691	3.2	7,971	9.5	4,411	7.3	2,164	2.4	3,390	3.8

*:平成17年度学生数

表6—5 実習用動物の代替応用の有無

年度(平成)	酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
13~17	有	有	有	有	有
	プラスチック 培養細胞 層場材料 ビデオ・コンピュータ	培養細胞 層場材料 ビデオ・コンピュータ	精肉業者などからの 臓器購入	屠場材料 プラスチックラット	マネキンラット ビデオ

表6—6 実験動物・実習倫理委員会設置の有無

年度(平成)	酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
13~17	有	有	有	有	有
	動物実験委員会	実験動物施設運営・ 倫理委員会	生命倫理委員会	動物実験委員会	動物実験委員会

表6-7 学生による授業評価システム導入の有無

年度(平成)	方法	酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
13~17	アンケート	有	有	有	有	有
	自由記載	有	有	有	有	有
	公表	有	無	有	有	無

表6-8 卒業論文(課題研究)の発表方法

年度(平成)	方法	酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
13~17	全体発表会	有	有	無	無	有
	論文閲覧・展示	有(論文要旨)	有(論文要旨)	有	無	有(論文要旨)

表6-9 授業科目の年次配当と授業計画(シラバス)の内容更新の状況

年度(平成)	項目	状況	酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
13~17	年次配当	更新	無	無	有	無	有
	シラバス	更新	有	有	有	有	有

表6-10 授業方法の改善の状況

年度(平成)	改善項目	酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
13~17	改善項目	有	有	有	有	有
	環境整備	有	有	有	有	有
	授業方法	有	有	有	有	有

表6—1—1 単位互換制度の有無

年度(平成)	相手機関	酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
13～17	国内 他大学	有	有	有	有	有
	放送大学	有				
	国外 大学	有	有	有		有

表6—1—2 他大学および他施設との教育協力体制の有無

年度(平成)	相手機関	酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
13～17	国内 他大学	有	有	有	有	有
	他施設	有	有	有		
	国外 大学	有	有	有		有

表6—1—3 卒業教育および生涯教育制度の有無

年度(平成)	制度の内容	酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
13～17	付属病院研修医	有	有	有	無*	有
	学部・院研究生	有	有	有		有
	科目等履修生	有	有	有	有	有
	学会・研究会・講習会	有	有	有		有

*: 研修獣医師制度の導入予定

7. 施設・設備

1) 各大学が共通に設置している設備・施設－1（表 7-1）

講義室、実験・実習室、演習室、更衣室、学生控え室および教員研究室の面積は、学部共通と学科専用の記載があり、各大学の事情により異なる。これらの面積は、各大学での学部あるいは学科専用の定義が異なるので単純比較は難しい。前回の調査と比較すると、麻布大学では面積が増大した。

実験施設・設備は、各大学の教育・研究の目的や手法との関連で作られているので面積の大きさを比較することは適当ではない。しかしながら研究・教育環境整備に対する各大学の姿勢をアピールする重要なポイントになると思われるので、今後とも設備の充実が望まれる。

前回調査でも指摘された各大学の施設・設備について、今回調査でも定義が不明瞭なため統一した評価をすることは困難であった。今後は教員数と学生数に対する面積比など算出基準の工夫が必要であろう。

2) 各大学が共通に設置している施設・設備－2（表 7-2）

獣医学教育、特に臨床教育が日本では欧米と比較して脆弱であるとの指摘がある。これには、獣医教育病院の施設、人員配置が欧米とは比較にならないくらい貧弱であることに起因している。今回も前回同様、獣医教育病院と獣医臨床センターを同一施設として見なして評価した。大学基準協会が示す病院の面積は、学生定員 60 名に対して 5,000m²となっている。前回調査では、麻布大学のみがこの基準を満たしていたが、日本大学もこの基準をクリアすることが出来た。ただ、酪農学園大学、北里大学および日本獣医生命科学大学も動物病院の新築・改築を実施し、面積的には基準を下回っているが、大幅な前進が認められる。しかしながら、今後のポリクリ教育充実のためには、更なる施設の充実が必要である。

臨床実習室は、前回設置されていなかった日本大学にも設置された。しかしながら面積的には、北里大学、日本獣医生命科学大学、日本大学では増加したが、酪農学園大学では減少していた。

臨床講義室は 3 大学で設置されているが、前回報告のあった日本獣医生命科学大学では報告が無く、酪農学園大学に新たに設置された。北里大学では、今回調査でも設置がされていなかった。今回の調査でも臨床実習室や臨床講義室の充実は、各大学とも実施されておらず今後の課題である。

病院の専任教員および研究室の定義が不明瞭なためか各大学の報告が一樣ではなかった。病院専任教員数は、酪農学園大学で 16 名、日本大学で 42 名となっているが、これは獣医学科教員との兼任と思われる。北里大学、日本獣医生命科学大学、麻布大学では、1～2 名の病院専任

教員数の報告があるが、これは前回報告数と同数であり増員は認められなかった。施設の拡充は進んではいるが、人員については各大学ともより一層の努力が必要である。研究室は、酪農学園大学、日本大学が前回報告から増加したが、他の大学では前回と同様であった。

病院の年間延べ利用学生数は、酪農学園大学および日本大学が 10,000 名を越えているが、他の大学は記載がなく、5,000 名未満の報告となっている。これは、各大学のポリクリ教育での利用人数の計上方法に違いがあることに起因していると予想されるので、今後の工夫が必要である。

病院の年間延べ診療頭数は、麻布大学からの報告が無いが、犬猫の診療頭数は、酪農学園大学、日本獣医生命科学大学、日本大学で 10,000 頭を越えており、前回より明らかな増加が認められた。しかしながら産業動物の診療頭数は、酪農学園大学の約 6,600 頭、北里大学の約 1,000 頭を除けば、確保されておらず産業動物の臨床教育充実をどの様に図るかが重要な課題である。

各大学動物病院の主な機器として近年の画像診断学発展に伴い CT、MRI 装置が整備されている。また超音波診断装置、放射線照射装置、デジタル画像処理装置など各大学での充実が進んでいる。今後は、動物医療における核医学の利用が可能となる環境が整いつつあるので、この方面の充実が期待される場所である。しかしながら動物病院を活用した教育研究を推進するには、施設・設備の充実は当然であるが、臨床教員の人員増大を早急に図らなければ今後の臨床教育発展は相当厳しいと思われる。

3) 各大学が選択して設置した設備・施設 (表 7-3)

今回の調査で酪農学園大学、北里大学、日本獣医生命科学大学、日本大学の 4 大学で報告された。ハイテクリサーチセンター、学術フロンティア、動物医科学センターを実施している。

各大学では、今後とも更なる努力を継続する必要があると思われる。

4) 学生の自習を補助する施設・設備 (表 7-4)

図書館は学部・学科の定員数が異なり、一概に比較するのは困難であるが、さらに学生が利用し易い環境に改善 (開館時間、席数など) する必要があるだろう。

コンピュータ室は、4 つの大学で報告され前回より充実が図られている。酪農学園大学では学生が利用できるコンピュータ室の設置が望まれる。

端末室は、北里大学と日本大学で報告された。各大学共に図書館とは別に学生が自由に使用可能な端末室の設置、充実が望まれる。

5) 地域社会とのかかわり (表 7-5)

各大学とも大学の特徴を生かしたセミナーや公開講座、市民講座などが行われており、地域

社会とのかかわりは比較的積極的であると評価できる。今後は開かれた大学としてのセミナーや公開講座の開催はもちろんのこと、獣医師法に定める卒後教育としての動物病院活用を更に進めることが求められる。

表7-1 各大学が共通に設置している施設・設備-1(m²)

区 分		酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
講義室	学部共通	2,595.39	578.20		2,498.66	9,743.22
	学科専用		1,194.75	1,823.80	188.07	104.92
実験・実習室	学部共通		173.60		3,244.85	400.00
	学科専用	3,547.96	2,191.75	3,031.36	1,614.06	2,065.33
演習室	学部共通			194.40	883.78	226.70
	学科専用	2,242.66			284.51	
更衣室	学部共通		45.40	52.92	282.73	
	学科専用	285.74				200.48
学生控え室	学部共通			150.79	256.07	
	学科専用	251.31				
教員研究室	学部共通		3,894.52		407.04	11,128.28
	学科専用	1,875.18		5,104.98	5,495.04	1,647.91
学生ホール	学部共通	2,315.46	1,382.19	0.00	1,276.08	481.01
	学科専用					
学生会館(部室)	学部共通	3,385.94	1,057.50	1,106.48	927.30	1,405.65
	学科専用					
病理解剖棟	学科専用	486.04	286.59			
健体解剖棟	学科専用	243.34	253.35			
R I 実験棟	学部共通	414.53	340.20			536.04
実験実習家畜棟	学部共通		1,081.20			519.93
	学科専用	1,418.84				
第1感染動物実験棟	学部共通		330.00			
第2感染動物実験棟	学科専用		120.00			230.33
豚舎	学部共通		397.00		597.34	789.48
犬または猫舎	学部共通		157.44		280.50	
	学科専用	352.00				541.65
芝山羊舎	学部共通		81.50			
中小動物繁養施設(鳥類、げっ歯類などを含む)	学部共通		252.00			
	学科専用	121.50				
牛舎	学部共通					440.81
第一動物センター	学部共通					1,509.49

表7-2 各大学が共通に設置している施設・設備-2 (面積はm²)
 獣医教育病院 (家畜病院を含む) について

区 分	酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
総面積 (m ²)	3,615.57	2,614.73	1,987.93	5,772.27	7,348.00
診療施設 (m ²)	3,410.47	906.65	1,294.30	2,259.39	3,610.00
臨床実習室 (m ²)	99.94	590.55	340.94	334.79	1,082.00
臨床講義室 (m ²)	150.45			336.89	103.00
研究室 (m ²)	379.20	120.00	49.00		2,553.00
専任教員 (名)	16	2	1	2	42
年間延利用学生 (名)	14,200	4,500	1,480		18,580
年間延診療 (利用)					
頭数					
イヌ	11,522	6,020	10,964		10,628
ネコ	1,260	1,339	2,467		1,333
ウシ	6,633	967	0		0
ウマ	87	37	0		0
その他	1,441	79	89	126	6
主な機器	CT MRI 超音波診断装置 放射線照射装置 X線デジタルテレビ撮影装置 外科用X線テレビ装置 デジタル内視鏡	CT 超音波診断装置 総合デジタル画像診断新システム	CT MRI 超音波診断装置 放射線照射装置	CT MRI 放射線照射装置 Hevatron67 血液細胞機能解析システム	CT MRI 超音波診断装置 デジタル内視鏡 Computed Radiology (CR)

表7-3 各大学が選択して設置した施設・設備

酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
ハイテクリサーチ センター	ハイテクリサーチ センター	ハイテクリサーチ センター		動物医科学 センター
整備状況 使用実績	整備状況 使用実績	整備状況 使用実績		整備状況 使用実績
環境汚染物質 分析解析装置 200 時間	哺乳動物遺伝子 解析システム 200 時間	細胞微細 構造機能 形態解析 213 時間		平成17年2 月 使用実績は 正確に把握 していな
感染症診断シ ステム 300 時間	微量生理活性物 質の精製及び解 析システム 300 時間	栄養成分 分析シス テム 680時間		
炭化装置 300 時間	飛行時間型質量 分析装置 200 時間			
動物焼却炉 300 時間	哺乳動物発生工 学研究システム 400 時間	学術フ ロン ティア		
病原体検出・ 分離システム 200 時間	クリーンルーム ユニット 500 時間	整備状 況 使用実 績		
病原体遺伝子 解析システム 500 時間	遺伝子組換え動 物施設ユニット 常時	細胞成分分 離・解析シ ステム 604 時間		
	ユニット式低温 庫 常時	プロトン移 動反応質量 分析装置 240時間		
学術フロンティア		その他		
整備状況 使用実績		整備状 況 使用実 績		
家畜ハイテク 診断・治療セ ンター 100 時間		磁気共鳴 装置 2160時間		
全身コン ピューター断 層 600 時間		ゲノムプロテ オーム解析シ ステム 1160 時 間		
その他		小動物腫瘍組織 放射線感受性研 究装置 1000 時 間		
整備状況 使用実績		高感度遺伝子・ 蛋白質機能解析 システム 745時間		
磁気共鳴装置 600 時間		単細胞内シグナ ル伝達物質解析 システム 100時間		
動物用腫瘍治 療システム 100 時間				
パソナル共焦点レ ーザースキャン顕微鏡シ ステム 100 時間				

表7-4 学生の自習を補助する施設・設備（面積はm²）

		酪農大	北里大	日獣大	麻布大	日大
図書館	面積 (m ²)	5,180.35	1,370.91	709.92	1,846.96	6,530.00
	席数	496	95	120		808
	使用実績	入館者数 201,021名	常時座席の6 ~8割利用さ せている			
コンピ ュータ室	面積 (m ²)		165.00	392.01	755.50	770.00
	席数		100	150		
	使用実績		授業時間外に 許可制で利用 されている			
端末室	面積 (m ²)		65.00			
	席数		15			
	使用実績		日・祝日を除 き開放してお り、常に高い 頻度で使用さ れている			学生ホール 等に設置さ れており、 コンピユー タ室との区 別はできな い

注) 全て学部共通の施設である。

表7-5 地域社会とのかかわり

酪農大	<p>1 エクステンションセンターが生涯学習事業を所管している。同センターは、地域市民を対象にした講座では、江別市民教養講座、北広島市民公開講座、環境公開講座、酪農学園グリーンセミナー、土づくり講座、一方、広域の専門職業人を対象にしたものでは、酪農公開講座、理科実験講座、大動物臨床教育セミナー等を企画開催し、教育研究の地域への貢献を行っている。また、地域の市民を対象にした「犬のしつけ教室」も長年にわたって実施している。</p> <p>2 2005年2月、北海道浜中町と地域総合交流協定を締結した。これは大学が地域の産業、経済、教育、文化の振興に貢献し、また地域は教育研究フィールドを大学に提供することで多面的な交流を行っていくことを趣旨としており連携が深まっている。</p> <p>3 地元江別市や酪農振興協議会とは2005年度から本学キャンパスを会場に江別市ホルスタインショウ（乳牛共進会）を共催で開催しており、これは一般市民にも開放されている。</p>
北里大	<p>1 北里大学獣医畜産学部公開講座 一般市民等を対象に10回の講義を開催。獣医学科教員と他学科教員および外部講師を招聘し開講している。</p> <p>2 夏休み短期体験学習等 地域の小学5・6年生および中学1・2年生を対象に2日間の講義・実習・施設見学等の体験学習を受け入れており、獣医学科教員と他学科教員で担当している。 その他、地域の小中高生の体験学習等を随時受け入れている。</p> <p>3 人獣共通感染症学公開講座 地域の養鶏企業、県家畜保健衛生所、企業などに対し、年3～4回公開講座を開催している。講師は外部からも招聘している。</p> <p>4 教員は、県・市等から多方面にわたり各種委員委嘱を受けており、地域に貢献している。</p>
日獣大	<p>1 本学では、大学独自で開催されている総合文化講座がある。この講座は、当初学生を対象として教養課程を拡充する目的で開設したが、途中から大学と市民との文化交流を視野に入れて公開講座として、変更している。開催時期は、前期4回と後期4回にそれぞれテーマを設定して、開設している。近年は、市民参加者も増加している。</p> <p>2 武蔵野市寄付講座は、武蔵野市民を対象としているので、大学内で行われている講義と比べてグローバルな視点の講義が選ばれている。平成15年度、平成16年度は動物科学科の授業科目の「人間動物関係論」、平成17年度、平成18年度は食品科学科の授業科目の「食品科学概論」が寄付講座となっている。</p> <p>3 武蔵野五大学共同教養講座は、武蔵野市民を対象として、武蔵野地域5大学（成蹊、亜細亜、武蔵野、東京女子、本学）で大学毎のテーマに基づき市民講座を各大学4回担当し、合計20回開催している。</p> <p>4 武蔵野5大学共同講演会は、武蔵野地域5大学の共通テーマに基づき、各大学1回担当し、合計5回開催している。</p> <p>5 武蔵野地域自由大学は、学部の正規科目を履修できる講座とし、平成15年度より開講している。対象者は武蔵野市民のみならず、近隣の市、区まで広がり、受講講座数により、武蔵野地域自由大学独自の称号記（学位）授与できる。</p>
麻布大	<p>1 市民大学（相模原市・座間市民対象） 「飲・食からみた人と動物の関係」 7月26日～9月2日（全8回） 「検査と画像・生理的検査」 8月2日～9月13日（全6回）</p> <p>2 あじさい大学（相模原市民対象） 「動物と親しむ」 6月6日～2月22日（全24回）</p> <p>3 公開講座 「麻布大学スタディ・ドッグ・スクールの取り組み」 「地域で学び、地域を創る環境学習～産官学民協働の環境まちづくり」 7月23日（埼玉県さいたま市） 「動物園の新たな試みと経営再建」「笑うカイチュウアトピーからがんまで」 8月25日（山形県） 「ヒトと動物の関係を科学する」 9月3日（熊本県熊本市） 「人はなぜ動物に癒されるのか」 9月9日（長野県松本市）</p>
日大	<p>1 現在の動物病院が平成7年に湘南キャンパスに設置されて以来、動物病院主催のセミナーを毎月1回開催しており、平成18年11月現在で計126回に達している。 講演内容は臨床教員がコーディネーターとなりテーマや講演者を決め、主に臨床教員および非常勤講師が講演している。このセミナーには動物病院に症例を紹介して頂いた全ての獣医病院に毎回案内を出しており、2年前からこのセミナーに参加した獣医師会会員は日本獣医師会の生涯教育のポイントを取得できる。</p> <p>2 動物病院では一般飼い主を対象に、動物の病気に関する無料電話相談も受け付けている。</p> <p>3 動物医科学研究センターが主催する公開セミナーや国際シンポジウムも地域住民が参加できるようになっている。</p>

8. 自己点検・評価体制

1) 自己点検評価体制（表 8-1-3）

5 大学の獣医学科の全てにおいて自己点検評価委員会が設置されている。構成員はいずれの大学も複数である。開催回数は年間数回から随時開催されている。

相互評価システムと外部評価システムは、日本獣医生命科学大学のみが導入している。その方法としては、大学基準協会の認証評価を利用している。教育法で定めた認証評価は平成 16 年からであるので、他大学にはそれ以前にすでに認証評価を受けている大学もあるが、20 年までは全て外部評価としての認証評価を受けることになっている。

2) 追加調査事項：国家試験 17 科目の教授状況について（表 8-4-a-e）

・専任担当講座（研究室）がない科目は以下である。対応策として、他の専任教員による兼担（*）、あるいは非常勤講師（@）で支障のないように講義がなされている。

酪農学園大学	: 魚病学 (@)、倫理学 (*)
北里大学	: 魚病学 (@)、倫理学 (講義されていない)
日本獣医生命科学大学	: 伝染病学 (*)、毒性学 (*)、倫理学 (*)
日本大学	: 毒性学 (*)、倫理学 (*)
麻布大学	: 毒性学 (*)、魚病学 (@)、倫理学 (*)

魚病学、倫理学を除いた国家試験科目の担当講座（研究室）に教授が欠員となっている大学は以下である。とはいえ、助教授がいるので問題はないと考える。

酪農学園大学	: 0 人
北里大学	: 0 人
日本獣医生命科学大学	: 1 人
日本大学	: 2 人
麻布大学	: 2 人

・日本獣医生命科学大学では伝染病学、毒性学の研究室、日本大学、麻布大学では毒性学研究室の設置が望ましい。

3) 追加調査事項：地域に対する大学のサービスについて（表 8-5）

いずれの大学も工夫を凝らして積極的に地域サービスを行っている。特に専門領域でのサービスに加え、北里大学の、小学生、中学生と父兄に向けての夏休み体験学習、酪農学園のオープンキャンパスでの体験学習、日本獣医生命科学大学の「親と子の乗馬教室」などはユニークである。麻布大学は他県に出向いて公開講座を開催している。

表 8-1 自己点検評価委員会

大学	自己点検評価委員会	構成員	年間開催回数
酪農大	有	不定	数回
北里大	有	13名	随時
日獣大	有	4名	随時
麻布大	有	12名	1～2回
日大	有	16名	2回

表 8-2 相互評価システム

大学	相互評価システム	実施方法
酪農大	無	大学自己点検・評価委員会への毎年研究論文、学会発表については報告、また紀要に記載。 5年毎に研究科委員会への自己点検報告書作成・審査実施
北里大	有	大学に自己点検・評価委員会を設置し、教員の教育・研究の活性化のために多元的業績評価規程を制定し、それに沿って現在試行を行っている。
日獣大	有	
麻布大	無	平成13年に大学基準協会に加盟し、相互評価を受けている。
日大	有	学部到自己点検・評価委員会が設置されており、評価システムは機能している。

表 8-3 外部評価システム

大学	外部評価システム	実施方法
酪農大	無	2007年度に日本高等教育評価機構による外部評価を実施する予定である。(獣医学部のみを対象とした外部評価は実施せず)
北里大	有	平成12年8月には大学基準協会あて大学相互評価(第三者評価)を受検し、平成13年3月に認定を受けた。評価結果の改善事項(助言・勧告)については、平成16年7月に改善状況を報告した。
日獣大	有	平成16年度に財団法人大学基準協会に加盟判定審査を申請し、審査の結果、正会員として認定され、外部評価システムを導入した。その際、同時に認証評価も受け、評価結果の改善事項については、大学基準協会へ文書にて報告した。
麻布大	無	
日大	有	大学基準協会の「認証評価」を受け、その結果を全教員に配布した。

表 8-3-a 追加調査事項：国家試験 17 科目の教授状況

1) 酪農学園大学

<平成 18 年 4 月 1 日現在>

科目名	講義時間	実習時間	担当講座 (研究室) 名	専任教授数	専任助教授数	専任講師数	助手数	非常勤講師数
解剖	75	180	獣医解剖学	1	1	1		
生理	60	90	獣医生理学	1	1		1	
病理	60	135	獣医病理学	1		1	1	
内科・外科・臨床繁殖	142.5	270	小動物臨床学教室	4	4		1	
内科・外科・臨床繁殖	142.5	270	大動物臨床学教室	5	4			
薬理	45	45	獣医薬理学	2				
微生物	52.5	67.5	獣医微生物学	2	1			
公衆衛生	75	90	獣医公衆衛生学	1	2			
実験動物	15	45	実験動物学	2				
放射線	15	45	獣医放射線学	2				
衛生	30	45	獣医衛生学	1	1			
生化学	30	45	獣医生化学	1		1		
寄生虫(病)	30	45	獣医寄生虫学	1	1			
伝染病	52.5	67.5	獣医伝染病学	1	1			
毒性	15	45	獣医毒性学	1	1			
魚病学※1	15							2
倫理 ※2								
獣医畜産法規	15		学科内分担	2				5

注)

1. 内科、外科、繁殖を含めた総合臨床学および実習を行なうことで、動物を多方面から分析し、診断・治療・管理に関わる事項を教授・把握しており、十分な教育が評価できる。
2. 「魚病学※1」は十分な教育が評価できる。
3. 「倫理 ※2」についてはキリスト教学を必修科目とし「土を愛し、人を愛し、動物を愛す」三愛精神を養うことを基本に実施するとともに、哲学の専任教授を配置し、哲学と思想についての選択科目も配置、また獣医学概論や臨床獣医学入門などの講義内でも随時、動物福祉などを取り上げられており十分な教育が評価できる。
4. 国家試験 17 科目の必修であるもののみ記載
(獣医学概論、臨床獣医学入門など除いています)

表 8-3-b 追加調査事項：国家試験 17 科目の教授状況

2) 北里大学

<平成 18 年 4 月 1 日現在>

科目名	講義時間	実習時間	担当講座 (研究室) 名	専任教授数	専任助教授数	専任講師数	助手数	非常勤講師数
解剖	75	180	獣医解剖学	1		2		
生理	75	90	獣医生理学	1		1	1	
病理	60	135	獣医病理学	1	1	1		
内科	60	180	獣医内科学	2		2	2	
外科	60	135	獣医外科学	1	2	2	1	
薬理	45	90	獣医薬理学	1		1		
微生物	75	90	獣医微生物学	1			1	
公衆衛生	60	90	獣医公衆衛生学	1	1	1		
臨床繁殖	45	90	獣医繁殖学	1		1	1	
実験動物	30	45	実験動物学	1		1		
放射線	30	45	獣医放射線学	1		1	1	
衛生	30	45	獣医衛生学	1		1		
生化学	60	45	獣医生理化学	1		1		
寄生虫(病)	45	45	獣医寄生虫学	1		2		
伝染病	30	45	獣医伝染病学	1	1		1	
毒性	30	45	毒性学	1	1	1		
魚病学※1	30							3
倫理 ※2								

表 8-3-c 追加調査事項：国家試験 17 科目の教授状況

3) 日本獣医生命科学大学

<平成 18 年 4 月 1 日現在>

科目名	講義時間	実習時間	担当講座 (研究室) 名	専任教授数	専任助教授数	専任講師数	助手数	非常勤講師数
解剖	75	158	獣医解剖学	1	1		1	
生理	45	90	獣医生理学	1	1			
病理	45	90	獣医病理学	1		1	1	1
内科	90	90	獣医内科学	1	3		1	1
外科	105	135	獣医外科学	1	1		3	
薬理	45	90	獣医薬理学	1		1		
微生物	90	135	獣医微生物学	1	1			2
公衆衛生	75	90	獣医公衆衛生学		1		1	1
臨床繁殖	45	90	獣医臨床繁殖学	2		1		
実験動物	45	68	比較動物医学	1		1		
放射線	45	45	獣医放射線学	1	1		1	
衛生	30	45	獣医衛生学	2			1	
生化学	30	90	獣医生理化学	1		1		
寄生虫(病)	60	45	獣医寄生虫学	1	1		1	
伝染病	30	0	獣医微生物学					1
毒性	15	0	獣医生理学					
魚病学	45	45	魚病学	1	1	1		
倫理	8	0	研究室なし					2

注) 獣医倫理・法規は、池本卯典学長(法医学)が講義を担当しており、十分な教育ができています。

表 8-3-d 追加調査事項：国家試験 17 科目の教授状況

4) 麻布大学

<平成 18 年 4 月 1 日現在>

科目名	講義時間	実習時間	担当講座 (研究室)名	専任 教授数	専任 助教授数	専任 講師数	助手数	非常勤 講師数
解剖	75	135	解剖学	3		1		
生理	60	90	生理学	1	1	2		
病理	60	90	病理学	1	1			
内科	30	45	内科学	2	3	2	1	
外科	30	45	外科学	1	2	1	2	
薬理	60	45	薬理学	1	1	1		
微生物	105	90	微生物学	1	1			
公衆衛生	90	90	公衆衛生学	1	2	1		
臨床繁殖	30	45	繁殖学	1	1			
実験動物	30	0	実験動物学	1	1			
放射線	30	45	獣医放射線学	1	1	1		
衛生	75	45	衛生学	2		1		
生化学	60	45	生理化学	1		1		
寄生虫(病)	60	45	寄生虫学		1			
伝染病	75	45	伝染病学		2			
毒性	30	90	薬理学	1		1		
魚病学※1	30	0						1
倫理 ※2	60	0			1			

表 8-3-e 追加調査事項：国家試験 17 科目の教授状況

5) 日本大学

<平成 18 年 4 月 1 日現在>

科目名	講義時間	実習時間	担当講座 (研究室) 名	専任教授数	専任助教授数	専任講師数	助手数	非常勤講師数
解剖	90	90	獣医解剖学	1	1	0	1	0
生理	60	45	獣医生理学	1	0	1	0	0
病理	90	90	獣医病理学	1	1	0	0	0
内科	150	180	獣医内科学	0	1	1	2	1
外科	150	180	獣医外科学	1	0	1	1	1
薬理	60	45	獣医薬理学	1	0	1	0	0
微生物	90	90	獣医微生物学	1	1	0	0	0
公衆衛生	90	90	獣医公衆衛生学	2*	0	1	0	1
臨床繁殖	90	135	獣医繁殖学	1	0	1	0	1
実験動物	60	45	実験動物学	1	0	1	0	0
放射線	60	45	獣医放射線学	0	1	0	0	0
衛生	60	45	獣医衛生学	1	0	1	0	0
生化学	60	45	獣医生化学	1	0	0	1	0
寄生虫(病)	60	45	医動物学	1	0	1	0	0
伝染病	60	45	獣医伝染病学	2	0	0	1	0
毒性	30	45	獣医薬理学・ 実験動物学	2(兼)	0	0	0	0
魚病学	60	45	魚病学	1	1	0	0	0
倫理	30	0		1	0	0	0	1

* 客員教授 1 名を含む

表 8-5 追加アンケート項目

1) 貴大学では地域に対するサービスを行っていますか？

もしもあれば、組織（大学、学科、講座、教員個人のどのレベルか）、サービス内容、年間のサービス日数、サービスに携わる教員の人数など、その実態をお知らせください。家畜病院での日常的なサービスについてもご記入ください。

酪農学園大学

<p>RGU-VTR 伴侶動物医療セミナー（獣医学科小動物臨床学教室担当員 9 人） 受講生は学内外臨床獣医師および学生対象 講義回数は 10 回毎年実施 大動物臨床教育セミナー（産業動物医療部門を中心に担当） 毎年実施 講義回数は 1 回 受講生は学外臨床獣医師および学生対象 しつけ教室「わんわん学校」（担当教員 1 名）年 2 回各 8 日 受講生はイヌおよびその飼い主対象 やさしい「犬の行動学」（担当教員 1 名）年 1 回 1 日 受講生は飼い主対象 臨床獣医師からの検査依頼、検体の引き受け実施（病院など対応） 寄生虫、細菌、ウイルスなどの検査依頼の引き受け、獣医師およびその他からの野生動物、海洋生物などの依頼検体の引き受け（各担当教室対応） 現代 GP 市民公開講座、JICA 研修（北海道獣医師会）、JVMA 獣医技術講習会 等</p> <p style="text-align: center;">大学レベル（他学科との共催）</p> <p>酪農公開講座（学科担当教員 1 名）年 1 回 1 日 受講生は酪農関連全般 生乳生産衛生の課題と対応に関する紹介 酪農学園大学公開講座（学科担当教員 1 名）年 1 回 1 日 受講生は一般、企業など 食用動物をめぐる耐性菌の現状と課題を解説 江別市民教養講座 年 4 回（学科担当教員 1 名） 受講生は一般 一般病原体・環境汚染物質と疾病との関係／生物種と生態系・生息環境との関係などを様々な側面から紹介 オープンキャンパス 2006（獣医学科担当教員は 5 名）期間は 2 日 受講生は一般 獣医学領域の体験学習、事例紹介など</p>
--

北里大学

<p>1. 北里大学獣医畜産学部公開講座 獣医学科教員（平成 18 年度：担当教員 4 名）と他学科教員が担当。受講生は一般市民。毎年開講。講義回数は 9 回（平成 18 年度）。</p> <p>2. 夏休み短期体験学習 獣医学科教員（担当教員 2～3 名：平成 18 年度は 1 名）と他学科の教員が担当。受講生は小学校 5, 6 年生および中学校 1, 2 年生約 40 名とその父兄。期間は 2 日間（平成 18 年度は 1 日）。</p> <p>内容 ①家畜の飼育方法、②飼料の調整方法、③家畜、小動物の感染症、④公衆衛生 ⑤動物病院業務等の講義と実習 等</p> <p>3. 人獣共通感染症学教室公開講座（研究室主催）年 3 回開催。講師は大学教授、国立研究機関の諸先生による最新の話題について講演。受講生は地域の養鶏企業、県家畜保健衛生所、企業。</p> <p>4. 臨床獣医師から依頼された検体（血液他）の検査（動物病院担当）。</p> <p>5. 青森県獣医師会からの要請による臨床実習（動物病院担当）。小動物開業獣医師を対象。年 2 回実施。</p>

日本獣医生命科学大学

馬術部において、武蔵野市民との交流を通じて深め、動物と人のコミュニケーションを図ることを目的として、「親と子の乗馬教室」、「市民公開講座（乗馬教室）」を開催している。

また、学生を中心とした「障害者乗馬実行委員会」を組織し、武蔵野市、三鷹市市、西東京市の障害者を対象とした、障害者乗馬を開催している。

	開催時期	開催期間	教員数	学生
「親と子の乗馬教室」	大学祭（11月上旬）	1日	1名	10名
「市民公開講座」	不定期	6日	1名	10名
「障害者乗馬」	不定期	1日	1名	10名

家畜病院での日常的サービスについて

1. 社会活動動物（登録されている盲導犬等）の無料診療
2. 獣医師または動物看護師を対象とした研修会の開催

麻布大学

・市民講座

市民大学（相模原市・座間市民対象）

「飲・食からみた人と動物の関係」 7月26日～9月2日（全8回）

「最新医療における検査—遺伝子

検査と画像・生理的検査—」 8月2日～9月13日（全6回）

あじさい大学（相模原市民対象）

「動物と親しむ」

6月6日～2月22日（全24回）

・公開講座

「麻布大学スタディ・ドッグ・スクールの取り組み」

「地域で学び、地域を創る環境学習～産官学民協働の環境まちづくり」

7月23日（埼玉県さいたま市）

「動物園の新たな試みと経営再建」

「笑うカイチュウ—アトピーからがんまで—」 8月25日（山形県山形市）

「ヒトと動物の関係を科学する」 9月3日（熊本県熊本市）

「人はなぜ動物に癒されるのか」 9月9日（長野県松本市）

日本大学

現在の動物病院が平成7年に湘南キャンパスに設置されて以来、動物病院主催のセミナーを毎月1回開催しており、平成18年11月現在で計126回に達している。講演内容は臨床教員がコーディネーターとなりテーマや講演者を決め、主に臨床教員および非常勤講師が講演している。このセミナーには動物病院に症例を紹介して頂いた全ての獣医病院に毎回案内を出しており、2年前からこのセミナーに参加した獣医師会会員は日本獣医師会の生涯教育のポイントを取得できる。また、動物病院では一般飼い主を対象に、動物の病気に関する無料電話相談も受け付けている。

平成17年3月に、学術フロンティア事業で設置された動物医科学センターでは、同センターが主催するセミナーが毎月公開で実施されている。また、毎年国際シンポジウムが開催され、学内外から多くの参加者がある。

9. 全国横断的評価に伴う私学上乘せ基準及び評価項目

1) 教育課程 (表 9-1-①～⑧)

①教育の理念と目標を実現するために教育課程や学科目が体系的にほとんど編成されていると回答したのは、酪農学園大学、北里大学、麻布大学であった。日本大学と日本獣医生命科学大学も達成間近である。

②学科目の必修、選択や年次配当の適切さは、酪農学園大学、北里大学、麻布大学が適切に配慮していると回答している。日本大学と日本獣医生命科学大学も達成間近である。日本獣医生命科学大学では、選択科目の単位数を減らし、必修科目の単位数を増やしている。日本大学は年次配当に工夫を凝らし完成を目指している。

③講義、実習、実験、演習ごとの授業時間数は、酪農学園大学、北里大学、麻布大学が適切に配慮していると回答し、日本大学と日本獣医生命科学大学も達成間近であるとしている。

④単位の認定方針は、各大学において変更はないようである。獣医学科の特性から、出席を重視し、単位の認定を緩くする傾向は見られないのが特徴で評価できる。

⑤教育改善に必要な組織的な対応については、多くの大学が達成間近である。しかし、学生による授業評価の取り扱いに関しては多くの大学で教員の自主的な改善にまかされており、組織的な対応が行き届いているとは言えない。北里大学は、FD として、外部講師による講演や、模擬講義を実施して組織的に教育指導方針の改善を促しているのは評価できる。

⑥シラバスの充実と使いやすさに関しては、学生評価を受け毎年改良されている大学が多い。どの大学も分かりやすいシラバスの作成に努めてきたが、学生に予習と復習をしっかりとさせるという観点での工夫も大事である。

⑦学生に対する履修指導は、各大学でクラス担任による個人指導も含めて細やかに行われている。麻布大学は履修登録に Web 履修を導入し登録ミスの減少を実現しており評価できる。

⑧少人数教育、実践教育は、外国語、研究室配属、一部の实習や臨床実習において全ての大学で行われている。麻布大学は、実習台を増やして少人数の班分けで実習を実施している。私立大学は学生数が多いが、二部授業はまだ実施されていない。

2) 教員組織 (表 9-2-①～⑥)

①大学基準協会の目標が 72 名であるとすれば、全ての大学でこの目標は達成していない。北里大学と日本大学は 7 名の増員、麻布大学は 6 名の増員を検討中であるが、72 名には到達しない。

②教員数は目標に到達していないが、専任教員はおおむね適切に配置されている。しかし、北里大学は臨床系教員に、酪農学園大学は公衆衛生・環境関連分野に不足がある。麻布大学は環

境獣医学系の教員が若干不足しているようである。

③専任教員の年齢構成において若手教員が不足していると回答したのは酪農学園大学と麻布大学と北里大学であった。日本獣医生命科学大学と日本大学は幅広い年代で教員構成がなされている。獣医師免許は各大学の教員は高い割合で所持している。学位を取得していない教員は、日本大学で1名、麻布大学で2名である。北里大学、酪農学園大学は実数を示していないが概ね適切であるとしている。日本獣医生命科学大学は回答がなかった。専門分野の教員においては全員が学位を取得することが基本である。

④教育内容などを教員間で調整できるシステムに関しては、日本大学、麻布大学、北里大学、酪農学園大学がいわゆる系教育を行っているので可能である。日本獣医生命科学大学は複数で担当する科目に関しては調整をしている。臨床系の教育であれば系内で調整がしやすいが、科目によっては専門性が高いので調整が困難であろう。例えば、解剖学実習を生理学の教員が担当するのは無理がある。したがって、余裕のある人員配置がこれからの問題であろう。

⑤実験・実習の人的補助体制については、各大学がティーチングアシスタント（TA）を採用している。しかし、全ての科目でTAが採用されているわけではない。各大学が抱えているTAの数不足を解決することが望ましい。日本大学はポスドクを採用しており高く評価できるが、他大学ではこの制度は導入されていないので検討すべきである。日本大学と麻布大学はリサーチアシスタントを採用しているのは評価できる。

⑥教員の教育活動の評価方法が確立していると回答した大学はどこもなかった。その中でも、北里大学には教員の多元的業績評価委員会があり、教育活動の評価に積極的に取り組んでいる。学生の授業評価により各教員は授業改善を行うようになってきているが、改善後の評価システムの構築を急ぐべきである。教員の教育活動の評価は、学生による授業評価がいまのところ最もよいとされている。そのため、日本の大学でも学生による授業評価を行う大学が増えてきたが、その結果を教員の給料に反映したり、教員を表彰している大学は非常に少ない。学生評価の高い教員であっても、大学側から何も評価されないと長年続けていると停滞するというデータもある。

3) 研究活動 (表 9-3-①-③)

①酪農学園大学は教育研究活動報告、麻布大学は年報、日本獣医生命科学大学は研究報告書、北里大学は多元的業績評価委員会がそれぞれ自己点検自己評価として教員の研究活動の活性化を検証している。従って、これらの評価は毎年行われているので評価できる。日本獣医生命科学大学はさらに、5年に一度研究活動の総合的、自己点検評価を実施し、研究活動に応じて研究奨励金を交付している。このことはさらなる活性化につながるため高く評価できる。日本大学は、11学科で学部を構成しており、教員は文系から理系の教員で構成されていることもあり、

汎用性のある活性度を検証するためのシステムはまだ構築できていない。しかし、獣医学科だけでもシステムを早急に構築することが望ましい。

②酪農学園大学と麻布大学は、科研費の申請を行わない教員は学内の研究費の申請資格を失うとしている。これは、外部資金の導入を促すためにはよいシステムである。北里大学は、補助金の案内、資料配付にとどまり、事務的なバックアップ体制は取られていない。科研費申請を事務的に支援する体制があるのは、日本大学、日本獣医生命科学大学、麻布大学、酪農学園大学である。このことは教員の科研費申請率を上げるのに有効であると考えられる。

特許取得のための支援体制が整っているのは、日本大学、日本獣医生命科学大学、麻布大学であり、高く評価できる。

③研究活動を活発化させる対策で、人員の補充が必要と答えたのは麻布大学と酪農学園大学である。若手研究員への研究資金の充実としたのは北里大学である。ハード面の充実を図ったとしたのは、日本大学、日本獣医生命科学大学、麻布大学であった。研究体制の見直しを検討中としたのは麻布大学であった。研究の活性化には大学としての総合的な充実が不可欠であるが、各大学では積極的に取り組んでおり評価できる。

4) 改善目標の設定 (表 9-4-①-④)

①短期的な改善目標が設定され実行されている大学は、酪農学園大学、北里大学、日本獣医生命科学大学、麻布大学、日本大学である。

②中期的な改善目標も5大学全てにおいて設定されている。目標を設定している各大学は完成を目指して努力されることと思う。

③長期目標が設定されている大学は、酪農学園大学と北里大学だけであった。

平成14年の相互評価報告書には、「いずれの大学とも短・中・長期の改善目標を設定したことは特筆すべきである」と書かれている。しかしながら、その報告書を読むと麻布大学は短・中・長期の改善目標を設定していないことになっている。長期目標だけ設定していない大学は北里大学、日本大学であった。今回の調査では、短・中・長期の改善目標を設定していない大学は麻布大学と日本大学であり、長期目標だけ設定していない大学は日本獣医生命科学大学だけであった。おそらく大学によって回答する際に混乱があるのであろう。

平成14年の相互評価報告書には、各大学の設定した改善目標がどのように実現、達成されていくかを引き続き調査・評価することが求められると記されている。従って、短期目標を現在評価すると、麻布大学は達成され、北里はおおむね達成され、酪農学園は達成されていないと評価している。これからは、中期目標、長期目標をかけた、着実に達成していく努力が大学に求められる。

表 9-1-① 教育課程

①各大学の教育の理念と目標を実現するために、教育課程や学科目が体系的に編成されていますか？

A ほとんど達成されている B 達成されている部分が多い C 達成されていない部分が多い D ほとんど達成されていない。

大学	評価	達成内容と達成されていない部分の理由
酪農大	A	健全で人間性豊かな生命観と社会的使命感を持った人材を育成するためにキリスト教学および獣医学概論を配置している。幅広く深い教養と専門知識・技術の養成に資するため教養科目、専門基礎科目、専門関連科目、専門科目および専修科目を適切に配置し、総合的な判断力を涵養し、創造的獣医師となりうる人材を育成するために各専門科目には実習を配置し、さらに病院実習、学外実習、海外臨床実習を配置している。
北里大	A	平成16年4月から、獣医学6年制教育が始まって以来の大幅なカリキュラム改正を行い、講義は半期1単位として細分化し、教育内容と教育時間の適正配分とシラバスの充実を図った。基礎、応用、臨床教育の関連と、臨床教育実習の充実を目指し、特に臨床系研究室の教員配置などにも配慮した構成とした。 運用が始まったばかりであり、期待する効果と問題点が明らかになり、調整を加えながら、教育理念と目標の達成に向かいたい。
日獣大	B	実践的な専門教育（臨床分野）を充実させる為、新規科目を20科目設置し、また、 臨床分野（獣医内科学、獣医外科学）の科目を更に専門化した領域に名称変更した。
麻布大	A	本学科は、基礎獣医学系（6研究室）、病態獣医学系（6研究室）、生産獣医学系（7研究室）、臨床獣医学系（6研究室）、環境獣医学系（4研究室）の5系で獣医学教育を行っている。これらの系を教育単位として機能的、効率的に組織している。
日大	B	形態、機能、生体防御、病態制御ならびにそれらの境界領域の5分野の各学科目を学年へ体系的に配置するとともに上級学年には積極的な病院実習、学外実習等を配し、専修性と多様性とへの対応を念頭に置いた編成により教育理念の実現を図っている。

表 9-1-② 教育課程

②教育の理念と目標を実現するために、学科目の必修・選択や年次配当は、適切に設定されていますか？

A ほとんど達成されている B 達成されている部分が多い C 達成されていない部分が多い D ほとんど達成されていない。

大学	評価	達成内容と達成されていない部分の理由
酪農大	A	専門科目以外は広範囲な科目から選択が可能のように配置され、幅広く深い教養を身につけ、また動物と人との健康保持、食料の安定供給および環境保全に寄与する多様な人材の育成を可能にしている。
北里大	A	先に述べたように、平成16年4月から新カリキュラムの運用が始まり、平成18年度で3年生まで到達した。現時点では、基礎教育課程が終了した段階であり、カリキュラム改正においても比較的变化の少ない領域を含んでおり、順調に進んでいる。平成19年度から、臨床系科目が始まり、さらに平成20年度には臨床実習が本格化し、新しいカリキュラムの真価が問われる段階に入ると思われる
日獣大	B	実践的な専門教育を充実させる為、選択科目の単位数を減らし、必修科目の単位数を増やした。
麻布大	A	平成15年度入学から、3年次までに基礎教育科目を修得する。基礎獣医学系科目は3年次まで、病態獣医学系科目は4年次まで、生産獣医学系科目は5年次まで、臨床獣医学系科目と、環境獣医学系科目は5年次まで修得する。 1年次の前期に選択科目として「環境・食糧・生命操作問題」を開講し、自由科目として「産業動物臨床基礎実習」を開講している。2年次で「環境保全学」、5年次で「先端獣医療」、6年次で「総合獣医学」をそれぞれ必修で開講している。
日大	B	初年次に獣医学概論を開講し、獣医学の目的と理念の習得を徹底させている。中級学年では基礎と臨床との関連に留意し、上級学年では、相互に関連した高度な知識と技術の習得を目的とした総合演習や専門演習を設けている。このように、高度な職業人教育に相応しい学科目の年次配当を行っている。

表 9-1-③ 教育課程

③教育の理念と目標を実現するために、講義・実習・実験・演習ごとの授業時間数は、適切に設定されていますか？

A ほとんど達成されている B 達成されている部分が多い C 達成されていない部分が多い D ほとんど達成されていない。

大学	評価	達成内容と達成されていない部分の理由
酪農大	A	食料の安定供給に携わる獣医師を育成するために畜産学および産業動物臨床に関する講義・実習を充実させている。また、獣医師の立場から環境保全に貢献する人材の育成のため、野生動物学、環境文化論、生物の進化と多様性などの科目を設けている。
北里大	A	講義・実習・実験・演習ごとの授業時間数についても、平成16年4月から新カリキュラムで、臨床系教育の充実を一つの目標として、基礎、応用、臨床の全体的なバランスを取りながら、配置・調整を行った。実際に、高学年での運用は平成19年度から始まり、その結果を見ながら、今後とも検討を加えていく予定である。
日獣大	B	実践能力を醸成する教育を配する目的として、1年次より付属牧場においての「臨床体験実習」を実施している。
麻布大	A	平成15年度入学から、2年次までに基礎教育科目の必修講義・演習5単位、選択必修12単位、選択23単位、合計40単位以上を修得する。基礎獣医学系（必修講義19単位、必修実習6単位）、病態獣医学系（必修講義19単位、必修実習6単位）、生産獣医学系（必修講義22単位、必修実習5単位）、臨床獣医学系（必修講義21単位、必修実習6単位）、環境獣医学系（必修講義18単位、必修実習4単位）を修得する。すなわち、専門科目は142単位以上を修得する。 1年次の前期に選択科目として「環境・食糧・生命操作問題」（2単位）を開講し、自由科目として「産業動物臨床基礎実習」（1単位）を開講している。2年次で「環境保全学」（2単位）、5年次で「先端獣医療」（1単位）、6年次で「総合獣医学」（3単位）をそれぞれ必修科目として開講している。
日大	B	大部分の必修科目は講義と実習とを組み合わせ実施している。必修科目129単位の内訳は基礎、臨床、応用および獣医学関連各系でほぼ均等に配し、開講科目数、総単位数の枠組みの観点から適切な設定と考える。また、発表や討論を主体とする演習科目も単位として充当している。

表 9-1-④ 教育課程

④教育の理念と目標を実現するために、単位の認定方針は、適切に設定されていますか？

A ほとんど達成されている B 達成されている部分が多い C 達成されていない部分が多い D ほとんど達成されていない。

大学	評価	達成内容と達成されていない部分の理由
酪農大	A	各年次において一定の単位数以上の取得を義務付ける進級要件が設定されている。
北里大	A	単位の認定方針は、カリキュラム改正とは関係なく、これまでの方針に変更はない。
日獣大	B	単位の認定については、学則22条から24条に定められている。 各授業科目について、3分の2以上の出席を要し、各学期末の定期試験で60点以上を合格としている。また、授業科目によっては、試験以外の適切な方法により学修の成果を評価して単位を与えている。
麻布大	A	単位の認定は、講義、演習、ゼミ及び実験・実習において授業時間数の出席を3分の2以上出席しなければ認められない。試験には、定期試験、追試験、再試験、重複試験があり、60点以上を合格として単位を認定している。 将来的には、GPA制度や履修科目の上限設定等を導入し、学生の卒業時の質の保証の観点から厳正な成績評価に取り組む予定である。
日大	B	単位の認定方法はシラバスに記載し、その徹底について学生に周知させている。主に期末試験の成績を重視して認定しているが、必要に応じて出席状況、レポート採点などを加味して認定している。

表 9-1-⑤ 教育課程

⑤教育内容や方法の改善に必要な組織的な対応が行われていますか？

例えば、学生による授業評価が大学あるいは学部・学科として行われており、その結果を学生の学習の活性化や教員の教育指導方法の改善を促進するために生かすための具体的な処置がなされていますか？

A ほとんど達成されている B 達成されている部分が多い C 達成されていない部分が多い D ほとんど達成されていない。

大学	評価	達成内容と達成されていない部分の理由
酪農大	A	2001 年度以降全科目について学生による授業評価を実施し、評価結果は科目毎に教員に知らせ、授業方法等の改善が行われている。
北里大	A	教員多元的業績評価委員会が大学全体に設置され、学部委員会が教育内容や方法の改善について、1) 学生による授業評価を前期後期にアンケート調査を実施、2) FDとして、外部講師による講演、内部でも模擬講義などの実施、などが行われ、学生の学習の活性化や教員の教育指導方法の改善を促進している。
日獣大	C	学生による授業評価（アンケート調査）の結果については、教員各自に文書通知をして、る。ただし、FD委員会等の組織的な改善に向けての促進は実施されていない。
麻布大	B	本学の2学部、5学科は講義及び実習の各科目の最終日に学生による授業評価を実施している。各科目の集計結果は学内掲示板に掲載し、全学的に公表している。学生による授業に対する自由記載に関しては筆跡が特定できないようにワープロで書き写し、科目担当教員に配付している。 各教員は当該科目の授業改善に関する考えをまとめ、次年度の最初の講義時間に受講生に伝えることにしている。その内容は、学部長に文書で提出することになっている。しかしながら、文書での提出率は極めて低いことが今後の問題である。
日大	B	学生による授業アンケートが学期末に実施され、授業内容・教材・教授法など18項目について5段階評価が行われている。また、学生が当該授業について自由に意見を記載する欄も設けられている。得られた結果は学部レベルで統計学的に集計され、授業担当教員に返される。個々の教員による自主的な授業改善の参考資料として活用されている。

表 9-1-⑥ 教育課程

⑥シラバスの充実度や学生にとって活用されやすい内容になっているかなどの評価はなされていますか？

A ほとんど達成されている B 達成されている部分が多い C 達成されていない部分が多い D ほとんど達成されていない。

大学	評価	達成内容と達成されていない部分の理由
酪農大	A	シラバスは毎年更新されている。シラバスについても、授業評価項目に含めて学生の評価を受けている。その結果は科目毎に担当教員に知らされ、改善に役立てられている。
北里大	A	シラバスは、毎年更新されたものが4月に全学生に配られる。さらに、ホームページ上にも同じ内容が掲載され、検索可能となっている。また、教員によっては、ホームページに講義で使ったパワーポイントファイルを掲載し、学生が自由に何度も閲覧出来るようになっている。
日獣大	B	学生による授業評価（授業アンケート）の質問項目にシラバスの評価があるが、平成18年度前期授業アンケートの集計結果においては、5段階評価で全授業科目平均が3.5の評価となっている
麻布大	A	シラバスは毎年科目担当で検討し、変更があれば教務委員会で整理訂正してきた。19年度のシラバスは、すべての科目において体裁を統一にして整え読みやすいように改訂した。各授業時間の授業担当者のすべてを明記した。学年ごとに進級基準を載せるようにした。
日大	A	学習目標、授業方法、授業内容、成績評価基準、さらに備考として参考書・履修条件・オフィスアワー、学びのキーワードなどがシラバスの必須記載項目となっており、授業内容については1回ごとの具体的内容が記載されている。

表 9-1-⑦ 教育課程

⑦学生に対する履修指導は適切に行われていますか？

A ほとんど達成されている B 達成されている部分が多い C 達成されていない部分が多い D ほとんど達成されていない。

大学	評価	達成内容と達成されていない部分の理由
酪農大	A	教務課ガイダンスにより年度当初に履修指導を行うほか、その後も随時教務課では窓口で履修指導を行う。また、アドバイザー制度（1～4年次）および教室所属制度（4～6年時）を設け、学生一人一人に担当教員が対応する、きめ細かな指導を行っている。
北里大	A	学生に対する履修指導は、毎年4月のオリエンテーションの際に、教務課の担当者がシラバスなどの資料を配付し、諸注意を与えている。また、6年間同じクラス担任が、履修状況を把握し、個別の指導を行っている。
日獣大	B	新入生については、入学時にオリエンテーションを実施し、そこで、履修指導を行う。 在校生は、年度初めに、履修ガイダンスを実施し、そこで、学年担任が履修指導を行っている。また、他大学の単位互換、教職課程については、全体ガイダンスとは別に開催し、学務課（事務）の担当者が履修指導を行っている。
麻布大	A	18年度から学生による履修登録はWeb履修とし、登録ミスの減少を実現した。学生に対しては、学年の初めに履修ガイダンスを実施している。単位不足などの問題のある学生は、各学年に3人いるクラス担任と教務課職員で適切に指導している。欠席の多い学生や学習修得意欲の欠けた学生に対する対応は、問題の把握や対応の迅速性にまだ改善の余地はある。
日大	A	履修方法に関する事項は、入学時に配付される学部要覧に詳細に記載されており、これに従って履修するよう学級担任から学生に周知させている。また各年度始めのガイダンスにおいて、学級担任から履修に関する注意事項が学生に伝達されている。

表 9-1-⑧ 教育課程

⑧少人数教育、実践教育が行われていますか？

大学	評価	目的と内容、実施されていない場合の理由
酪農大	実施	語学教育と総合臨床学実習の一部において実施している。しかし、教員の人数配置は十分とはいえない。
北里大	実施	<p>少人数教育として、4年次後期から専攻研究室において、専門外国語として英文論文セミナー、卒業研究が主たるものである。一つの研究室には1学年平均6-7名の学生が所属する。特に、卒業研究論文は、6年の11月末に4日間の学籍番号順の卒論発表会（発表8分、質疑4分）で基本的には一人1演題の卒論が発表される。</p> <p>さらに、平成20年からは新カリキュラムの臨床実習が実施され、少人数による各診療科のローテーションが始まる予定である。</p>
日獣大	実施	<p>本学の少人数教育としては、①外国語教育（英語）②コンピュータ教育③研究室への配属（3年生以上）がある。</p> <p>①外国語教育（英語） 従来の「辞書を引いて訳す」勉強ではなく、「聞く」「話す」能力を始めとした実用的・実践的な能力が求められている。</p> <p>②コンピュータ教育 パソコンを用いたデータ処理・文書作成が不可欠になっている。また、自分一人でパソコンの環境を整備することも必要になってくる。</p> <p>③研究室への配属 3年次になると、必ず所属希望の研究室を申請し調整の上、配属される。そこで、専門分野の研究を手伝ったりし、実践的な勉強が出来る。</p> <p>上記3件については、少人数クラスにすることにより、十分な教育効果が期待できる。</p>
麻布大	実施	<p>従来から、外国語科目は、少人数で教育をしている。しかし、それ以外の講義は1学年全員に対して講義している。同一学年の学生でも科目によっては、学習習熟度に格差が生じる場合がある。そのようなことが予想される場合は、クラス分けをして授業を実施することが望ましいのは明らかである。そのことが留年や退学者を減らすことにつながると考えられる。しかしながら、教員の数、教室の数、時間割上、二部授業を実施するとなると夜間授業をすることになり実行されていない。</p> <p>実習に関しては、クラスを半分に分けて2階建ての時間割で2科目の実習を行っている。それでも学生数が多いと判断した場合は、さらに半分に分けている。平成18年に完成した獣医学部棟の実習室は、従来の実習室よりも実験台が多いため少人数の班を増やして実習が可能となった。</p>
日大	実施	<p>5、6年次に開講されている獣医学総合演習において少人数教育、実践教育がなされている。目的としては診断から治療にいたる流れについて総合的に学習し、また専門的な知識や手技を体得することである。小グループによるローテーション教育を採用し、付属動物病院において19名の臨床系教員が指導に当たっている。</p>

表 9-2-① 教員組織

①教員組織は、大学基準協会基準の専任教員数以上になっていますか？

A ほとんど達成されている B 達成されている部分が多い C 達成されていない部分が多い D ほとんど達成されていない。

大学	評価	改善目標
酪農大	C	72名目標、平成18年度4月現在52名。
北里大	C	大学基準協会の設置案72名の目標に対しては達成されておらず、現在50名である。平成19年度内には57名体制を目標としている。
日獣大	A	平成18年度53名、平成19年度55名を予定。
麻布大	C	19年度までに6名の教員を公募して達成目標に向けて検討中である。
日大	C	現在、教授18名（客員教授1名を含む）、助教授7名、専任講師12名、助手8名、副手3名で構成されており、当面55名を目標に増員を図る予定である。

表 9-2-② 教員組織

②専任教員は適切に配置されていますか？

A おおむね適切である B 適切な部分が多い C 適切でない部分が多い D 適切でない。

大学	評価	具体的内容と適切でない場合の理由
酪農大	C	特に臨床系教員および公衆衛生・環境関連分野の教員が不足している。
北里大	C	臨床系教員の席が埋まっていないところがあり、鋭意努力している。
日獣大	B	獣医学科、動物科学科、食品科学科は適切に配置されているが、獣医保健看護学科は現在2年次まで在籍であり、これから専任教員の増員を計画している
麻布大	B	平成18年度現在、基礎獣医学系の教員数は11人、病態獣医学系は9人、生産獣医学系は12人、環境獣医学系は7人、臨床獣医学系は16人である。おおむね適切に配置されているが、若干、環境獣医学系の教員が不足している感がある。本学科では、実習の単位数に重点を置いて教員の配置を考慮している。
日大	B	専任教員はおおむね専門の部署（研究室）に配置されている。今後、若干教員の増員を行い、教育、研究のより一層の活性化を図る必要があると思われる。

表 9-2-③ 教員組織

③専任教員の年齢構成や学位、獣医師免許取得者の割合などの資格は教育活動を行う上で適切となっていますか？

A おおむね適切である B 適切な部分が多い C 適切でない部分が多い D 適切でない。

大学	評価	具体的内容と適切でない場合の理由
酪農大	B	若手教員数が不足している。学位、獣医師免許取得者については概ね適切である。
北里大	B	専任教員の年齢構成では、教授に占める団塊世代が4割と高く、問題を含んでいる。学位、獣医師免許取得者の割合など資格面での問題は殆どない。
日獣大	A	獣医学部、応用生命科学部とも専任教員の構成は幅広い年代に及んでおり、獣医師免許取得者も獣医学部全教員69名の内59名が獣医師免許を所持し、適切である。
麻布大	B	専任教員の年齢構成は20代、30代が少ない。専門課程の教員で博士の学位未取得者は2人だけである。獣医師免許のない教員は4人である。このことは教育には全く支障はない。
日大	A	専任教員は副手の3名を含め45名である。当面の教員数を55名、将来的には72名を目標としている。教員数は充足できていないものの、専任教員の年齢構成、学位取得状況、獣医師免許取得者の比率等はおおむね適切である。

表 9-2-④ 教員組織

④教育課程の内容などを教員間で調整できるような学科としてのシステム（例えば、教育課程におけるデパートメント制など）がありますか？また、ある場合にはそのシステムは適切に機能していますか？

調整を行っている（ A 適切に機能している B 適切に機能していない ）

C 調整は行っていない

大学	評価	具体的内容と適切でない場合の理由
酪農大	A	生態機能、感染・病理、衛生・環境、生産動物医療、伴侶動物医療、教養科目の5部門+教養科目制を実施している。
北里大	A	生体機構系（基礎）、予防衛生系（応用）、臨床系の3系として研究室が配置され、それぞれに教育委員会を設けて、講義・実習などのシラバスの検討を語り、研究室・教員の連携が密となるようにしている。
日獣大	B	複数の教員で担当する科目については当該教員間で調整を行っているが、現在のところ、学科全体での調整は行っていない。ただし、調整は必要であると考えられるので、内科学、外科学、微生物学等、教育範囲の広い科目については担当教員毎に科目名を変える等の処置を行っている。教育課程におけるデパートメント制についても視野に入れている。
麻布大	A	本学科は系教育を行っているため教員間で教育内容の調整は可能である。特に、実習の場場合はうまく調整されている。そのため、臨床系の教育では、若手教員の長期留学が可能となっている。
日大	A	特に臨床系研究室間では、教員の専門、適性に応じ、研究室内で欠員が生じた場合などには所属研究室の移動や教育内容の調整を行っている。

表 9-2-⑤ 教員組織

⑤実験や実習を実施する上で、人的補助体制は整備されていますか？

A ほとんど達成されている B 達成されている部分が多い C 達成されていない部分が多い D ほとんど達成されていない

大学	評価	具体的内容と達成されていない部分の理由
酪農大	C	ティーチングアシスタント制を採用しているが、全科目には対応していない。
北里大	C	ティーチングアシスタントなどを利用しているが、大学院生が不在の研究室もあり、補助体制が機能しているところと、そうでないところがある。
日獣大	B	実験や実習時に教員以外の実習委託を委託し、実験等のサポート態勢を取っている。
麻布大	A	本学では、ティーチングアシスタントとリサーチアシスタントの制度を設け、大学院学生を採用して実験・実習の補助体制を整えている。
日大	B	実習については、大学院生をティーチングアシスタント(TA)として採用し、実習準備や実習手技の補助に当てている。しかし、TAは全ての実習に配置されているわけではないので、今後その充実が望まれる。また、動物病院では、研修医が臨床や学生の実習の補助に当たるとともに、動物医科学研究センターではリサーチアシスタント、ポスドク等を採用し、実験およびその補助に充てている。

表 9-2-⑥ 教員組織

⑥教員の教育活動を評価する方法は確立され、実施されていますか？

A ほとんど確立されている B 確立されている部分が多い C 確立されていない部分が多い D ほとんど確立されていない

大学	評価	具体的内容と確立されていない部分の理由
酪農大	C	大学（年度毎の11項目の教育研究活動報告）の中に教育活動の報告項目がある。学部（昇格基準）にも一部教育歴に関する項目がある。また学生による授業評価や個々の教科の単位見修得者数も学期毎に集計されているが、毎年の評価として制度化しているわけではない。
北里大	B	大学には、教員の多元的業績評価委員会があり、その中の教員評価基準として、授業の改善工夫、講義・実習・演習の改善、学生による授業評価などが評価基準として設けられている。
日獣大	C	大学における教育活動等に関しての自己点検及び評価において、学部及び教室における教育活動の評価等は確立しているが、教員各自の教育活動の評価はまだ確立されていない。 今後は、教員の任期制、評価制度等の導入の中で検討する予定である。
麻布大	D	教員の昇任時には授業科目数を記載するが、そのことが必ずしも評価にはつながっていない。学生による授業評価も行っているが、それは授業改善のためであり教育活動を評価するものではまだない。確立されていない大きな理由としては、教育と研究は表裏一体という考えが強く、その割合も均等と考えられ研究業績評価をすれば教育の評価も相関するという考えが強いものと思われる。逆に、教育評価を強く主張すれば研究評価が軽視されるのではないかという考えと、研究業績がないから教育評価を主張しているととられかねないという日本の社会的風潮が残っているのではないかと考える。 大学の中期計画には、教員評価の導入が検討されている。
日大	B	本学では研究室体制を取っているため、具体的には室責任者(教授等)が研究室所属教員の教育活動を評価している。また、各学期の授業終了後にはマークシートによる学生アンケートを行い、その結果を担当教員に還元することで授業内容等の改善を図っている。今後、学科内で評価委員会のようなものを設立し、各教員の授業内容を査察し、公正に評価するシステムのようなものを作る必要があると思われる。

表 9-3-① 研究活動

① 教員の研究活動の活性度を検証するためのシステムは確立されていますか？

A ほとんど確立されている B 確立されている部分が多い C 確立されていない部分が多い D ほとんど確立されていない

大学	評価	具体的内容と確立されていない部分の理由
酪農大	A	大学（年度毎の11項目の教育研究活動報告）、学部（昇格基準）、大学院（5年毎の主査・副査資格審査基準）等の、報告・検証・評価システムが設けられている。
北里大	B	大学には、教員の多面的業績評価委員会があり、その評価システムの中に、業績評価がある。研究業績と活動については、論文（原著、総論、著書）、招待講演・シンポジウム（海外、国内）、補助金・研究助成などの細目について、それぞれ評価する。
日獣大	B	毎年度「日本獣医生命科学大学研究報告」を作成し、また5年に1度研究活動の総合的、自己点検評価を実施している。更に、獣医学科では、各教員の研究活動状況を踏まえ、研究奨励金を交付している。
麻布大	B	本学では、麻布大学年報を発行して各教員の業績の自己点検も行っている。
日大	C	日本大学生物資源科学部は11学科より構成されており、専門分野の異なる様々な教員（文系から理系まで）からなっている。これら教員の活性度を検証するための汎用性のあるシステムを十分に構築するには至っていない。

表 9-3-② 研究活動

②科学研究費など外部資金を導入するための活動は適切に行われていますか？

例えば、科研費の応募率や委託研究、特許取得率などを上げるための大学などでの取り組みは行われていますか？また、バックアップするためのシステムが確立されていますか？

A ほとんど確立されている B 確立されている部分が多い C 確立されていない部分が多い D ほとんど確立されていない

大学	評価	具体的内容と達成されていない部分の理由
酪農大	B	外部資金導入や特許取得の呼びかけが行われているほか、学内共同研究費の申請は科研申請をした者に限られるなど、外部資金導入を促す各種方策が採られている。また事務的なサポート体制も整備されている。
北里大	C	外部資金導入のために、各種研究補助金などの案内の通知、資料配付などは逐次行われているが、申請書本文に踏み込んだバックアップには至っていない。
日獣大	B	合同教授会の下部委員会である教育研究推進委員会において、科研費の応募率や取得率を上げるために積極的に取り組んでいる。 また、法人に設置されたTLOセンターにおいて特許や委託研究の取得率を上げるための諸施策に積極的に取り組んでいる。 なお、これらの事務担当部門として学術振興課が設置され、上記業務に対応している。
麻布大	B	本学では、「公的研究助成金事業委員会」を設置している。科研費の申請を行わない教員は公的助成金の申請者や共同研究者としての申請もできないことになっている。 特許取得率を上げるために、平成17年に「職務発明審査委員会」が法人の委員会（学長諮問機関）として設置されている。
日大	B	日本大学産官学連携知財センターにおいて特許取得時のバックアップ体制が作られている。また、科研費取得に関しては、毎年、本学部研究事務課主催の説明会が開催されるなど申請時の支援もなされている。

表 9-3-③ 研究活動

③研究活動をさらに活性化するための諸条件は十分整備されていますか？

A ほとんど整備されている B 整備されている部分が多い C 整備されていない部分が多い D ほとんど整備されていない。

大学	評価	具体的内容と達成整備されていない部分の理由
酪農大	B	外部資金導入の奨励制度以外に、教員各個に配分される個人研究費（研究奨励のための上乗せ配当制度あり）、学内共同研究費、外国留学、国際学会および国内学会への発表支援制度など様々な活性化のための制度が設けられている。ただ、教員数が少ないため教育や組織運営の負担が大きく研究活動に十分な時間を確保できないという声がある。
北里大	B	学部内における奨励研究資金、学園全体での奨励研究資金などの制度が準備され、40歳以下の若手研究者の育成に努めているが、手厚く配布する額には至っていない。
日獣大	B	大学の共同研究施設として「日本獣医生命科学大学生命科学共同研究施設」を整備した。また、文部科学省の補助事業である、ハイテクリサーチセンター整備事業及び学術フロンティア推進事業を整備し、さらに研究活動の活性化が図られた。
麻布大	D	本学で研究活動を活性化させるのに必要な対策は、人員の補充である。特に研究補助又は、新制度の助手である。それに対してはまだ実現していないのが現状である。任期制助手の採用についても検討中である。 「1教員1研究単位」を教員の独立性と研究の自由を保障する体制と位置付け、それに伴い発生する権利と義務の問題点を整理し、教育と研究体制の構築を検討している。 平成18年9月に竣工した獣医学部棟の各フロアは、附属動物病院、獣医臨床センターに直接つながっている。このことにより、構造的な問題を解決しただけでなく、動物病院へ搬入された患者の検査材料などを基礎分野の研究材料として提供することで臨床と基礎の研究分野の発展を促すシステムを構築した。
日大	B	平成16年には日本大学動物医科学研究センターおよび動物病院の増設が、および平成18年には9号館新臨床棟が建設され、研究活動を活性化するための条件は整備されつつある。

表 9-4-① 改善目標の設定

①1年程度を目処に改善を設定された目標

例えば、自己点検、授業評価のための委員会の設置など1年以内に実施が可能な項目

A 目標が設定されている B 目標が設定されていない

大学	評価	具体的内容と設定されていない場合の理由
酪農大	A	カリキュラム改訂とそれに合わせた教員数の増員（60名）
北里大	A	自己点検、授業評価については、教員の多元的業績評価委員会によって、それぞれの活動評価を還元し、教育研究活動の活性化を図っている。
日獣大	A	1. 過去5年間の入学定員に対する入学者数比率及び収容定員に対する在籍学生数比率が高いものを各学科とも入学定員超過率を1.2倍以内とし、改善を図ってきた。 2. 本学の経営母体である学校法人日本医科大学の負債も圧縮する努力をしている。
麻布大	A	獣医学部の教育理念・目標を踏まえて教養教育の充実を図るため、基礎教育組織の整備と充実を図る。19年度までに、基礎教育支援センターを開設する。 獣医学部附属動物病院を平成19年4月から麻布大学附属。動物病院とし、研究・教育機能の強化と充実を図り、教員の後継者育成機能を向上させる。さらに、研修獣医師への卒後教育や動物病院に対する技術支援・指導ニーズの増加及び高度獣医療の強化を図る。
日大	B	現在、学部において検討している。新しい形式で自己点検と授業評価が実施された。

表 9-4-② 改善目標の設定

②5年を目処に改善を設定された目標

例えば、施設・設備の充実、教員数、教育支援者の増員などその目標の実現に数年を要すると考えられる目標

A 目標が設定されている B 目標が設定されていない

大学	評価	具体的内容と設定されていない場合の理由
酪農大	A	新学科の設置、大学院の拡充
北里大	A	5年という名称は無いが、短期、中期、長期計画という名称で、毎年事業計画が策定され、施設・設備の充実、教員数、教育支援者の増員の検討が諮られている。 ここで言う中期とは3年程度、長期が5年以上である。
日獣大	A	老朽化した木造校舎を解体し、新しく校舎を建設中である。
麻布大	A	社会的要請と教育市場のニーズに応じつつ、獣医学に専門職業人を国内外に輩出するために、高度な専門教育体制の充実を図る。そのために、大学院の改革を検討中である。
日大	B	現在、学部において継続して検討している。教育支援者数の増員は図られたが、教員数の充足は未だ十分でない。

表 9-4-③ 改善目標の設定

③10年を目処に改善を設定された目標

例えば、施設・設備の充実、教員数、教育支援者の増員などその目標の設定に10年程度を要すると考えられる目標

A 目標が設定されている B 目標が設定されていない

大学	評価	具体的内容と設定されていない場合の理由
酪農大	A	教員数の増員（72名）
北里大	A	施設・設備の充実については、平成18年度に十和田キャンパスマスタープランが策定され、1期から3期までの16年に渡る教育・研究・診療施設と建物配置に関する計画がある。 現在は、この1期の段階で、新動物病院が平成19年度に、その後5年以内には体育館、新獣医棟などを予定している。
日獣大	B	10年を目処の改善計画は設定されていない。
麻布大	B	10年を見越した改善計画は設定されていないが、大学改革推進組織の設置を検討中である。
日大	A	教員数の増員目標ならびに教育・研究施設等の改善目標が示され、その実現に向けて努力している。

表 9-4-④ 改善目標の設定

④平成 14 年に行った相互評価において、「1 年程度を目処に改善目標を設定されているか」という問いに対して、設定目標は達成されましたか？

A 目標は達成された B おおむね達成された C 達成されていない

大学	評価	具体的内容
酪農大	C	<p>自己点検評価委員会の元で、学生による FD 評価を実施しているが、改善点の抽出並びに対策は、教員個々に依存しているため有効性に問題がある。</p> <p>各教員から大学自己点検・評価委員会へ、毎年研究論文・学会発表等の研究業績について報告しているが、報告に対する評価委員会からの反応はない。</p> <p>外部評価は、2007 年度に日本高等教育評価機構による外部評価を実施する予定である。尚、獣医学部のみを対象とした外部評価は実施していない。</p>
北里大	B	<p>平成 14 年に記載した改善目標は「臨床系教育充実のためのカリキュラム編成とその実現のための人員の増員策を検討中」であった。その後、平成 16 年度から臨床教育の充実を図った新カリキュラムが導入され、平成 19 年からは臨床系科目が始まる。また、5 年次の臨床系病院実習などの単位数が増設され、臨床系教員数も 10 研究室 23 名体制（完成時）を配置した。目標とした枠組みがほぼ揃い平成 19-20 年度に運用が始まる所にまで来た。</p>
日獣大	B	<p>1. 学部の分離について 獣医畜産学部を平成 15 年 4 月 1 日より、獣医学部獣医学科と応用生命科学部動物科学科、食品科学科の 2 学部に改組した。</p> <p>2. IT・学内 LAN 整備について 学内 LAN については、平成 13 年度に完成し、IT の整備については平成 15 年度に動物医療センターが完成し、その中にマルチメディア対応の教室（2 室）及び PC 室（2 室）を設置し、学生に IT 技術（パソコン操作の教育）を実施している。</p> <p>3. 日本医科大学教員との交流 平成 14 年度 6 月より、日本医科大学で実施している教育研修「臨床研修医教育ワークショップ」（年 2 回開催：臨床研修医学とあるが、両大学の教養・基礎・応用分野の教員を含めチュートリアル教育実施）に本学の教員も参加している</p> <p>4. 知的財産・ベンチャー育成(TLO)センターの設立 学校法人日本医科大学に TLO センターを平成 13 年 12 月に設立された。本学では、TLO センターに設置されている委員会に本学代表者 1 名が選出されており、TLO 関連の情報開示等が行われている。また、TLO センターの事務局が中心となって、教員等への啓蒙、特許相談が行われている。</p>
麻布大	A	<p>教育研究組織のあり方検討委員会の調整は不調に終わり、結論が得られなかった。しかし、平成 19 年 4 月から、基礎教育関わる諸問題の改善を目指して教育推進センターが設置されることとなった。</p>
日大	B	<p>カリキュラム検討委員会において練られた新カリキュラムが導入された。</p>

10. 全体の取り纏めと今後の課題

獣医師と動物医療が果たす役割に対する期待と要望が社会経済、国民生活において格段に高まってきている昨今、獣医学教育研究体制の整備・充実を図り、社会の要請に応える獣医師の養成及び動物医療の質の保証を担保することが喫緊の課題となっている。獣医師養成の基盤となる獣医学教育の修学年限が6年に延長されて20年が経過したが、医師や歯科医師と同じ高度専門職業人養成課程となった獣医学において、その教育実態が修業年限の延長に見合ったものに到達したとは言い難い現実に獣医学教育関係者は毎日向き合っており、藻掻いている。

獣医学教育の根幹は、学校教育法に基づく「大学設置基準」、財団法人大学基準協会の「獣医学教育に関する基準」、国立大学農学系学部長会議の「獣医学教育の改善のための基本指針」、文部科学省協議会の報告及び社団法人日本獣医師会の「獣医学専門教育課程の標準的カリキュラム」などの基準、指針、提言がこの20年間に検討され提示されてきた。さらに、平成19年3月には日本獣医師会学術部会学術・教育・研究委員会は、「獣医学教育改善に向けての外部評価のあり方」を提言した。これら一連の流れは、世界の獣医学教育水準から遅れをとった日本の獣医学教育、とりわけ実務教育の不備に対する自らが鳴らす警鐘であり続けているが、改善の道程は依然として容易ではない。

私立5大学は毎年輩出される約1000名の獣医学科卒業生の約7割の教育を担い、我が国の獣医師が働く各種職域と臨床現場を支えており、私立大学が果たす役割と責任は極めて重いと自覚している。これまで私どもは私立獣医科大学協会を組織し、獣医学教育・研究の充実と改善を目指して様々な活動を展開してきた。私立5大学における獣医学教育の相互評価も上記の認識の上に形成された自己点検プログラムである。これまでの経緯と背景は平成14年6月に公表された報告書に詳細に記載されているが、本調査報告書における特色は私立大学の獣医学教育の根幹である獣医学教育の理念と目標の具現化のための教育課程、教員組織、研究活動、改善目標の設定に関する各大学の自己評価項目を私学上乘せ基準として採用された点にある。前回の報告書において、平成6～10年度と平成11～12年度が集計、分析、評価された。今回の第四次相互評価委員会では、平成13～17年度までの5年間の資料について集計、分析、評価した。

1. 教育の理念と目標

私立5大学にはそれぞれ建学の精神が掲げられており、それに基づく教育の理念が設定・記述されている(表1)。さらに各大学においては、この教育理念を具現するための教育目標と育成する人材像が記述されていることは等しく評価できる。一方、近年獣医学および獣医師に対する社会の要請は高度かつ多岐に亘るに至っている。このような状況下において私立5大学は

さらなる自助努力によって社会の要請に応えうる獣医師の育成に努める必要があると考えられる。

2. 教育・研究・事務組織

前回の調査(平成14年6月の報告書)から現在までの私立5大学における教育組織、研究組織、事務組織の整備状況に関する自己評価は一様ではない。各大学において獣医学教育ならびに獣医学研究を円滑かつ効果的に遂行するには教育組織、研究組織、事務組織が効率よく連携をもって機能することが不可欠であることは言うまでもないが、各大学のそれぞれの組織の現状について「改善が必要」としている箇所が多々、見受けられ、今後とも整備と充実が必要である。

3. 財政

私立5獣医科大学はいずれも獣医学科としての組織で獣医学教育が行われているが、酪農学園大だけが1学部1学科で、その他の4大学は獣医学科を含めた複数の学科で学部が構成されている。したがって、獣医学科単独としてアンケートに回答するのは難しい面もあり、今後の財政面の相互評価については再検討する必要がある。しかし、高い学費を納入している学生に対して、その学費に見合った教育・研究環境を提供しているかを検証しなければならない。

ほとんどの大学で私学助成費補助金、科学研究費の獲得は減少傾向にあるが、それらを含めて各大学ともさらなる外部資金(委託研究、研究助成)の獲得が求められるであろう。今回は教員1名当たりの一般研究費、研究旅費および学生1名当たりの実験・実習費などについて評価した。これだけで教育・研究環境を論ずることは出来ないにしても、大学間で格差が約2倍以上になっており、研究費、実習費の少ない大学は早急に改善することが望まれる。

4. 教職員等

「新教育研究組織の規模は、72名以上の教官から成ることが望ましいが、それがただちに実現できない場合でも、当面これに準ずる規模としては、18名の教授を含む54名程度の教官から成る組織が必要最低限であろう」との平成13年の第105回全国国公立大学農学関係学部長会議「獣医学教育改善に関する臨時委員会」での提言レベル以上の教員数を5大学ともに計画している。前回の平成12年までの調査成績に比較すると何れの大学も5-10名の増員を図っており、特に臨床系教員の採用が活発となっている。教員採用の基準もこれを反映して、公募制・任期制の導入、年齢制限の撤廃、研究業績の取り扱いなど、人材確保のために幅広い選択肢を準備して努力している姿が浮き彫りとなった。しかしながら、平成19年3月に日本獣医師会からの報告書「獣医学教育改善に向けての外部評価のあり方」には55名の講義担当責任教員と18名の実習担当責任教員の合計73名という教員数の国際的教育水準に近づける努力を

期待している。その期待に応えるべき道筋を現時点では持ち合わせていない現実は苦しい。

研究業績については大学間の格差以上に学内の教員間において差が大きい。この背景には担当教育科目数など量的違いなど所属研究室によるものもあろうが、各大学における研究活動の活性化の為に、教員間の差を解消するような検証ならびにその改善のためのシステムが必要であろう。私立大学の教員1人当たりの学生数の多さは学部教育に対する負担が国公立大学に比べて多くなり、特に臨床系教員は非臨床系教員に比べるとさらに大きい。教育活動の負担の偏りは研究活動にも影響を与えており、我が国の獣医学教育における学生数では7割を占める私立大学の教育内容を充実させることが、獣医師の学術的な質の向上に直結するという自負を持ち教育改善に取り組むべきである。

5. 学生

各大学ともほぼ3,000名前後の受験者数で推移しており、依然として多くの受験生を集めている。入学者数についてはほぼ定員の1.25倍以内に入っているが、今後さらにすべての大学で1.2倍以内になるよう、努力が望まれる。推薦入学者の割合はいずれの大学においても比率は漸減している。就職率は大学間で差があり就職指導における課題は依然として多い。進学率は各大学とも年度によってばらつきが見られる

6. 教育課程

前回の調査時に較べて各大学とも専門必須科目の開講科目数が飛躍的に増加した。これは前回指摘された、獣医学教育の国際標準到達に向けての対応がなされたものと考えられる。これに対して、教養必須ならびに選択科目については多少の変動があるものの大幅な変更はない。実習時間数については、前回の調査と比較して、各大学とも大幅な変更はない。アンケートによる授業評価はすべての大学で実施されているが、学生への公表は北里大、日大では実施されていない。授業方法の改善はすべての大学で行われており、いずれの大学でも視聴覚教育の整備につとめている。また、講義内容のホームページへの事前掲載など、学生による授業評価に基づく担当者の学生へのフィードバックなどが試みられている大学もある。付属病院における研修医制度は麻布大を除くすべての大学で実施されており、麻布大も近々導入の予定である。平成12年度の調査結果に引き続き、産学交流、地域交流、国際交流ともすべての大学が実施している。

7. 施設・設備

前回調査でも指摘された各大学の施設・設備について、今回調査でも定義が不明瞭なため統一した評価をすることは困難であった。やはり教員数と学生数に対する面積比など算出基準の

工夫が必要であろう。大学基準協会が示す病院の面積は学生定員 60 名に対して 5,000m²となっている。この基準を満たしていたのは麻布大のみであったが、今回の調査で日大が新たに加わった。酪農大、北里大および日獣大も動物病院の新築・改築を実施し、面積的には基準を下回っているが、大幅な前進が認められた。動物病院を活用した教育研究を推進するには、施設・設備の充実は当然であるが、臨床教員の人員増大を早急に図らなければ、今後の臨床教育発展は相当厳しいと思われる。

8. 自己点検・評価体制

5 大学の獣医学科の全てにおいて自己点検評価委員会が設置されている。大学基準協会の認証評価を利用した相互評価システムと外部評価システムは、日本獣医生命科学大学のみが導入している。教育法で定めた認証評価は平成 16 年から始まり、それ以前にすでに認証評価を受けている大学もあるが、平成 20 年までには全て外部評価としての認証評価を受ける予定である。

9. 全国横断的評価に伴う私学上乘せ基準及び評価項目

教育課程の 8 項目に対して殆どが A から B の達成度との評価であるが、教員組織については教員数と教育活動の評価で C 判定を下している大学が多い。研究活動の項目ではほぼ達成されているとの大学が多い。改善目標の設定とその到達度についても、何れも鋭意努力しているとの評価を受けている。

10. 最後に「相互評価から相互協力へ」

私立 5 大学は、それぞれの歴史的背景を基盤とした建学の精神と教育理念を持ち、入学試験に始まり卒業に至るまでの 6 年間で我が国の獣医学に関わる人材を養成している。日本の獣医学教育水準を世界水準にまで到達させることは 21 世紀のグローバル化時代において高等教育が目指すべき改革の方向としては当然であり、その議論を尽くすまでもない。獣医学教育改善運動の中から獣医学専門教育課程の標準的カリキュラムが提言され、平成 19 年 3 月にも日本獣医師会・学術・教育・研究委員会から外部評価の提案がなされているが、教員数・教育科目に留まり臨床実習などの具体的な方策まで議論を尽くすまでには至っていない。私立大学は日本の獣医師の約 7 割を養成し、実務者として社会に送り出してきた。我が国の獣医学教育水準の向上を目指すためには私立大学の行動がその成否の鍵を握っている。例えば、標準的カリキュラムに配置された理想的な教員数と私立大学の運営とを噛み合わせることは一つの大学で独自に可能となるような数値ではなく、指導官庁・団体などの物的支援なくしては不可能であろう。しかし、教育内容・方法・教材などのソフト面において 5 大学が相互協力して教

育水準を向上させる努力は僅かな資金力でも可能となろう。21世紀の日本の獣医学教育を真に担うのは私立5大学であるとの自負心と「競争と協調」の緊張感を保ちながら、相互評価から次はソフト面を中心とした相互協力に動き出す時であろう。

IV 相互評価委員会議事録

第1回 相互評価委員会 議事録

日時 平成18年9月21日 午後3時15分～4時40分

場所 山口大学農学部

出席者 高瀬（北里大）、内田（酪農大）、金山（日大）、今井（日獣大）、西田（麻布大）、高井（北里大）

検討項目

1. 私立獣医科大学における獣医学教育の相互評価（平成13-17年）の概要
高瀬委員長から獣医学教育の相互評価について、これまでの経緯と調査方法について説明があり、第一回のアンケートに沿って年内に調査を終え、各委員で分担取り纏めを行い（平成13-17年）の評価を冊子体として平成19年6月の総会までに完成させる予定のお願いがあった。
 2. 作業分担と作業日程について
 - 1) 作業分担について
 - (1) 委員長：高瀬、事務局：高井
 - (2) 調査項目の取り纏めの分担
 1. 教育の理念と目標、2. 教育研究事務組織：金山先生（日大）
 3. 財政：高瀬（北里大）
 4. 教職員などについて：高井（北里大）
 5. 学生について、6. 教育課程について：今井先生（日獣大）
 7. 施設、設備について：内田先生（酪農大）
 8. 自己点検評価、9. 私学上乘せ基準など：西田先生（麻布大）
 - 2) 作業日程
 - (1) 前回のアンケート用紙の項目に関するコメント 平成18年10月10日
 - (2) アンケートの送付 平成18年10月20日
 - (3) アンケートの締め切り 平成18年12月20日
 - (4) 担当分の取り纏め 平成19年3月中旬頃に第2回委員会を開催
 - (5) 第3回委員会 平成19年4月2日 以上
- 注1) 電子ファイルとして集まったアンケート調査内容を平成19年1月23日付けで委員全員にCDで配布し、取り纏めをお願いした。
- 注2) 平成19年3月中旬までに各委員から担当項目の表と原稿が届き、事務局で報告書（案）として取り纏め平成19年3月21日に委員全員に送付し、第一回の校閲を依頼した。
- 注3) 3月中旬開催予定であった第2回委員会は4月2日に東大での開催に変更となった。

第2回 相互評価委員会 議事録

日時 平成19年4月2日 午後3時～4時30分

場所 東京大学農学部

出席者 高瀬（北里大）、内田（酪農大）、金山（日大）、今井（日獣大）、高井（北里大）

検討項目

1. 取り纏めの作業分担者からの担当項目の説明を頂き、その場で気の付いた点について修正を加えた。また不足情報については追加を依頼した。
2. 指摘された追加点と新たな修正点については、赤ペンで本文中に注釈を付けて、高井までファクス・郵送頂くこととした。出来れば4月中に。
3. 財務の詳細の表は取り纏めには加えないこととした。
4. 麻布大学については、高瀬委員長から連絡頂き、今後の対応を決めて頂くこととした。
5. 印刷部数把握のため、各大学の必要部数についてお知らせ頂くこととした。
6. 国公立大学のアンケート調査について、高井が北大の伊藤先生にお願いして、調査結果を頂くこととした。4月7日付けのメールで伊藤先生から情報を入手しましたので、これを整理してメール或いはプリントアウトしたものを各委員に送付致します。
7. 今後の作業日程
 - (1) 修正・追加など 4月末日までに高井に送付
 - (2) 5月連休明けには修正版を完成
 - (3) 各委員に送付し、最終確認
 - (4) 5月末には印刷・製本に
 - (5) 6月8日総会で配布

以上。

注1) 麻布大学の委員は西田先生から有嶋先生に変更となった。

編集後記

相互評価報告書が完成いたしました。昨年9月の山口大学での作業分担と作業日程の会議から9ヶ月、北里大学での平成19年度私立獣医科大学協会総会での配布に間に合いました。第四次相互評価委員並びにアンケート調査などのデータ整理と各種情報の記載にご尽力頂いた5大学の事務関係各位に御礼申し上げます。